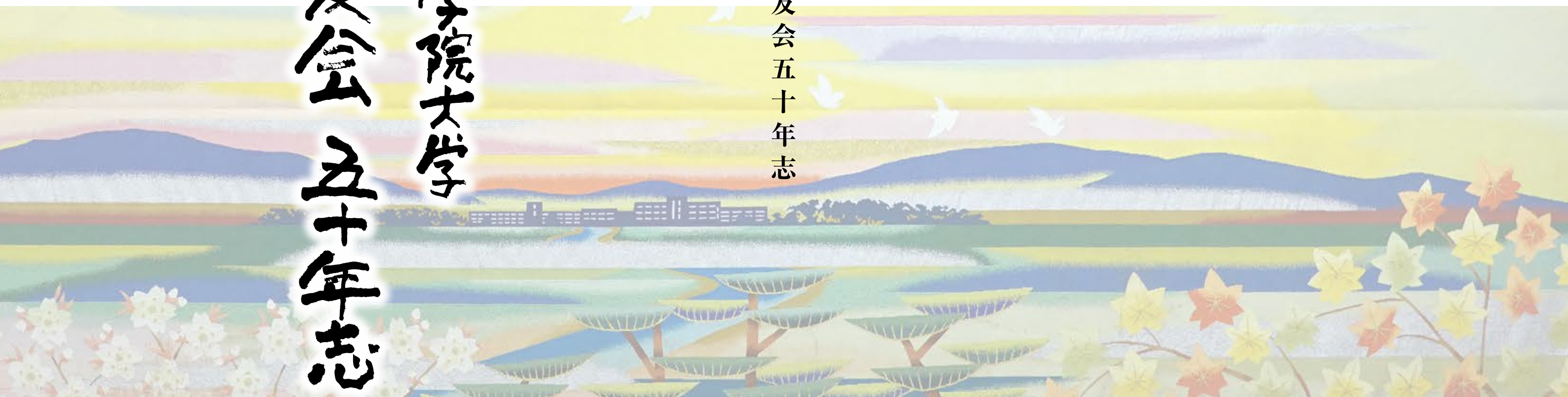




追手門学院大学校友会五十年志

追手門学院大学 校友会五十年志



追平門学院大学

校友会五十年志



茨木安威キャンパス全景

絆

青春の原点を振り返るとき
 そのかけがえのなさに思いをはせるとき
 時を超えてよみがえる日々がある
 浮かび上がる光景がある
 校友たちの学舎の今――



**Making the Future
Next 100**
 ― つながる ひろがる もりあがる ―

茨木総持寺キャンパス大学棟(アカデミック・アーク)



将軍山会館(校友会館)



アラムナイ(校友)・ライブラリー、内部のアカデミック・アリーナ





地域支部活動(ホームカミング・デーで各支部の名産品を販売)



還暦同窓会



学生表彰式(奨学金等)



茨木市の清掃奉仕活動



生涯学習社会人向け講演会(鹿児島)



女子ラグビー部の応援(秩父宮ラグビー場)



留学生との交流(奈良橿原今井町)



懇親会(ホームカミング・デー)



校友大会

躍

懐かしい友人との再会、新たな仲間との出会い
生涯を通じた学びの場。世代を超えた交流の場
卒業後も母校の発展とともに歩んだ50年——
繋がりを絆に、ここから100年の道を行く



桜クルーズ

ご挨拶

次の一〇〇年に向かって



追手門学院大学校友会 会長
藤尾 政弘

大学創立50周年記念祝賀会での卒業生（リー・ガロイヤルホテル 2016年）



紡ぐ

先人が築き上げた理念を受け継ぎ

次代へ語り継ぐために

世代を超えて支え合い、心ふれあう未来を紡ぐために

校友会は母校と共に新たな一步を築いて行く



学院創立130周年記念式典（大阪城ホール 2018年）

ここに、校友会結成五〇周年を迎えますことを正会員（卒業生）五万九三二〇名、特別会員（現・元教職員）四九九名、学生会員七六一八名の構成員全員で祝いたいと思います。歴代会長をはじめとする役員の皆様方の情熱がなければ、今日の校友会の姿はなかったかもしれません。母校のために、黎明期に立ち上がった先輩たちに敬意を表します。また、これを支えていただきました学院・大学教職員、教育後援会（旧大学PTA）、元卒業生保護者の会（旧卒業生父母の会）、山桜会などの関係諸氏のご尽力の賜物であり、厚く感謝申し上げます。

さて、追手門学院大学は、初代学長 天野利武先生により一九六六（昭和四二）年に設立され、一期生が卒業された後の二年後に、校友会（当時は山桜会大学部会将軍山会）が一九七一年に結成されました。校友会は、常に改革・進化を続けられている母校を支える最大の支援組織であります。大学と共に成長を続け、現在の組織は、一〇の委員会、国内一三支部と海外一支部、毎年実施のホームカミング・デー、校友大会、還暦同窓会、古希同窓会、ゴルフ大会等の行事、そして附設の体育文化OB・OG連合会をもって活動を展開するまでに至りました。

われわれ卒業生は、学友として同じ將軍山の丘や総持寺キャンパスで学んで、人物重視の教育を陶冶され、社会的常識・倫理観・品格を備えて社会に送りだしていただきました。そして、社会に貢献できる人材に育てていただきました。「追手門学院大学」の卒業生であることに誇りを持ち続けています。これからも生涯を通じて大きく成長し続けていきます。

母校とのご縁を大切にして、伝統を次の世代に繋げていくことが必要であります。その繋がりを生み育て支えるのが、校友会の役割の一つです。先輩たちの熱い想いを引き継ぎ、後輩たちの輝かしい未来のために貢献していくこと。これこそが、わが校友会に課せられた最大の使命であると思っております。

五〇周年という節目は、その使命を確認する絶好の機会であります。この記念すべき節目に、立ち会える校友としての喜びを皆様と共に分かち合い、次の一步を共に踏み出そうではありませんか。その思いを、結成五〇周年のキャッチフレーズがもつともよく表しております。「Making the Future Next 100 ―つながる、ひろがる、もりあがる―」です。そして未来へ向かって、共に強い絆を築き、前に進んでいきます。このことをお誓いたします。

今後とも皆様方のご期待に応えられるよう、積極的にあらゆる活動を展開してまいりますので、引き続きご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

『校友会五十年志』ご挨拶

追手門学院大学 学長
真銅 正宏

追手門学院大学校友会の結成五〇周年、誠におめでとうございます。
この節目の年に学長でいることの「幸せ」と「責任」とを共に強く感じております。

教養小説と呼ばれるジャンルがあります。ドイツ語のビルドゥングス・ロマンの訳語で、直訳すれば自己形成小説や成長小説となるところを、教養小説としたところに、日本らしさを感じるができるかもしれません。ゲーテの「ヴィルヘルム・マイスターの修業時代」などが代表的な作品とのことです。ただでさえ近代の小説には、或る主人公が何かに悩みながら困難を克服するストーリーが好まれる傾向があります。

追手門学院大学は、学生たちがこのビルドゥングス・ロマンスなわち成長小説の主人公であるために、それぞれにふさわしい舞台を準備したいと思います。

しかしながら、この物語は、個々の学生が主人公として成長を目指さない限り成立しません。

追手門学院大学における物語の展開は具体的には以下のようなものです。

この物語で、主人公は、その世界の与えられた外貌や日常性にまず疑問を持ちます。なぜこれまで、教室で教えられたことを鵜呑みにしていたのか。なぜ緑色なのに「黒」板と呼ぶのか。なぜ自分は向上したいのか。なぜ、なぜ、なぜ。

そのような素朴な疑問群のうち、もつとも興味を持つ事象について、主人公は調査を始めます。研究を行い、実験を行い、原因と理由を探り、事象の隠された側面を明らかにしていきます。

その作業の中で、時に跳躍するような発見が生じます。発見により、これまでの世界がまったく異なったものに見えてきます。その変化の理

由について、対象ではなく自分が変わったからだという気づきを得た時、主人公は成長を実感します。

次はこのことを他の誰かに伝えたくくなります。的確に、そして印象的に伝えるためには、論理的に整理し、ある場合には脚色もしなければなりません。そこで発信の技術が磨かれます。

そうして発信された自らの物語を受け取った他の登場人物たちは、批判し、称賛し、採点します。その採点結果を主人公は自らの物語に取り込み、次の章へと進みます。章はいくつも重なり、主人公は、どんな別存在へと変化していきます。この物語は、卒業式を経ても、途切れるわけではありません。

この物語の終わりは、個々の学生が自ら決めることになります。永遠に終わりは来ないかもしれません。この大学で得た疑問や気づきから出発した、何らかの学びを続けるかぎり、この大学の校友であることも続きます。

藤尾会長も校友会のウェブサイトにて「追手門学院大学卒業生として自信と誇りをもって、それぞれの世界で活躍することが母校のブランドを高め、発展に寄与することであると思っています」とお書きくださっています。現役の大学生も校友会の会員である現在、これら学生を預かる学長として、学生時代から学生に自信と誇りを与え、追手門学院大学ブランドの体現者としての学生を世に送り出すことに努力いたします。

校友の皆様、わが追手門学院大学が、素晴らしい物語を作り出し続ける舞台であるために、今後ともご支援ご協力のほど、心よりお願い申し上げます。

さらなるご発展を
祈念します

学校法人追手門学院 理事長

川原 俊明

追手門学院大学校友会結成五〇周年、誠におめでとうございます。
一九六六（昭和四一）年四月、追大開学。一期生として追高同期の仲間がたくさん入学したこともあり、私にとって追大は特別な存在です。一期生の芥川賞作家・宮本輝氏の小説「青が散る」は、開学当時の追大生の姿を伝えています。

開学からしばらくして、一九七一年に大学校友会が結成されました。当初は、山桜会の大学部会という位置づけでした。その後、大学校友会に属する会員の大幅な拡大に伴い、一九八四年、独立した校友会組織として発展されました。

近時の大学校友会活動は目を見張るものがあります。

特に林田隆行氏（文学部 一九七一年卒 二期生）が、大学校友会会長に就任されて以降、執行部のもとで学院の発展を支える強力な支援団体の地位を確立されました。

二〇一八（平成三〇）年の学院創立一三〇周年には、大学校友会から五億円ものご寄付をいただきました。このおかげで、二〇一九（平成三一・令和元）年四月開設の総持寺キャンパス大学棟（アカデミック・アーケ竣工、そしてシンボリックな図書館部分の完成に至りました。

追大が二〇二〇年度入試で八年連続の志願者増を達成し、開学以来史上最高の志願者数（二万八九九〇名）を達成できたのも、大学校友会の絶大なるご支援の賜物です。

また入学後の学生に対する支援も積極的で、潤沢な奨学資金をご提供いただき、追大生の質の向上に大きく貢献していただいています。

大学校友会からのご支援は、単なる金銭的なものだけではなく、社会人の立場から後輩へのご指導が実を結び、初年次教育において「U

Ⅰ論」科目では、直接教壇で現役追大生に社会経験を語っていただき、彼らに自信と誇りを与え、学習意欲を増大させる効果を生み出しています。

その成果が、学生の積極的な資格試験講座への参加に繋がり、二〇一九年度宅地建物取引士試験において、追大から七五名もの合格者を出したことも特筆すべきことであります。

二〇二〇年に入り、新型コロナウイルス感染症問題が世界的に拡散し、追大でも学位授与式、入学式の中止、対面授業の中止という前代未聞の事態が発生しました。しかし、追大では、BYODなど以前からインターネットを活用した教育体制の整備を進めてきた結果、ネット環境をフルに活用し、四月早々から遠隔授業を展開してきました。

ただ、世界的な経済活動が壊滅状態となり、学生の中には家計の困窮のため、学業を断念する事態も想定されました。そこで本学は「一人も（新型コロナウイルスで）退学者をださせない」と宣言し、「新型コロナウイルス対策臨時基金」を緊急創設しました。学院からは不要不急の予算執行を停止するとともに、各PTA、同窓会にも呼びかけて基金財源のご支援を要請しました。山桜会や大学校友会からは、それぞれ多額の基金財源をご提供いただくことになりました。あらためて感謝申し上げます。

大学校友会の発展は、追大の発展に繋がります。追大の発展が卒業生の自信と誇りに繋がり、卒業生の活躍が追大の発展に寄与します。

今後とも追大と大学校友会との緊密な関係を深めていきたいと思います。

校友会のさらなるご発展を祈念いたします。

結成五〇周年を祝して



追手門学院大学教育後援会 会長
笠間 優雄

追手門学院大学校友会結成五〇周年に際し、追手門学院大学教育後援会を代表して心よりお祝いを申し上げます。

私ども教育後援会は、大学が創設された一九六六（昭和四一）年に当初「大学PTA」として発足しております会でございます。追手門学院創立八〇周年記念事業として大学設置が決定された当時、追手門学院の各学校、特に高等学校のPTA会員であった保護者の物心両面の協力があった大学の開学は成し遂げられました。その保護者が中軸となり大学においてもPTAが組織されました。これが大学と保護者との強い連帯感を生み出し、本会独自の温かい血の通った活動の基調として、現在に引き継がれています。

二〇一四（平成二六）年には大学、中・高等学校、大手前中・高等学校、小学校および幼稚園のPTAで構成する追手門学院教育振興会が設立されました。また、二〇一六年には大学校友会、山桜会、大学卒業生保護者の会、小中高父母の会も賛助団体として参画され、後援各団体が連携して追手門学院を支援する体制が整いました。

追手門学院の教育理念である「独立自強・社会有為」。「独立自強」とは、自分の考えをしっかりと持ち、個性を大切にし、自らの成長に向かって日々、努力することです。また「社会有為」とは、世のため人のた

めに尽くすことです。教育後援会は、自主的自立的な精神と確かな個性を持ち、同時にまた、他者や社会のことをきちんと考え、豊かな社会性を持った人間を育てることを目標に置かれていることを十分理解した上で賛同し、追手門学院大学と在校生保護者との間に連帯感を持ち学生たちがより充実した学生生活を送れるように活動しております。

追手門学院大学校友会の皆様には、大学卒業、退職後も母校である追手門学院大学に変わらぬ愛情を持って追手門学院大学の発展、在学生への福祉の増進、教育環境の向上、教育活動・課外活動・就職活動への援助、大学諸施設設備への協力、奨学金の給付など支援活動を実施してくださり、未来ある後輩たちに対し多大なご協力をいただいております。

追手門学院大学へ我が子を通わせる保護者の一人といたしましては、力強い後押しに大変感謝しております。

今後も共に連携を強化し、追手門ファミリーの一員として一体的な繋がりを深め、より良い関係で活動を続けていただきたいと願っております。

追手門学院大学校友会が追手門学院大学と共に、今後ますますご発展されますことを祈念し、お祝いの言葉とさせていただきます。

追手門学院大学校友会 結成五〇周年 おめでとうございます！



追手門学院校友会 山桜会 会長
平泉 憲一

追手門学院大学校友会が結成五〇周年をお迎えになったことについて、小中高校の卒業生（山桜会）を代表して心よりお慶び申し上げます。

大学の歴史と同窓会の歴史とは別ですが、追手門学院大学が二〇一六（平成二八）年に五〇周年を迎えられ、そして二〇二一年に校友会が五〇周年を迎えられたということは、第一期卒業生が卒業されて二年後に同窓会が誕生し、以来、大学とその卒業生とが密接な関わりをもって五〇年間にわたって発展してきたことを示すもので、同窓会運営のあり方として誠に素晴らしいことです。このような運営は、五〇年間にわたる卒業生の皆様、とりわけ組織運営に関わった皆様の不断のご努力・ご尽力の賜物と心底敬服いたします。

同窓会の役割は、卒業生相互の親睦・母校への支援ですが、私たちの母校は、今や認定こども園から大学院までを擁する総合学園ですから、

同窓会の役割も、大学の卒業生と小中高の卒業生と分断するべきではなく、各同窓会相互の連携も不可欠です。これにより卒業生相互の親睦範囲が広がり、母校への支援も飛躍的に拡大します。卒業生は母校の教育の賜物ともいえるべき存在で、その真価は卒業後に社会にて発揮することで顕在化します。同窓会組織相互の連携は、この卒業生が発揮した真価を、広く卒業生全体・学院全体に還元し、より良い循環に資することになります。追手門学院の教育理念である「社会有為の人材育成」は、このような学院と卒業生との間の好循環の中で育まれていくと思います。

私たち山桜会も、大学校友会と手を携え、その役割を果たしていきたいと考えておりますので、学院のさらなる発展を実現するために今後ともがんばっていきましょう。

校友会五〇年の歩み

ともどもに
同じ青春の
丘に駆けし者
また再び
この丘に帰りて
集い合ひ
やれり
気品ある園
駆けゆかん
宮本輝

CONTENTS

2 口 絵

7 ご挨拶 追手門学院大学校友会 会長 藤尾 政弘

8 祝 辞 追手門学院大学 学長 真銅 正宏
学校法人追手門学院 理事長 川原 俊明
追手門学院大学教育後援会 会長 笠間 優雄
追手門学院校友会 山桜会 会長 平泉 憲一

校友会五〇年の歩み

14 序 章 追手門学院大学校友会発足に向けて
[寄稿] 本位田 祥正(経済学部経済学科 2期生)／小坂 佳三(文学部心理学科 3期生)

18 第一章 新名称「追手門学院大学校友会」として再発足
[寄稿] 土井 一憲(経済学部経済学科 8期生)／瀬川 浩司(経済学部経済学科 13期生)／足立 重和(文学部社会学科 22期生)

24 第二章 母校への貢献と校友会組織の整備
[寄稿] 堀本 裕二(文学部東洋文化学科 24期生)／樽谷 隆弘(経済学部経営学科 28期生)／廣瀬 育弘(経営学部経営学科 30期生)

30 第三章 大学改革に呼応して進化発展を加速
[寄稿] 福山 侑希(人間学部心理学科 39期生)／飛田 優衣(経営学部経営学科 42期生)

36 第四章 社会の変化に応え、新たな結束を創り出す
[寄稿] 高谷 慶輔(経営学部マーケティング学科 47期生)

42 記念対談 追手門学院大学 学長 真銅 正宏／追手門学院大学校友会 会長 藤尾 政弘

48 歴代会長座談会
初代・2代会長 関 謙二／3代・5代会長 平野 昌雄／6代会長 林田 隆行／現会長(7代) 藤尾 政弘

54 卒業生×現役学生座談会 [現役学生] 加地 龍也／田中 春那／小牧 大輔／椎橋 琉
[卒業生] 押川 新一／藤田 真由／船本 洋／大西 惇

58 寄 稿

平木 宏児(名誉教授)／水野 浩児(経営学部教授)／立花 元彦(経済学部経済学科 1期生)／道盛 正樹(文学部社会学科 4期生)／岩崎 陽一(文学部東洋文化学科 6期生)／山口 人士(経済学部経済学科 6期生)／原 健人(経済学部経済学科 8期生)／近藤 真弘(経済学部経営学科 9期生)／大塚 高司(経済学部経営学科 20期生)／手塚 大輔(文学部心理学科 24期生)／大槻 育宏(文学部心理学科 24期生)／秋吉 崇仁(経済学部経済学科 32期生)／運天 政元(文学部アジア文化学科 39期生)／松尾 駿(社会学部社会学科 44期生)／北村 志保(経営学部経営学科 50期生)

校友会の活動

71 委員会活動／支部活動等

80 資 料
校友会組織図／歴代正副会長および会員数の推移
課外活動団体等一覧／追手門学院歌

84 年 表

88 編集後記

・「校友会五〇年の歩み」扉の書は、宮本輝氏の揮毫です。この碑文は、茨木安威キャンパスにあります初代学長天野利武先生の胸像にある顕彰碑に刻まれているものです。
・「校友会の活動」扉の書は、藤尾政弘会長の揮毫です。

追手門学院大学校友会発足に向けて

―母校を見つめ続けてきた校友会

追手門学院大学が茨木市安威の地に開学してから、二〇二一（令和三年）で五十五年が経過した。

開学当時に学んだ卒業生の脳裏に焼き付いているのは、のどかな田園風景の向こう、小高い丘の上に建つ白い学舎や、毎年のように学舎が竣工し相貌を変えていくキャンパスの姿、それとも濃い緑に守られて鎮座していた月見山古墳の静かな姿か。当時を知る卒業生にとっては、レンガ調タイルの重厚な雰囲気、学舎群の間にひとときわ高くそびえる近代的な中央棟やガラス張りや吹き抜けが何とも洗練された雰囲気、食堂棟が配置された、奥行きのある丘陵キャンパスが懐かしい風景として心に浮かんでくるかもしれない。

近年、追手門学院大学は積極的な改革を進め、

さまざまな観点から大学教育のあるべき姿を問い、各界からの注目を浴びている。二〇一九（平成三一・令和元年）、茨木市総持寺に開設した新キャンパスは、そうした挑戦の象徴でもあるだろう。これからの教育の在り方を象徴する逆三角錐の大学棟「アカデミック・アーク」が、母校の新たな発展の幕開けをわれわれ卒業生に予感させている。

追手門学院大学校友会の歩みには、母校を見つめ続けてきた未来が投影されている。五〇年の時を超えて今、個性的な数多くの卒業生たちは共鳴する層を重ね、彩りを増し、社会と大学との結びつきをより多元的なものへと変えていく。今一



第1回入学式(1966年4月23日)

度、刻まれた時の痕跡をたずねる時、これからの時代に携えていくべきわれわれ卒業生の絆として何かが浮かび上がってくるのに違いない。

―将軍山会の結成

追手門学院大学に大学独自の同窓会組織設立の機運が最初に起こったのは、一期生が卒業して間もない一九七〇（昭和四五）年のことである。追手門学院には、小学校から中学、高校まで系列校の

卒業生を束ねた同窓会組織として「山桜会」があったが、一期生にとってその存在は身近ではなかった。

追手門学院は、一九六八年の創立八〇周年記念事業として、四年制大学の設立（一九六六年）、高等学部の増設（一九六七年）、幼稚園の設立（一九六九年）を相次いで成し遂げ、中心的な課題であった総合学園化を果たした。記念事業の遂行という目標に向かって山桜会の活動も活性化して



礼服姿で入学式に臨む第1期生たち
（「サンデー毎日」1966年5月15日号）

陸上競技一筋

本位田 祥正（経済学部経済学科 二期生）

私は二期生として一九六七（昭和四二年）追手門学院大学経済学部に着けた。入学いたしました。高校時代は陸上部に所属し、最後の大会直前に怪我をして出場できず。こんな状態で陸上競技を辞めたくない、大学でも陸上をしようと決意したのが入学の理由です。

大学のパンフレットにはカッコいい制服、礼服の写真とともに緑の中に立派な陸上トラックが描かれていました。ここだ！何の迷いもなく受験、しかしあのグラウンドは無く（造成前の田んぼ畑でありました、不安ながら入学すれば陸上部すらない状態にがっかり。そこで心機一転、じゃあ同級生と二人でこの大学に陸上部を新たに作ってやろうと決意しました。でも現実は厳しく、まず最初にしたことは関西学生陸上競技連盟への加入申請書の過大な作成でした。部員を増やし、校内では同好会だが陸上競技部と名乗るも一年後には加入が認められました。



オーストラリア・パース旅行中の本位田さん



馬術競技会での勇姿

そのような船出でしたが、二〇一七（平成二九年）「陸上部創部五〇周年パーティ」を催すことができ、多くの卒業生、現役学生たちを目の当たりにして、こんなに大きな人の繋がりができた、これは私たちの一歩ずつ歩んだ足跡で大切な宝物だと感激しました。今でも時あるごとに卒業生たちと集まり、誰が言ったか『くされ縁の会』。会えばいつも話題は「失敗談」とお互いの「恥部な話題」とお決まりですが、会えば心から楽しめる不思議な仲間です。

私が追手門学院大学の卒業生で第一号だと自負することがあります。それは、将来の目標を見つけれないまま卒業間近になった時、ある人の話を聞いて「そうだ建築士になろう！」と決意。建築の学校に再入学し、実務経験を経て三〇歳で「一級建築士」に合格したことです。そして設計事務所を設立。その後「一級建築構造士」も取得し建築構造設計を主な仕事としてきました。

また六〇歳から約一〇年間、乗馬の障害馬術にはまり、七〇歳を超えた今はチャリダーに変身、淀川河川敷など暇があれば（今は暇だらけ）チャリンコで徘徊しています。

今振り返れば、こんな私でもよくここまで来たものだと思つと同時に、多くの人たち（馬たちも）との出会い、その後のお付き合いが人生の中で大きなエネルギーになっていたことは事実です。

これからも、追大校友会のさらなる前進と多くの卒業生の出会いの場となることを期待してやみません。

（ロコス設計事務所代表）



旧1号館

いた。一九七〇年頃には、高等学部が茨木に移転したことで生徒数が増え、年々会員数が膨らんでいくのに対して事務体制の整備が追い付かず、大学の卒業生までは手が回らないこともあった。

そこで、大学の協力を得て一期生にアンケートを取ったところ、大学卒業生だけの同窓会を作りたいという思いを持つ人が少なくないことが確認できた。翌一九七一年、二期生が卒業するにあたり大学の協力も仰ぎながら「山桜会大学部会結成準備委員会」が組織されることになった。在学中に体育会、文化会、大学祭で活躍したメンバーを中心とする一九人の一期生に、在学生の二期生一人を加えて発起人とし、大学からは中島勝政助教授、山桜会からは会務全般を担当されていた酒井良之助追手門学院高等学部教諭が顧問についた。

在学中、一期生たちは開学時から何もかもゼロからつくり上げてきた。入学するとすぐ何もなかったところにさまざまなクラブを組織し、入学した最初の年からわずかな準備期間で大学祭をやり

遂げた。その延長線上に大学の発展のために寄与する同窓会組織の設立があったのだろう。卒業後も準備委員会での十数回にわたる議論の後、卒業生相互の親睦を図るとともに山桜会の一層の充実と発展に繋げることを基本方針に、山桜会大学部会結成を起案した。

一九七一年五月三十日、大学で設立総会を開催し、山桜会大学部会同窓会将軍山会（以下、将軍山会）は発足した。初代会長に選出されたのは関謙二氏、名誉会長を天野利武追手門学院院長・学長が務めた。

「活動の空転と新理事会」

創設はしたものの、目標とする活動内容にはなかなか至らなかった。というのも、当初は山桜会の部会運営費と正会員の納入する終身会費で運営する予定だったが、肝心の会費の徴収が進まず活動資金に行き詰まったからである。また、役員はみな社会人になったばかりで本業に忙しく、会の運営に時間を割くこともままならない状態が続いたことも影響した。

一九七四（昭和四九）年には役員間で運営に対する意見の対立があり、一人の理事を残して全役員が退任する事態に至る。赤字会計で負債を抱えていたこともあって、活動は空転した。この非常事態に助け舟を出したのが、天野学院長・学長であった。会の再建を当時追手門学院高等学部教諭の佐藤良和氏に要請したところ、会の行く末を心配していた会員たちからも賛同の声があがった。

友会・校友会の三者で結び調印した。

活動の基本方針についても検討し、会員名簿を作成して一九七九年の一〇期生卒業時を目途に発刊する、活動内容の報告や親睦に繋がる情報提供のツールとして会報を年三回発行する、という柱を立てた。また、赤字財政での再出発にあたってまずは基金を蓄えることにした。卒業期に納入される終身会費を預り金として、その利息だけで事業を行うことを目標に据えたのである。当面は最小限の範囲で活動し、経費削減のため、大阪市内に置いていた事務所も大学キャンパスにあった山桜会事務局に移した。

放送同好会から報道会放送局へ

小坂 佳二

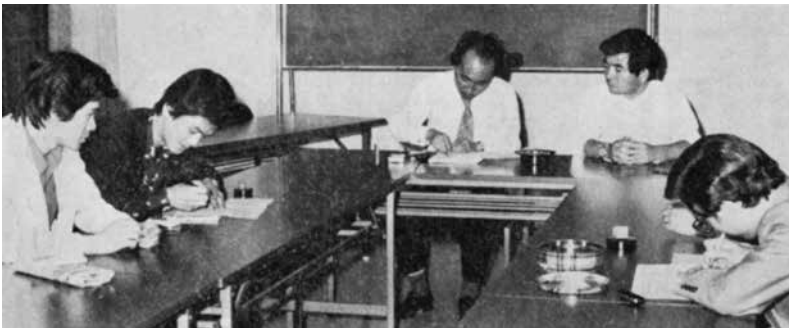
（文学部心理学科 三期生）



校友会結成五〇周年か、私も七二歳になった。三期生、入学と同時に放送同好会に入部。入部はしたが、放送室も部屋もなく、なにもなかった。新聞部の部屋に居候、新入生オリエンテーション会場で熱き思いを、同じ新入生に訴えた。先輩二名と新入生六名の八名からの出発。滑舌の練習など開店休業であったが、転機が訪れた。二号館のオープン時に放送室が設置されることになり、機材管理運営を一任されたの

だ。素浪人が大名になった。全館放送できる、番組制作ができる、この喜び、言葉では表せない。

三回生の時、放送が始まった。部員は二二名になった。その頃は大学紛争の真っ最中、関西大学との交流会で、先方を訪れると放送室がメチャクチャに壊されていた。関放連の加盟を進められたが、右も左もイヤだからと在学中は断り続けた。「大学を壊さないでくれ」と言う亡き天野学長さんとの約束でもあった。授業料値上げ問題で「今後、一切、取材は受けん」と揉めたこともあったが、学生思いのよき学長さんであった。また、大学の放送局が、どこまで中立でいられるか、やってみたかった。実力主義、後輩の尻をたたいた。体育会と文化会のマドンナ（〇名）を選出し、出演してもらった（その一人が家内ですが）。亡き竹村健一先



大学研究棟6階会議室にて校友会(左)学生部(中)将軍山会(右)の3者が
協定調印(1975年6月12日)



初代学長・天野利武先生(将軍山会
名誉会長)



校友会設立総会(1971年5月30日)



第1回大学祭(1966年11月3日)

新名称

「追手門学院大学校友会」として再発足

「本格的な活動に向けた準備期間

再発足した将軍山会は、着実に地歩を固めていった。組織面でも見直しを進め、一九七五（昭和五〇）年十一月に山桜会と共催した総会では、会則を変更して評議員制度を採用入れ、多くの会員が会の運営に直接参加できる仕組みを整え組織を強化することにした。選挙は翌年の三月に行われ、卒業したばかりの七期生も含めて八四人の評議員が誕生した。

主要事業である会員名簿の作成については、将軍山会の手で卒業生動向調査を進めていき卒業生の住所、就職先の情報を蓄積していった。

将来の会員である現役学生や校友会との結びつきを深め母校に貢献する取り組みとして、将軍山

祭への支援としてパンフレットへの広告掲載の呼びかけなどを積極的に行った。また、会報を通じて将軍山祭をはじめとする行事や施設整備の状況、入学者数、就職動向など母校の現況を共有し、行事への参加を呼びかけるなどして会員と在学生との一体感を醸成することに努めた。

大学創立一〇周年を迎えた一九七六年十一月には追手門学院大学開学一〇周年記念祝賀総会を開催し、会場では新たに製作した将軍山会旗をお披露目した。八月から会員に公募したデザインを元にデザイナーに依頼し、スクールカラーのライトブルーの地色にシンプルなマークを配した洗練された会旗が完成した。また、卒業記念品は、一九七七年三月卒業の七期生への贈呈を皮切りに現在まで



大学開学10周年記念祝賀総会でお披露目した会旗(1976年11月)

継続している。

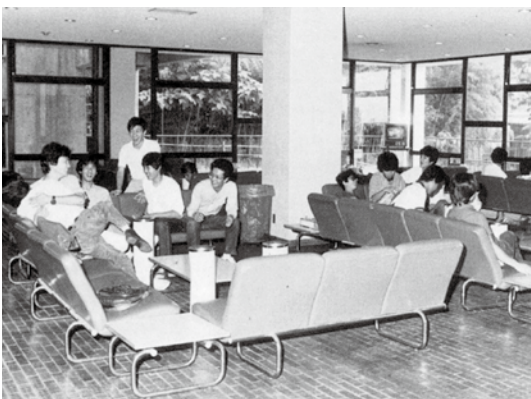
一九七七年十月、大学創立一〇周年記念事業の一つとして竣工した学生会館にデジタル時計を寄贈した。学生会館は学生活動の拠点としてホールや会議室、ギャラリーなどを備えた、学生にとっては宿願ともいえる建物だった。翌年からは許可を受ければ卒業生にも学生会館の使用ができるようになり、OB会などの活動にも使用されるようになった。また、親睦行事においても新たな企画を打ち出した。毎年の総会の後に行う懇親会に加え、新入生会員歓迎のための総会を開催するとともに、一九七四年に一度実施して好評だった優

待価格による海外旅行などを再び企画した。

役員による手弁当の活動を地道に継続し、会の運営は次第に軌道に乗り始めた。創立二〇年目を迎える頃には基金の総額も三千数百万円にのぼり、いよいよ本格的な事業に取り組み準備が整った。

「将軍山祭への参加

一九八〇年代に入ると、校友会は組織・活動ともに、徐々に充実していった。組織づくりにおいては、以前からそれぞれのクラブごとに組織されていたOB会を、組織として統合し一体感を醸成しようという構想が具体化に向けて動き出した。



学生会館旧ラウンジ

人生に生きる追大時代の二刀流

土井 一憲

(経済学部経済学科 八期生)



追手門学院大学校友会が、五〇周年という大きな節目を迎えられることは、私たち卒業生にとりましても大変名誉なことであり、心からお祝いを申し上げます。六〇周年、七〇周年と、一〇〇周年に向けて益々の飛躍をお祈り申し上げます。

私は追手門学院高等学校時に、陸上部のキャプテンを務めました。大学入学後バレーボール部に入部しました。個人競技から団体競技へ変わることですさまじい違いが浮き彫りとなり、技術も知識もない素人が大学で通用するのが真剣に考えることもなく、ただ遊

びでやったバレーボールがとても楽しかったのだ、という単純な発想での選択でした。先輩方は私のことを戦力にはならないだろうと当然の考え方をされたと思います。そこで二回生から体育会本部役員としてバレーボール部のために頑張つてほしいとお願いされ、本部役員と選手の二刀流を成し遂げるべく、必死の努力と忍耐で頑張り続け、「負けてたまるかー」と決意し、三回生秋のリーグ戦からレギュラーとしてチームの戦力に加わることでできました。

体育会では三回生秋に体育祭実行委員長を務め、その後、体育会



安倍前総理と総理公邸で。ドイツ連邦大統領ヨアヒム・ガウク氏の歓迎晩餐会にご招待をいただいた時の記念写真

委員長を拝命しました。体育会所属二七団体のリーダーとしてまとめていく難しさに直面し、追大を仲間たちと力を合わせて盛り上げていくことに、日々自問自答しながらもやり遂げることができました。当時の経験はその後の人生において、大きな影響を与えてくれたと思います。

大学卒業後はPTA、保護司、青少年指導員等地域に根差した活動を行い、二〇〇二（平成一四）年から四條畷市議会議員、二〇一三年から市長を務め、「大好きな四條畷を大切にしたい」と、四條畷市民のリーダーとして数々の行財政改革に取り組んでまいりました。私の座右の銘は、「人事を尽くして天命を待つ」。六五歳を過ぎたこれからの人生にも活かしていきたいと思っています。

結びに追手門学院の益々のご発展をお祈り申し上げます。

(元 四條畷市長)

一九八一（昭和五六）年七月、各期・各学年の体育会OBと理事が集まり、「追手門学院大学体育会OB連合会」が発足した。体育会OB連合会は大学体育会の支援に力を入れ、各クラブの試合をOBの枠を超えて卒業生で応援に行く取り組みを始めた。

將軍山祭への参加も同時期からスタートした。母校の行事である將軍山祭に卒業生として支援を行うというだけでなく、校友会として地域の方々に向け文化行事を提供する社会貢献に位置づけた取り組みでもあった。

一九八一年十一月、第一五回將軍山祭で行った「文学講演と映画の午後（ひととき）」は、その最初の催しである。第一期卒業生である芥川賞作家・宮本輝氏を招いて、「文学の方向」をテーマにした講演会と、太宰治賞を受賞した宮本作品を原作とした映画『泥の河』の上映会を開催した。会場の学生会館ホール前には開場を待つ人の列ができ、在学生や教職員、校友に加えて多数の市民が席を埋め尽くし、盛況のうちに終えることができた。

一九八三年の第一七回將軍山祭からは、「校友会將軍山会杯ソフトボール大会」も開催し、これも大学関係者のみならず広く市民にも参加を呼びかけた。

第一六回將軍山祭でのホームカミング・デーに併せて、初代学長・天野利武先生の肖像画（油彩二〇号）を校友会から大学に寄贈する贈呈式を行った。

天野先生は、二年前の一九八〇年十二月十五日

に逝去された。学長を退職されてわずか三年にも満たない間の出来事に、関係者の間には衝撃が広がった。同月二十一日に営まれた学院葬には、多くの校友も焼香に訪れご冥福をお祈りした。

肖像画の寄贈は、大学創設と教育への並々ならないご尽力をはじめ、学生・校友を温かく導いてこられた先生の業績と人柄を後世に伝えたいと企画したものである。贈呈式当日には、中村秀学長から天野先生についてのお話があり、出席者は在りし日を偲んだ。

將軍山祭への参加を開始して以降、校友会の総会は將軍山祭に合わせて母校で開催し、楽しみながら親睦を深めていった。この方針が、後のホームカミング・デーに合わせた開催に繋がり、一九九五（平成七）年からはホームカミング・デーを大学と校友会とが共催することになった。

「山桜会からの分離・独立」

一九八一（昭和五六）年十二月、追手門学院山桜会大学部会同窓会將軍山会は、役員会で新名称「追手門学院大学校友会將軍山会」への変更を決議した。実際に新名称で再出発したのは、二年以上が過ぎた一九八四年四月一日であった。単に名称を変更するだけでなく、山桜会から分離・独立し、大学卒業生だけの校友会として再発足するという大改革であった。そのため調整等かなりの時間を要したのである。さらに、翌一九八五年には名称を、「追手門学院大学校友会」とした。將軍山会の名称は愛称とした。



ホームカミング・デー



天野利武先生肖像画

一九八〇年代当時、一八歳人口の増加等により大学は発展期を迎えて入学定員増を果たしており、毎年一〇〇〇人近い卒業生を社会に送り出していた。それに比べて小・中・高の卒業生は約五〇〇人と毎年の会員数の伸びには大きな隔たりがあり、予算規模も大きく違っていた。大学が最終の出身校ではない小・中・高を卒業した山桜会会員と、大学が最終出身校の会員とではおのずと校友会に対する思い入れが違い、それは会の運営姿勢の相違となって表れてもいた。これらの機運の高まりから、分離・独立を決意したのである。

一九八六年になると、それまで足かけ四年にわたり学友会と交渉が続けてきた終身会費全納に向けての話し合いが大きく前進する。この年、学友会が校友会の活動を学生に周知する広報活動を開始し、翌年度の新会員より終身会費を四年生の授業料と同じ一枚の振込用紙にて納入する仕組みが

整えられた。これによって、それまで会費納入を呼びかけるためにかかっていた経費を学友会支援に回すことができるようになったのもメリットだった。

一九八七年三月、大学、学友会、校友会の三者が集まって終身会費納入方法を変更するための調印式が行われた。そこで互いの活動や方針を理解し合うための懇親会の開催が話題に上り、協調に向け



第1回三者懇親会(1989年6月)



笑福亭鶴瓶さん(右写真)が来校した第14回將軍山祭(1980年)のパンフレット

社会人になって活かされた 追大時代の大きな経験

瀬川 浩司

（経済学部経済学科 二期生）



一九八〇（昭和五五）年。私は將軍山祭の四人いる企画局長の一人に抜擢されました。

アルバイトをしていたMBSラジオ「ヤングタウン」の縁で、笑福亭鶴瓶さんのテレビ番組を学祭に呼

べないかと企て、関西テレビの人気番組「Midnight「abc」のブレーン会議に出席し要請。しかしスタッフの一人から「追手門より関学の方が面白いだろう。関学にしようよ」という意見が出ました。プロデューサーが「どこに関学がおるんねん。今ここに追手門が頭を下げて来てるやないか！」と一喝。追大に鶴瓶さんが来ていただけることになりました。

その後、学生課、学友会、体育会、文化会に協力をお願いし、楽しいイベントになるように企画を考え、収録も成功裡に終了しました。

リード、そして垣根を超えた組織を引っ張るリーダーシップによる牽引力で、シャープ社員時代にさまざまなプロジェクトリーダーをさせていただいた私の社会人時代に活かされました。

また、翌年は第一回日豪交換留学生に選拔され、渡豪経験では、外国人特有の日本人とは違う価値観を習得。海外営業の場で活用できました。

追大時代の自分は、人との繋がり、さまざまな経験を通して大変大きな勉強をさせていただいたことに感謝いたします。

（シャープ株式会社）

た新たな一歩になった。第一回の三者懇親会は、一九八九（平成元）年六月に開かれている。

「大学創立二〇周年記念事業の成功」

こうした基盤固めの傍ら、一九八六（昭和六一）年の追手門学院大学創立二〇周年においては、盛大な記念事業に取り組んだ。もっとも重要な事業の一つは、「校友会会員名簿」の発行である。校友会独自に名簿を発行するのは初めての試みであり、二年前の秋から地道な作業を続け、この年の十一月に発行した。

また、初代学長・天野利武先生の顕彰碑も建立した。先生の胸像を抱いた三メートルほどの高さの碑で、胸像は彫刻家・小杉三郎氏によるブロンズ製、碑文は第一期卒業生の作家・宮本輝氏が執筆した。「松籟庵」横の築山に設置した碑は、十月十八日、二〇周年記念式典当日に除幕式を行い、温厚な先生の表情がそのままに写しとられた姿が多くの特列者に感銘を与えた。現在は、將軍山会館を上った先に移築され、安威キャンパスに集う学生・校友たちを見守り続けている。

さらに、大学、校友会、將軍山祭実行委員会と協議して、大学と校友会のシンボルマークを制定した。校章とは違うシンボルマークの採用は、今でこそ一般的なC I・広報戦略の一つとなっているが、当時、大学が導入するのはまだまだ珍しい取り組みといっていた。デザイナーの提案した三案から、校友にも呼びかけて一つに選び、創立二〇周年祝賀式で披露した。

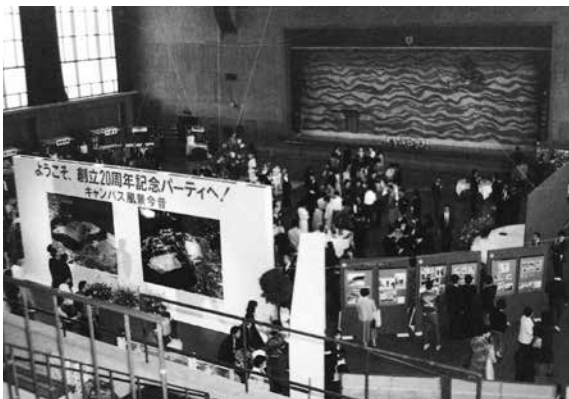


天野利武学長の顕彰碑

記念式典・講演会の開催に合わせ、校友会では記念祝賀の催しとして、創立以来の教職員および現教職員、在学生、校友会会員の総勢一〇〇〇人規模のパーティを企画した。大学と話し合いながら記念イベントの構想を固め、「母校の現況を直接見ていただくことがもっとも実りある内容となる」との意

図から、「より卒業生が参加しやすい」安威キャンパスで開くことになった。

パーティの会場となった体育館では、二〇年の時を刻



大学創立20周年記念パーティ(1986年10月)



顕彰碑除幕式(左：行田一典追手門学院理事長、右：故天野先生の令夫人と付き添う大橋陽一校友会副会長 1986年10月)



ホームカミング・デー献花式(2020年11月)

んだキャンパス風景や学内イベント風景の写真パネルが一面に飾られ、創設当時に流行したポピュラーソングが雰囲気盛り上げる。「追大二十年の歩み」のスライド上映、ゼミ担当教授と卒業生の再会コーナー、クラブOBインタビューなどの催しに、参加者は大いに盛り上がった。

大学独自の校友会として独立後に、大学創立二〇周年記念事業全体を盛り立て、さらに独自事

業を成功裡に終わらせたことは、校友会活動への関心や会員の士気を高めることに大いに繋がった。また、翌一九八七年の学校法人評議会の評議員改選期には、初めて校友会にも役員選出の依頼があり、評議員候補者を三人選出して法人経営にも参画するなど、内外に存在感を示す契機ともなった。



大学創立20周年記念パーティ
開催告知のチラシ

追大社会学の伝統

足立重和

(文学部社会学科二期生)



二〇二二(平成二四)年四月二日、私は、社会学科の新入生を迎えるために、三号館三三教室に入った。その瞬間、二五年前の記憶が蘇る。たしか自分が社会学科に入学したときも、ここでオリエンテーションやつたなあ、と。そんな私が今こうして、教員として思い出の教室に立っている。なんだか不思議な感覚に襲われた。

大学卒業後、大学院修士課程、博士課程と別々の大学に進学し、三つの母校をもつ私にとって、なかでも追手門学院大学文学部社会学科には特別な思い入れがある。というのも、追大の社会学でなければ、絶対に社会学者にはなっていないからだ。一九八七(昭和六二)年から一九九一(平成三)年当時の社会学科は、学会の重鎮から気鋭の若手まで、刺激的な先生ばかりが集まっていた。そんな一〇名ほどの教授陣のもと、

一学年の定員一〇名の学生がゼミを中心に学んでいた。バブル期のマスプロ教育全盛にあつて、かなり理想的な少人数制だった。スクールバスで利用する道路の渋滞には閉口したが、こぢんまりとしたキャンパスでは、ユニークな展開をみせる先生方の社会学を身近に感じることができた。

当時の追大社会学の特徴は、一言でいえば「カジュアル」だった。折り目正しいアカデミズムからすれば、カジュアルなど邪道だろう。しかし、先生方は、いつも身近な日常経験にこだわりの、小難しい概念や横文字を使うことなく、平易な言葉で社会の現実をアクティブに語っていた。その語り口は、日常の「あるあるネタ」を並べて、学生からの薄っぺらな共感を得るものではない。間口広くなじみあることをテーマにする



長良川河口堰問題の調査へ恩師と向かう

のだが、行き着く先には、社会や社会学の深淵が待っていた。しかも、そこでの先生方は、「教育」という使命を負っているというよりも、実に軽やかで、余裕があり、楽しそうなのだ。卒業してから三〇年にわたる研究・教育活動のなかで、私は、しばしば壁にぶつかつたが、悩んだあけく最後には「ええい、追大式じゃ」とばかりに追大社会学の学風に立ち返ることで、何とか乗り切ってきた。この学風は学会全体に知れわたっており、著名な社会学者たちがスタッフとして本学部に着任するときの理由になるほどだ。また、勉強しなと言われる今どきの学生たちも、この雰囲気から社会学のおもしろさを感じ取っている。

私は、追手門学院大学に入って、本当にいい教育を受けたと思っている。現在、日本の大学は、現場を知らない、長いものには巻かれる「的な「改革」が席卷している。そんななか、私は、この追大社会学の伝統を堅持していきたい。

(追手門学院大学社会学部教授・博士(社会学))

母校への貢献と校友会組織の整備

一 充実する大学周年記念事業

大学創立二〇周年に続き、一九九一（平成三年）の追手門学院大学創立二五周年にも校友会として記念事業を実施した。前年度の予算編成時に事業費を組み込み、着々と準備を進めた。

一つは、初版の発行から五年を経過している「校友会会員名簿」の第二回目の発行である。名簿の精度を高めることを目的とした事業だったが、一九八〇年代から同窓会名簿などの個人情報を買収する専門業者の存在が問題となっていたこともあり、事業として継続すべきかどうか議論があった。事実、校友会の名をかたって個人情報を問い合わせたり、売買された名簿を使って営業電話がかかるなどの事例も発生していた。しかし、その

ような時勢においてこそ、卒業生の信頼できるデータは校友会が保存すべきだと、名簿発行を継続することにした。

二つ目は、第一期卒業生で芥川賞等の受賞作家である宮本輝氏の著書をすべて揃えた「宮本輝文庫」の図書館への設置である。誇れる卒業生の一人として在学生に著作を知ってもらうための専用コーナーを寄贈したもので、折あるごとに追手門学院大学の名を出し、大学のサポートを行っている宮本氏の気持ちに込める事業でもあった。これが後の宮本輝ミュージアムに繋がることになった。

さらに三つ目として、著名な文化人であり開学当初から数年間追手門学院大学で教鞭をとられた竹村健一氏の講演会「新しい世界と日本」を茨木

市民会館で開催し、茨木市・茨木市教育委員会の後援も受けて市民にも公開した（一九九一年七月二十日）。当日は一〇〇人以上の聴衆を前に、竹村氏のユーモアを交えながらの巧みな話術に一時の講演時間はあっという間に過ぎ去り、その後には設けた質疑応答も活発なやり取りによって用意した時間が足りなくなるほどだった。

新機軸となったのは、国際交流事業である。会の創設時期から校友会顧問を務めてきた佐藤良和氏が中国・上海師範大学の顧問教授に就任したのを機に、同大校友会との交流を進めた。一九九〇年十月に会長以下五人が現地に赴き、相互交流に向けた覚

書を取り交わした。その内容は双方が訪問し合うこ

とに加え、研究者の相互派遣による学術交流、学生派遣、関係図書や資料の交換・提供などを通して交流を活性化し、校友会同士から大学間の交流へと発展していくことを目指した。

大学創立二五周年の一九九一年七月には、上海師範大学校友会会長で副校長でもある顧翔氏をはじめ三氏を招待した。訪問団は、追手門学院大学、大阪府立大学、大阪府日中友好付属中国語学院を敬訪問したほか、関西の旧跡古跡や天神祭の見学など九泊十日の旅程をこなした。この来日では、相互訪問による活動の継続、図書・資料な



上海師範大学校友会会長・顧翔氏ら一行を日本にご招待(1991年7月)



茨木市民を対象に講演会を開催(竹村健一氏「新しい世界と日本」)(1991年7月)

夢追日嘉栄

堀本 裕二

(文学部東洋文化学科 二四期生)



高校三年生当時、夢を博物館の学芸員と決めていたので、近道を選択し、その夢を追手門学院大学で追求することになりました。地元は姫路で、遠いところに行つてほしくないと泣いてくれた祖母には、大阪には四年間だけ、必ず戻って来ると伝えていました。その祖母も、二回生の冬に他界しました。それまでの人生で一番悲しかったことと、口にしたことは忘れられせん。

前置きが長々となりました。追大では、専門課程と資格課程とも非常に多く単位認定していただけたの

が、今でも私の自負心の根底にあります。地理歴史研究会に参加し、楽しみながら研鑽したことも、大きな思い出でもあります。さらに自分の付加価値の向上を狙うため、塾の講師を経験し、そこでは特進クラスを受け持つまでになっていました。

夢の途中でのお休みでした。学芸員の採用試験では、博士や修士も受験することもあるという現実を理解しました。その頃に大学の教務課で、吉田浩幸氏に相談に乗っていただき、夢に近づきました。同時に、高等学校での教諭か講師をしながら研究を進めていくことも考えましたが、就職浪人となりました。学芸員になるため一〇年間研究したいとの発言に、父は黙って頷いてくれました。果たせるかな、次年度に香寺町での文化財専門員での勤務が始まり、吉田氏に報告に行つたところ、「君には仁徳、人徳があるね」と言って貰ったことは、大きな励みとなりました。



大分姫島の民家石塀(平成2年3月、地理歴史研究会春合宿調査にて)

次に平成大合併があり、香寺町が姫路市と合併し、順風の日々が続いたのですが、やがて、若くして大病の診断を受けました。不思議と父もその一人であつて、年齢上、骨髄移植はできないとのこと、その人生を全うしました。一方、自身は移植を受け一命を取り留め復職存命中です。これからどんな段があるのでしょうか。

（姫路市教育委員会）

どの相互交換などの方針と互いの友好を確認することができた。一九九四年に上海師範大学が建校四〇周年を迎えた際には、慶祝式典に参列し、学術圖書を寄贈するなど、これ以降も交流は継続した。

校友会としてユニークな形で母校を支援したいという気持ちは、この頃に導入した新しい卒業記念品にも表れている。従来の卒業証書入れ（丸筒）に代わり、一九九一年三月卒業の第二期生から、大蔵省造幣局製の「ブロンズ賞牌」の贈呈を開始した。北摂の山並みを背景に一号館と学章を配したデザインである。造幣局が民間向けに記念メダルの製造を始めるという情報を得て発注したもので、造幣局にとって初の民間との契約になった。この記念品は、創立三〇周年記念事業基金の寄附者への返礼品としても活用した。

―地域支部の設立

会勢の拡充に向け、支部設立の機運が高まり始めたのは、一九八六（昭和六一）年の大学創立二〇周年記念事業の前後からであった。この頃の会報には、体育会、文化会、無所属委員会にOB連合会の設立を呼びかけたところ、地域支部を作りたという声が出てきたという記事が載っている。

実際に機が熟するのは一九九〇年代に入ってからである。当時の正会員（卒業生）数は一万八〇〇〇人を超えており、卒業生同士の交流・親睦の役割を果たすには、より親密なネットワークを可能にする支部設立を積極的に進めるべき時期にきていた。

一九九一（平成三年）の東京支部を皮切りに、大

学創立三〇周年までに全国にネットワークを張り巡らせるという意気込みで、九三年の中国四国支部、九四年の九州沖縄支部、九六年の東海支部と順調に開設が続いた。

支部開設にあたっては発起人を募り、運営は、発起人を中心としたメンバーが自主的に行っていくこととし、校友会は運営を軌道に乗せるためのサポート役に徹し、設立総会を開催するための設立準備金、活動を支援する年間一〇万円を上限とする助成を行った。一九九五年度からは、自立した運営を促進するために助成期間を五年に限ることにした。

―母校発展を支援する体制づくり

大学創立二五周年記念事業の終了時から、校友会では直ちに三〇周年に向けた取り組みをスタートさせた。その一つが、記念事業基金の募集である。一八歳人口の減少で「大学冬の時代」の到来が叫ばれ、一九九一（平成三年）に行われた大学設置基準等の改正による大幅な規制緩和もあって、大学改革は本格化し、各大学は個性を競い合うようになった。追手門学院大学もまた、時代や社会のニーズに応えた受験生から選ばれる大学づくりへ向けて動き始めており、学部・学科の新増設、キャンパス整備など山積する課題を解決するため、校友会への支援に期待する声も高まりつつあった。

着実な取り組みを進めるために、一九九三年度には委員会を新設。会の事業を担当する事業委員会のほか、国際交流委員会、広報委員会、総務委員会の四つの委員会に全役員が所属して任に当た

る盤石な体制を整えた。また、母校の発展にともに尽くすという目的で、大学校友会として独立以来ややもすると疎遠になっていた山校友会との協調も進んだ。一九九三年十二月に覚書を取り交わし、互いの校友会活動の尊重と関係の緊密化、連絡協議会の設立と定期開催を約束した。翌九四年十月に規約が発効し、両校友会が協力し合う体制がスタートした。

記念事業としては、一九九六年の五号館竣工に伴い、三面の時計のついた太陽電池時計塔を寄贈した。また、同年五月には大学創立三〇周年記念総会および懇親会を、オープンしたばかりの帝国ホテル大阪で開催した。第三回目の校友会名簿は、少し遅れて一九九九年に発行した。これ以降、

ESS入部をきっかけに経験を積む

檀谷 隆弘

（経済学部経営学科 二八期生）



大学入学の一九九三（平成五）年は団塊の世代の狭き門と言われたが、私は外部受験よりも内部進学の道を選んできました。大学では経済学部に進学し、故山中雅夫教授のゼミに入った。山中教授とはゼミ以外に当時教授が所長をしていた「オーストラリア研究所」の庶務のお手伝いをする機会があり、いい社会勉強となった。アルバイトは、ホテルの宴会担当と家庭教師。今となってはいずれも比較的に楽な仕事を選んだのかも

プライバシー保護の観点から名簿発行は行わず、校友会と母校の情報提供を確実に行える体制整備のために、会員の動向の把握と名簿原簿のより一層の整理を進めることとなった。

―阪神・淡路大震災の募金活動を実施

一九九五（平成七）年一月十七日、マグニチュード七・三の都市直下型地震が神戸を中心とした阪神間を襲い、兵庫県や大阪府に甚大な被害が広がった。阪神・淡路大震災と名づけられた未曾有の大地震では、亡くなられた三人をはじめ多くの校友、在学生が被害を被った。校友会では、直ちに役員会を招集して決議した罹災者再起復興支援活動を開始し、二月五日には大学執行部と情報交換

しれない。

中学時代から今の茨木安威の校舎まで家から約一時間半かけて通った。そういう事情もあって大学に入学するまではもっぱら「帰宅部」を通していた。転機があったのは、クラブ活動すれば車通学できるかもという誘惑心でクラブに入ったこと。文化系の比較的なクラブに入部をしようと思いついたESS英語研究部に入部した。ところが当時私含め同じ学年の部員が三名しかおらず、これが後にいろいろな経験を積んでいくきっかけとなった。二年生の時の高野山フレッシュマンキャンプでは合宿班長としてかなり精神的に鍛えられ、三年の時は必然的に部長職を担わされた。部の運営や部員の管理のみならず文化会系の行事なども任せられて、今までどちらかというと引っ込み思案だった性格



山校友会との覚書の調印交換（1993年12月）



5号館竣工に伴い寄贈した太陽電池時計塔

も必然として外交的になった。学生生活では二カ月の長い夏休みを利用し、毎年語学研修という名目でイギリスやアメリカにホームステイする経験もできた。ホストファミリーとのコミュニケーションを通じて、国境を越えた異文化交流を垣間見ることができた。

学生時代に限らず、人生には、その時々にはできない経験や、ご縁に巡り合わないといけない経験があると思う。社会人となった今、おおよそ拘束される時間もあつたり、困難な局面に出くわすことがある。当時しんどいと思った経験や貴重な体験は、意識的にさまざま問題解決を促してくれる。今この寄稿を機に、今後毎日々鍛錬は続けていきたいと思う。

（檀谷包装産業株式会社 常務取締役）



東京支部発足（1991年11月）



卒業記念メダル「ブロンズ賞碑」

を行って協力して支援を行うことを決定した。

被災地には五〇〇人以上の校友が居住し

ており、震災発生直後から安否確認や被災地救援活動に努めたが、思うに任せず、せめてもの助力をと「阪神大震災被災者再起復興支援義援金」の募金活動を立ち上げた。二月には会報の号外を発行して、義援金募金、安否情報収集などについて校友会員の協力を呼びかけた。

義援金募金活動は約一年間継続し、総額六〇〇万円が集まったところであったん取りまとめ、義援金の使途として、被災し亡くなられた会員ご家族への弔慰金と一周忌のお供え、被災会員への支援、母校への被害対策費寄贈、毎日新聞社大阪社会事業団を通じて「阪神大震災こども義援金」に寄付し、震災孤児などの支援に生かすこととした。また、この後も「阪神大震災遺児孤児支援義援金」として二〇〇七年まで募金を継続した。

「国際化に寄与する時宜を得た事業」

古箏、揚琴、琵琶、柳琴、二胡、笙、横笛、打楽器など珍しい中国民族楽器による演奏が会場に響き、聴衆はエキゾチックながらどこか懐かしい不思議な音色に酔いしれた。一九九九(平成一一)年秋、中国伝統古典民族楽器演奏団を招聘して行ったコンサートの様子である。



校友会員の協力を呼びかけた会報号外

一〇年ほど前から校友会と交流を続けてきた上海師範大学、同大学附属実験学校の教員・学生・児童一五人による演奏団は、十月三十一日から十一月八日までの来日中に、追手門学院大学、追手門学院小学校、茨木市市民総合センターを含め全七回の公演を行った。交流活動の中で上海を訪れ、その素晴らしい音色に魅了された会員の発案で、国際交流委員会を中心に二年半かけて準備を進め、校友会創立三〇周年記念行事の一環として実現したものである。

中国の民族楽器による演奏は、二〇〇〇年代前半に訪れた商業音楽としての世界的ブームをきっかけに、次第に日本人々にもなじみのあるものになっていく。しかし、この頃はまだまだ多くの人にとって未知の音楽であった。中国の民族音楽を生で楽しむコンサート開催は、異文化の魅力に直接触れる出合いの場を一般市民にも提供したという意味で、文化的にも意義のあるものとなった。そして何より、上海の子どもたちや学生たちが自国の伝統を継承して懸命に演奏する姿が観る者を感動させ、社会へ開かれたイベントとして大きな成功を収めた。

一九九九年五月には、校友会主催行事として現在まで継続している、留学生新入歓迎バスツアーがスタートしている。一九八〇年代から国家的な政策として留学生の積極的な受け入れが推進され、二十一世紀を目前にしたこの時期にはその動きもさらに加速していた。追手門学院大学でもキャンパス国際化の一環として留学生の受け入れを

発信できる人材の育成に期待する、卒業生の想いを乗せて現在も時を刻み続けている。

二〇〇〇年三月、校友会は運営方法の改革に踏み切った。当時の会員数は三万人に迫っており、毎年総会を開催し、そこでの承認を基本に諸活動を決定するという従来の方法は、すでに現実的ではなくなっていた。そこで、重要な問題以外は理事会での審議に基づいて方針を決定し、その結果について会報等を通じて会員に報告する方式に変更したのである。また、多岐にわたる諸活動を円滑に行うために委員会を設置することにした。新たな取り組みを開始するなど活動状況の変化に応じて委員を補充することで、迅速な運営を可能にすることを目指したのである。

わが学生時代

廣瀬育弘

(経営学部経営学科 三〇期生)



私が追手門学院大学に入学したのは一九九五(平成七)年四月でした。母方の祖父が大阪偕行社附属小学校を知っていたのを覚えています。

奈良県生まれ奈良県育ちの私は、茨木市安威まで片道二時間往復四時間程度かかる通学を毎日小旅行のよう感じていました。

私の入学は経営学部開設初年度でした。翌年一九九六年には、五号館が新しく完成し、エレベータ

での移動がで便利になりました。この五号館には、パソコンを各机に設置している教室があり、最新の設備に驚きました。さらに、これらのパソコンにはウィンドウズ95が標準搭載されて、初心者である私にも使いやすくなりました。



パソコンを備えたフォーラム教室のある5号館

経営学部には、経営コース・情報コース・法律コース・会計コースがあり、私は会計コースを選びました。付加価値会計の先駆者である経営学部長飯田修三先生を中心に財務会計、管理会計を幅広く学ぶことができ



新食堂棟に世界時計を寄贈

ました。ゼミの教官藤田友敬先生には、企業会計原則をわかりやすく丁寧にご指導いただきました。部活動では、地理歴史研究会に所属し、將軍山祭実行委員会に所属していたこともありました。活動のみならず懇親会・交流会も今では懐かしく思い出されます。

現在の追手門学院大学は、二〇一九(平成三一)令和元年春に総持寺キャンパスができ、先進の機能を備えた建物に圧倒されております。同年秋に行われた中学校・高等学校・大学による合同の学園祭「追手門万博」では、地域の住民と一緒に現役学生が頑張っていたのを見て、うれしく思いました。

これから益々発展していく追手門学院大学を校友会の一員として見ていきたいと思っています。

(廣瀬税理士事務所税理士)



毎日新聞社大阪社会事業団に義援金の一部を寄付



中国伝統古典民族楽器演奏団によるコンサートを開催(1999年10月)

大学改革に呼応して進化発展を加速

「学院創立一二〇周年事業への協力」

追手門学院では、創立一二〇周年の記念事業を「追手門の過去・現在の総力をあげて未来を描く」をキャッチフレーズに、持続可能な競争力を備えるためのインフラ整備をその大きな目標とした。加えて、校友会をはじめとする支援組織との一体感を醸成することも目指された。学院当局からは早々に校友会理事会对して記念事業の説明と協力要請があり、理事会も協力を約束した。

追手門学院大学では、学院創立一二〇周年と大学創立四〇周年の両記念事業を一体化させて推進していたが、校友会では、大学からの依頼によってこれらのキャンパス整備事業に協力を惜しまなかった。その皮切りとなったのは、建設から三五

年が経過した体育館のリニューアルである。耐震補強を含め全面的な改装によって美しくなった新体育館にふさわしい舞台の幕である緞帳と防球ネットを、教育後援会、卒業生父母の会とともに寄贈した。リニューアルが完成した体育館は、二〇〇四（平成一六）年一月、お披露目された。

二〇〇五年には、大学が計画した「宮本輝ミュージアム」構想に賛同し、協賛金募集を行った。第一期卒業生で芥川賞作家である宮本輝氏の全著作、自筆原稿や愛用品、インタビュビデオ、原作映画などを集め、図書館をリニューアルして新たに設けたエントランスゾーンに常設展示された。自校教育の一環として在学生に先輩の偉業を伝えるとともに、広く一般市民にも周知し、開か



宮本輝ミュージアム

れた図書館を目指そうという取り組みである。同年五月二十一日には開設記念行事として宮本輝氏の記念講演会、記念パーティなどが行われた。

二〇〇五年三月から始めた協賛金の募集は約二年間続けられ、二〇五人の校友から寄せられた総額二〇一万四〇〇〇円を大学に寄付した。

さらに、校友会では独自に、二〇〇六年四月から新入生全員を対象に入学記念品として、宮本輝氏の著作で開学時の追手門学院大学をモデルにした『青が散る』（文庫本）の贈呈を開始した。小説の登場人物を通して大学開学時の雰囲気や校友の想いを共有し、愛校心を醸成してくれればという

願いを込めて、現在も継続している。

また、創立記念事業によるキャンパス整備の掉尾を飾る二〇〇九年八月の新一号館竣工時には、教育後援会、卒業生保護者の会とともに「カリヨン12ベルモニュメント」を寄贈した。愛称は公募され、校友の作品「なごみの鐘」が選ばれた。



なごみの鐘



『青が散る』（文庫本）

学生時代に得たことと現在への繋がり

福山 侑希

（人間学部心理学科 三九期生）



追手門学院大学校友会結成五〇周年、誠におめでとうございます。私は、人間学部心理学科を卒業しました。卒業後は関西大学大学院に進学し、現在は臨床心理士、公認心理師として病院で働いています。先生方から学んだ知識や教育者としての態度は、現在も私の仕事に活かされています。

思い出深いのは、東正則先生の新入生演習です。東先生のおかげですぐに友人ができ、楽しい大学生活を送ることができました。当時は気がつきませんでした。が、今、振り返ると授業の中に人と人とが繋がるた

めの工夫がたくさんあったということが良くわかります。

ゼミは永野浩二先生でした。先生は一人ひとりの興味関心をととても大切にしてくださいました。私は笑いをテーマに卒業論文を書きました。先日「今でもあなたの卒論を後輩が借りて行くよ」と同じ、嬉しく思っています。

専門以外でも貴重な体験をさせていただきました。田中耕二郎先生にご推薦いただきタイのチュラロンコン大学に日本語を教えに行かせていただきました。当時の生徒とは今でも交流をしています。さらに、新入生の保護者を歓迎するお茶会。桜の縁のお手伝いをさせていただいたのも良い思い出です。

先生方は生徒をととても大切にしてくださいました。廊下ですれ違ったタイミングで急な質問をしても、必ず足を止めて丁寧に答えてくださいました。私も、ど

んなに忙しくても患者さんに呼び止められた時は、必ず足を止めて話を聞くように心がけています。

林田隆行校友会会長のご尽力により各支部会の活動が活発になりました。奈良支部の会は改正大祐支部長が大学と卒業生を繋いでくださっています。前回心理学部長の浦光博先生が笑いの心理学についてご講演くださり、学長の真銅正宏先生も懇親会に参加しておられました。学長自ら支部会に参加されることにとっても驚きました。そのご縁で、上方文化笑学センターの客員研究員の仲間に入れていただきました。卒業してもなお、繋がり続ける交友関係があるのは、追手門学院大学の最大の特徴ではないかと思っています。

追手門学院大学には、これからも社会で役に立つ人間の育成を期待しています。追手門学院大学と校友会の益々のご発展を祈念しております。

（医療法人恒昭会 藍野花園病院 臨床心理士）

新一号館への建て替えに関連して、開学時から大学の歴史を見守り続けた旧一号館の取り壊しを受け、それをモチーフとする卒業記念品の賞牌をとりやめ、学友会からの要望を情報収集する中で、自費購入となつてゐる卒業アルバムとの経済的負担が大きくて購入する学生が少なく、撮影に参加する学生も少ないという状況を知つた。追手門学院大学で過ごした学生時代を振り返る価値あるツールとして全卒業生に届けるべきものだという観点から、卒業アルバムを卒業記念品(校友会入会記念品)として贈呈することに決め、二〇〇八年三月卒業の第三九期生から現在まで継続して実施してゐる。

宿願をかなえた校友会館の建設

学院一二〇周年、大学四〇周年記念事業の中でも、校友会にとつてのハイライトとなつた事業は、校友会館の建設である。総合的キャンパス整備が行われるのに合わせ、校友会には宿願であつた校友会館の建設をぜひ実現したいという機運が高まり、二〇〇四(平成一六)年七月の理事会で会館建設推進が決定した。早速、建設準備委員会を組織して法人や大学との協議を進めることになった。

校友会館は、校友会活動の拠点として校友同士、校友と在学生との交流を促す場とすると同時に、大学・学院の歴史に関わる資料の収集・展示を行うアーカイブ施設として、在学生への自校教育や一般市民への広報に活用することが構想され

繁に使った通学用の制服は傷みが早く、保有していなかったが、卒業生から寄贈があった。

開館後、展示室ではクリエイターとして活躍する卒業生の個展のほか、ホームカミング・デーに合わせた時期を中心に、クラブ活動の歴史など多様なテーマの企画展が毎年開催されている。

地域支部の活性化と広報活動の充実

周年事業としての学部改組やキャンパス整備などの大学改革が積極的に行われ、法人や大学など

夢を叶える手助けをしてもらったこと

飛田 優衣

(経営学部経営学科 四二期生)



この度、追手門学院大学校友会におかれましては、結成五〇周年を迎えましたことを心よりお祝い申し上げます。

私が追手門学院大学に在学いたしましたのは二〇〇七(平成一九)年から二〇一一年の四年間になります。思い返せばあの頃は、部活動やアルバイトに明け暮れ、仲間と遊び疲れて授業中は居眠りなんてこともよくある学生生活を過ごしていました。しかし、そんな私にも一つだけ信念を貫き通したものがありません。それは「教師になりたい」という夢でした。経営学部なのに教師を目指すということに疑問を感じる人は少なくありませんでしたが、私は、幅広い分野を学

た。二〇〇六年からは校友会事業委員会の中に建設委員会を設置して具体的な建設計画を検討し、年末には周年記念事業の一環として校友会が大学に建設費用約二億円を寄付して建設を進めることを正式に決定した。

約九月の建設期間を経て、二〇〇八年六月二十八日、校友会館は無事に完工の日を迎え、祝賀に駆け付けた多くの校友の前にそのモダンな姿を披露した。名称は「將軍山会館」。多くの校友や在学生に親しまれ、とくに古い会員には校友会自体の名称としても愛着のある「將軍山」を冠した呼び名は、校友・在学生の交流と親睦の拠点にふさわしいものとなった。竣工祝賀会では、校友会である宮本輝氏もあいさつに立ち、他の校友たちとともに新しい拠点の完成を喜び合った。また、大学より竣工祝いとして「青が散るによせて」(坂上楠生作)の絵画の贈呈を受けた。

白い瀟洒な佇まいの將軍山会館は、キャンパスに違和感なく溶け込むよう、ヒューマンズスケールを意識して高さを抑えたデザインになっている。開かれた施設にふさわしく、風が吹き抜け、周辺の豊かな緑と連続する開放的な空間も特長である。大学・学院の歴史をパネルなどで紹介する展示室は、大阪城の石垣を模した石積みの中の展示が行われ、それらを見ながら建物の中を回遊できるようレイアウトが工夫された。展示物の収集にあたっては、会報などを通じて校友へ広く寄贈を呼びかけた。制服の礼服は保有していたが類

の広報活動が活発化したことは、校友の交流活動に新たな機運を呼び起こした。二〇〇六年十月二十九日に開催されたホームカミング・デーの機曾を利用して始動した、複数の学科卒業生が交流会を立ち上げたこともそのひとつである。

一つは、心理学の卒業生たちの集まりである。二〇〇五年度に心理学部へと改組転換し、地域の心理臨床を担う機関として地域支援心理研究センターが新設されたことを契機に、四〇年にわたる心理学の歴史を振り返り旧交を温めるとと



ゼミ仲間とともに

ぶことで得ることのできるたくさんの方の知識は、子どもたちに授けることのできるかけがえのない強みになると考え、この追手門学院大学を志望しました。

夢を実現させるた

め、中学校の社会科や
高等学校の商業科の教
員免許の取得に精進す
る一方、神戸親和女子
大学の通信教育部に入
学し、小学校の教員免
許の取得にも励みまし

た。インターシップでは、追手門学院大手前中・高等学校にお世話になりました。茨木市の小学校では、ボランティア活動をさせていただきました。追手門学院大学

に携わるたくさんの方々に、夢を叶える手助けをしていただいた四年間でした。

大学を卒業した私は、大阪府で一年間の講師経験を経て、神奈川県の小学校に教諭として赴任し、今は故郷である和歌山県の小学校で教諭をしています。自由奔放な学生であった私を、温かく受け入れ大切に育ててくださった追手門学院大学の教職員の皆様や仲間たち、地域の皆様からのバトンを受け継いで、今度は私が未来を担う子どもたちを大切に育てていきたいと思っています。「夢は叶う」ということを教えてくださって、ありがとうございました。

今でも追手門学院大学で過ごした日々の思い出は、私の心の支えとなっております。末筆ではございますが、追手門学院大学校友会の益々のご繁栄を心からお祈り申し上げます。

今生の夢追の楽しみです。

(和歌山県海南市立内海小学校教諭)



将軍山会館に飾られているのは旧1号館の塔に掲げられていた校章



大学より校友会に贈呈された「青が散るによせて」の絵画



將軍山會館(校友會館)(2008年6月)

もに、心理学部への支援・交流の活動を盛り上げようという意図で心理学科卒業の校友に呼びかけ、三〇人以上の参加者が集まった。もう一つは、社会学科の卒業生七六人が立ち上げた、社会学部支援同窓会「ソキウス」である。この日、設立総会を開き、社会学部への支援と継続的な活動を申し合わせた。

さらに、地域によっては沈滞気味になっていた支部活動についても、改めてその活性化を目指して活動の支援に力を入れることになった。その甲斐あって、東京支部では二〇〇八年十二月、数年ぶりに支部総会と懇親会が開催され、これを機に活動が活発化した。また、二〇一〇年二月、久しぶりの新支部として京都支部が結成されたことはうれしいニュースだった。さらに同年七月には、中四国支部が総会を開き、以前から懸案となっていた中国支部と四国支部との分離・独立を果たした。少しでも距離を縮めて交流を活発にしたいと二〇〇〇年に岡山分会を発会させるなど、長い間交流のあり方を模索してきた結果、それぞれの地域に分かれて活動することにより緊密な交流を図ることになった。

交流活動促進の要となる広報活動についても、この時期にさまざまな改革の試みを行った。二〇〇六年三月にはホームページを立ち上げ、幅広い世代にわたる、より多くの会員に向けた校友会情報の発信を目指すことになった。また、二〇一〇年四月には会員を対象にしたメールマガジンを発行し、登録者を広く募った。このことは、

役割を担うようになったのである。

国際交流・キャリア開発支援の取り組み

校友会として、追手門学院大学の取り組みを支援する活動も、より活発に行われるようになった。その一つが、二〇一一（平成二三）年の大学創立四五周年に合わせ、二〇〇九年から大学が国際化の進展を目標に取り組んだ「国際交流推進年」への支援である。国際交流推進年では、海外セミナーや海外ボランティアなど学生の海外体験への支援をはじめ、古くから大学間の学生交換制度を通じて関係の深いインド、オーストラリアの文化・歴史イベントなど多岐にわたる取り組みを行った。中でも目玉となったのは、二〇一〇年に開催された上海万博への大学としての参加であっ



クジャラート大学(インド)の交換留学生を自宅に招く天野学長

校友会主催行事や在学生のクラブ情報など最新情報をいち早く届けるプッシュ型の情報発信によって、情報コミュニケーションの形をより進化させることになった。こうした情報のデジタル化の一方で、同三月十五日発行の第六九号から校友会報のカラー化を実現し、より読みやすく親しみのある紙面に向けた刷新を行った。

このような広報強化の背景には、学院創立一二〇周年を契機にして、在学生や卒業生、その保護者、教職員など多くの関係者が「オール追手門」として力を合わせ、志願者増や知名度向上など学院の発展に力を尽くすとともに、卒業生や在学生の保護者に向けて生涯学習の場を提供する動きが活発になったことがある。校友会独自の行事だけでなく大学発、法人発の交流・学習行事も含めてより幅広い発信を行い、多くの校友に参加してもらったためにより細かなコミュニケーションが必要とされたのである。

たとえば、大阪城スクエアでは英会話、伝統芸能など趣味や生活に役立つさまざまな講座、著名人による講演会などを開催し、学院関係者の知的好奇心に応えた。また、二〇〇九年からは、神戸、和歌山、金沢などで、校友や在学生の保護者などを対象に、時代に合わせて変革する追手門学院大学の教育の現状を知ってもらう出前講義スタイルの講演会を行い、終了後に親睦を図る追手門学院大学アワーも開催された（二〇一二年度まで）。このようなイベントの告知や開催報告も会報やWEBを通じてきめ細かく行い、校友の関心を高める

た。日本産業館に設置されたJALステージを六日間借り切り、少林寺拳法部や中国武術部、吹奏楽団、チア・リーダーディング部が演技・演奏を披露。校友会では、校友のアメリカ民謡研究部OB四人が参加するとともに、在学生の派遣について支援を行った。

そのほか、継続的に実施している留学生歓迎バスツアーに加え、中国、インド、オーストラリアからの交換留学生へのインタビューなどの取り組みを行い、キャンパス国際化に向けた支援に努めた。また、二〇一〇年十月、追手門学院大学と上海師範大学が学術交流協定を提携するにあたっては、校友会として長きにわたって深めてきた同大学・同大学校友会との親交を基盤に協力・支援を行っている。

歴史と経験のある国際交流支援の一方で、新たに取り組んだのがキャリア開発支援である。日本ではリーマン・ショックと呼ばれる二〇〇八年の金融危機による世界同時不況の影響で、二〇一〇年三月卒業生以降、数年にわたって大卒求人数が大きく落ち込み、大学の就職支援部署との協力体制で支援に乗り出した。大学のキャリア開発関連科目の学外講師やキャリアガイダンス、セミナーなどの講師・パネラーとして校友に協力を仰ぎ、実施に協力した。また、このような大学での活動は、追手門学院中・高等学校、追手門学院大手前中・高等学校でのキャリア教育・高大連携プログラムの一環である特別講演会の実施へと繋がっていった。



上海万博・日本産業館「追手門学院ウィーク」でのステージ



追手門学院大学アワー



校友会での卒業生による講演

社会の変化に応え、新たな結束を創り出す

一組織改革を進め事業を活性化

二〇一一（平成二三）年、追手門学院は、創設者の名前を冠した卒業生の顕彰制度「高島軻之助賞」を設け、七月に第一回受賞者の表彰式を行った。選ばれたのはともに大学の卒業生である、芥川賞作家宮本輝氏（二期生）、冒険家（アドベンチャーサイクリスト）中西大輔氏（三三期生）の両氏であった。これに先立つ六月には校友有志によって、宮本氏の代表作の一つ『泥の河』の記念文学碑が、作品の舞台となった安治川（大阪・中之島の西端）沿いの湊橋南詰に建立された。水都大阪の活性化を目指した「川の駅」の一つとして、校友の経営する船会社のリバークルーズ船発着所が認定されたことをきっかけに立ち上がった社会貢献の取り

組みであった。二〇一〇年代、校友会はさまざまな新しい試みに挑戦し、母校を力強く支援するとともに校友同士の結束を今まで以上に強め、交流親睦の場を超えた新しい同窓会像を社会に示していくことになる。校友の顕彰は、その先駆けとして素晴らしい人材を輩出する母校と校友会の存在を改めて印象づけるできごとにもなった。

二〇一六年に迎える大学創立五〇周年が視野に入ろうとする頃、校友会では大幅な組織改革を行った。四万人に迫ろうとしていた校友の交流をさらに活発にし、これまでにないレベルの大学改革が緒についた母校の支援強化を目的として、抜本的な見直しを進めようというものであった。その柱の一つは、事業について協議し実行を担う評議



『泥の河』記念文学碑と宮本輝氏

員制度の改革である。機動力の向上と若い世代への校友会活動の浸透を目的に、各卒業期に一学部一人以上の評議員就任を努力義務としたことで、役員のマンパワーは充実し事業の活性化に繋がった。もう一つの柱は、委員会の再編である。二〇一三年度には、事務局、総務、企画渉外事業、広報、支部・同窓会支援、体育文化振興の六つの委員会を常設の委員会としてその担当する職務を明らかにし、必要な人員が確保できるように組織を整備。また、会長を補佐する副会長が、各委員会を所掌分担する体制に変更した。さらに、広報活動のＩＴ化促進、追手門学院諸団体、大学教職員・学生・学友会との交流なども基本的な運営方針に盛り込まれた。

この運営方針に従って各役員は担当職務に力を入れ、既存事業の充実や新規事業の開拓を意欲的に進めた。たとえば、二〇一三年十一月に実施したホームカミング・デーは、大学創立五〇周年を盛り上げる原動力になろうという意気込みで一大リニューアルを行った。例年開催されている校友会総会に加え、クラブＯＢ会、学年別同窓会、学部学科同窓会をすべて同じ日に実施。第一部総会、第二部総会懇親会、第三部大同窓会と繋がりを持たせたことで参加の勢いが増し、総会に約二二〇人、懇親会に約五八〇人、大同窓会にも三〇〇人に近い校友が参集した。また、大学グッズや地域支部からの名産品など、ご当地商品を出品する物品販売もこの時からスタートした。支部活動のＰＲに繋がったことは言うまでもなく、校

友や学生との新たな出会いも生まれた。こうして成功裡に終わったホームカミング・デーは、翌年から校友会主催で行われることになった。

※支部の強化にも力を入れた。二〇一四年から支部長会議を充実させ、活動方針や支援体制の周知、各支部の情報交換、ホームカミング・デーでの地域特産品販売事業の協力依頼などを行ってともに校友会活動を推進する仲間としての絆を深めていった。支部設立にも精力的に動き、二〇一五年には沖縄支部、和歌山支部、滋賀支部の三支部、二〇一七年には兵庫支部、奈良支部の二支部が相次いで誕生した。

一クラブOBの組織化とＩＴツール導入

校友会組織の充実を、課外活動を通じた在学生への支援・交流と一体的に行う新たな取り組みも始まった。課外活動による交流は、二〇一一（平成二三）年のオープンキャンパスで行った現役・卒業生のコラボ演奏会など一部では進んでいたが、これ以降は、体育文化振興支援委員会のリードで本格的な支援に動くことになった。大学強化クラブ指定などによってスポーツ活動を後押しし、課外活動全体の活性化を図る取り組みに協力し、校友会としてバックアップするためである。二〇一三年、体育会・文化会のクラブ・同好会のＯＢ会代表者による在学生のクラブ活動サポートについての協議を開始。卒業生による試合の応援とともに、二〇一四年には、オープンキャンパスでクラブ・同好会体験見学会「チャレンジ部活」



在学生のクラブ活動をサポート・幕の贈呈(2014年)

※地域支部活動
地域支部の活動も、大学創立五〇周年前後から特色あるものになっていった。二〇一六（平成二八）年十月に開催された中国支部総会は、学院校地のある岡山県・蒜山を舞台に、校友に加えて在学生や留学生も参加できるツアーとして企画され、一〇〇人ほどが参加して賑やかな催しとなった。そのほか、著名人や大学・学院関係者による講演会、酒蔵見学、クルーズ観光など、参加する楽しみも追求した行事が行われている。

を開催するなど具体的な支援活動に取り組んだ。二〇一五年には、さらに充実した支援のために各団体のOB会活動を束ね、課外活動の一層の充実、在学生の安全・安心な部活動をサポートする組織として体育・文化OB連合会が発足した。同会は、体育文化振興支援委員会と協力して、新たなOB会の設立など課外活動に関わる交流の促進も担った。

IT活用で、校友同士の繋がりを側面から支援する取り組みも進んだ。二〇一三年には校友会のFacebookを開設し、コミュニケーションツールとしてSNS活用を始めた。また、二〇一五年からは、新たな交流支援ツールとしてWEBシステムを導入し、校友同士の繋がりをサポートした。さらに同年、追手門学院大学と校友会との交流活性化プロジェクトを立ち上げ、社会で活躍する卒業生を広く紹介する交遊誌『LinkA(リンカ)』を創刊した。ネットワークを広げるのはもちろん、外部からの校友へのアクセスも可能にすることで、追手門学院大学のブランド化にも貢献する新たな取り組みとなった。

「大学五〇周年記念事業と学生支援の加速」

二〇一六(平成二八)年は追手門学院大学創立五〇周年のアニバーサリーイヤーとして、四月の天野初代学長墓参会、七月の記念祝賀会を大学と共催した。祝賀会はリーガロイヤルホテルを会場に行われ、五〇〇人を超える卒業生(校友)が集い、大学と校友会が協力してイベントに取り組んだ記

ら大学院に進学した修士一年生を対象とした支援や資格取得支援をスタートさせた。二〇二一年度からは、卒業生の子弟を対象にした入学祝い金支給制度も開始する予定である。

「母校の未来へ向けた力強い支援」

大学創立五〇周年の後、二〇一八(平成三〇)年に迎える追手門学院創立一三〇周年を期して、追手門学院大学が目指す未来像が提示された。大規模総合大学という目標、先端領域を学ぶ新学部の設置、新キャンパスの開設、地域社会との連携・協働。時代のニーズに応えた新しい大学の実現に向け、同窓会組織が今まで以上に大学や組織間の連携を深め、総力を高めることが求められた。情報発信・交流ツールの協働が進められ、二〇一六年九月発行の会報八二号より学院発行のコミュニケーションマガジン『mon』との連携が始まり、合併号を年一回発行することになった。また、二〇一七年には学院に同窓会組織の事務を取り扱う校友課が設置され、校友会と山桜会の事務局業務が統合し大手前キャンパスの大阪城スクエアに移転した。

二〇一九年四月、学院創立一三〇周年記念のメイン事業として、茨木市内、安威キャンパスの南東約二キロの場所に新しい茨木総持寺キャンパスが竣工した。JR京都線に開業した新駅、JR総持寺駅から徒歩約一〇分という好立地である。校友会は新キャンパス建設のために五億円を寄贈し、大学棟の中核をなす図書館、そして校友ラウ

ンズに日本語スピーチコンテスト後援などの留学生支援と、幅広く行ってきた。これらに加えて、二〇一六年からは將軍山奨学金制度を創設、支部がある地域から進学した学部一年生、内部か



留学生とともに(岡山蒜山校地)

念すべき行事となった。それに先立って五月に行われた大学主催行事の追手門学院大学創立五〇周年記念式典では、活躍する卒業生を顕彰する荣誉フェローの称号が、第一期卒業生で芥川賞作家の宮本輝氏、第八期卒業生で株式会社フジオフードグループ本社代表取締役社長、現在の校友会会長の藤尾政弘氏に授与された。また、この年のホームカミング・デーから学部同窓会を開催、新旧各世代の卒業生(校友)の交流ができる環境が整った。

また、学生への支援も新たなフェーズを迎えた。従来から学生代表組織である学友会と年に二回程度懇親会を開催し、二〇一〇年からは大学の発展に寄与し、学生の模範となった学生に対する学生表彰を行ってきた。また、二〇一三年から学友会と共同で始めたJR茨木駅、阪急茨木市駅周辺での清掃活動、二〇一四年から実施している地方出身の新入生のネットワークづくり支援、さらに日本語スピーチコンテスト後援などの留学生支援と、幅広く行ってきた。これらに加えて、二〇一六年からは將軍山奨学金制度を創設、支部がある地域から進学した学部一年生、内部か



アラムナイ・ライブラリー

ンジ・執務室が設けられた。また図書館は、卒業生・校友を意味する言葉を冠して「アラムナイ・ライブラリー」と名付けられた。

校友会自身にも、未来へ向けた胎動が始まっていた。その一つが、二〇一八年四月に導入した学生会員制度である。校友会の終身会費を在学中から分割納付することで負担を軽減すると同時に、学生会員として在学生を校友会の一員に加えることにより、在学生の支援をより一層充実させ、在学生と校友との結びつきを深めることを目指した試みである。

学生会員が全入する二〇二一年は、校友会結成五〇周年を迎える節目の年でもある。新しい校友

茨木総持寺キャンパスのシンボルとなるのは大胆かつ斬新な逆三角錐の大学棟



茨木総持寺キャンパスのアラムナイ図書館。いくつもの書棚に蔵書が並ぶ空間は、学生が教室を移動する際に頻繁に通る抜けるオープンな構造となり、そのたびに知的好奇心を高められる仕組みになっている(ディスカバリ・プロムナード)



『mon』(2016年9月)



『LinkA(リンカ)』創刊号(2016年11月)

会の船出に向け、二〇一九年には組織の見直しを行った。その一つは、学生会員への支援事業の企画・推進を担当する学生支援委員会の設置である。学生が教職員とともに大学の発展のために活動する学友会として二〇一七年十一月に改編された「追風」との交流を深め、共同で行う事業によって相互の結びつきを強めていった。また、予算執行や事業執行状況を管理し、財政シミュレーションを行う財務委員会も新設した。校友から預かった会費を母校の発展や会員の交流のためにより有効に活用し、大型事業を完遂するためにはなくてはならない職掌である。

さらに、今後ますます活性化が期待されるホームカミング・デーの企画・運営を行う実行委員会を常設とし、活動の充実を図ることになった。その初仕事となったのが、二〇一九年六月、茨木総持寺キャンパスを会場に開かれたホームカミング・デーである。旧交を温める行事とともに、地域への新キャンパスお披露目の意味も込めて一般向けのスペシャルイベントが複数用意された。目玉は、校友会結成五〇周年記念として行った、作家・宮本輝氏と真銅正宏副学長（現学長）の対談である。「『青が散る』から『野の春』まで」をテーマに、エピソードも織り込まれた心温まるトークが展開され、その独自の世界観に引き込まれる珠玉の時間となった。また、茨木市長や大阪観光局局長、茨木商工会議所会頭、理事長、学長が茨木と追手門の未来を語り合うシンポジウムや、茨木でのビジネスチャンス拡大を目的とした交流会

など、地域と大学、そして約五万五〇〇人の校友が一体となって前進するこれからの追手門学院大学校友会の姿を象徴する催しとなった。

「結成五〇年の伝統を未来へ繋ぐ」

二〇二〇年は、翌年に迫った校友会結成五〇周年に向け、記念事業の具体化を進める年であった。二月には既刊の「將軍山会報」、「校友会報」の第一号から九〇号までまとめた縮刷版を発行、その足跡をいつでも振り返ることができるようアーカイブ化を果たした。また、六月には、五〇周年の節目を期して校友会のキャッチフレーズを発表した。「Making the Future Next 100 ーつながる ひろがる もりあがるー」というもので、五〇年の伝統の重みをかみしめ、母校と校友会の次の一〇〇年へとつないでいくという想いを込めたものである。三月には、二〇一九年のホームカミング・デーで行った宮本氏と真銅副学長の対談を対談集『「青が散る」から「野の春」まで』として出版、電子書籍化も実現した。

その一方で、実現できなかったり、形を変えて行わざるを得なかった行事も数々発生した。二〇二〇年の年明けから世界中を巻き込んで発生した、新型コロナウイルス感染症の大流行による影響である。感染を避けるために、マスクの着用やソーシャルディスタンスの保持、外出・外食・イベントの自粛が要請された。校友会も、四月の段階で、九月までに予定していたすべての行事の中止を決定せざるを得なかった。学院では、五月、コロナ

禍の影響で学修継続に影響の出ている学院生のため「新型コロナウイルス対策臨時基金」を設立。校友会は、七月、この基金に一億円の財政支援を行い、大学生をはじめ幼稚園児・小学生児童・中高生徒、すべての学院生と教職員等約一万三〇〇〇人を対象に、マスクとマスクケースを配布した。

コロナ禍でテレワーク、在宅勤務などが普及し、社会のいたるところでコミュニケーションのあり方が変化した。校友会では、こうした変化に対応する試みの一つとして、十一月一日、ホームカミング・デーをライブ配信で行った。直接会え

グッズコンテストと学友会

高谷 慶輔

（経営学部マーケティング学科 四七期生）



校友会創立五〇周年おめでとうございます。これまで長年にわたり在学生を支援し貢献してくださった役員の皆様に感謝申し上げます。

さて、大学生生活を振り返ると四年間のほとんどを学内で朝八時から夜二〇時まで過ごしていました。一限から授業を取り、図書館で本を読み、他の時間はBOXにいるか学内で学生補助員（SA）としてアルバイトしていました。そのような私の思い出はグッズコンテストと学友会での活動です。

一つ目のグッズコンテストは大学五〇周年を記念したグッズを考える大会で私が出場したのは記念すべき



第1回グッズコンテストで優秀賞を受賞

ないもどかしさはあるが、その一方で、写真や動画を使った臨場感のある発信、母校から遠く離れている校友や校友以外の幅広い人たちと経験が共有できる新たな手応えも感じる事ができた。

ウィズコロナの時代の中で、校友会として何を变え、何を変えてはならないのか、そして母校と校友会に何ができるのか。自らに問い続け、さらにより良い活動へと引き継いでいかなければならない。次の一〇〇年へ向けて、未来を創るために。つながる、ひろがる、もりあがる、校友たちがいつでも戻ってこられる場であり続けるために。

第一回大会でした。友人と共に、恩師である八木先生や葉山先生などからアドバイスをいただき、大勢の人前で緊張しながらプレゼンしたことを今でも覚えています。結果は最優秀賞となり考えたグッズは校友会やベンチャー・ビジネス研究所の協力を得て実際に制作し

ていただけのことになりました。

二つ目は学友会活動。ここでは書いても書き切れない、とても書くことができない思い出が多くあります。さまざまなイベントでの挨拶、大学との話し合い時、フレッシュマンキャンプに將軍山祭など本当に多



オンライン学園祭のゲスト・円広志氏（7期生）と藤尾会長（2020年11月）



ケース付きマスク（2020年7月）

くの人と出会い、笑いあい、友人と出会うことができました。また、マナーアップ活動として職員の方と学内のゴミ拾いを、地域貢献として駅の清掃活動を校友会の方々とやったことを覚えています。この清掃活動は四年間、継続して取り組み、今から思うとお世話になった茨木の街や大学に貢献し形として見えた活動でした。

学生生活を振り返って、本当にいろんなことにチャレンジし経験をすることができました。しかし、そこには友人や恩師、職員の支え、そして校友会や地域の人など当時自分が知らないところで支えてくれている人たちがいたからだと感じています。

この振り返りを機に現役学生の方たちに思いを馳せて、さまざまなチャレンジをする学生の皆さんを少しでも支えられるよう頑張りたいと思います。

（松村石油株式会社 名古屋支店）



「校友会会報」縮刷版



対談集『「青が散る」から「野の春」まで』



ホームカミング・デーチラシ（2019年6月）

仲間の輪を広げ 生涯にわたって 学び続ける

追手門学院大学 学長

真銅 正宏



追手門学院大学 校友会 会長

藤尾 政弘

人生の成長を 校友会という姿で 実現させる



真銅 正宏 追手門学院大学 学長

一九九二（平成四）年神戸大学文化科学研究科博士課程単位取得退学。博士（文学）「二〇一六年 神戸大学」。徳島大学、同志社大学を経て二〇一五年から追手門学院大学国際教養学部教授。著書に『匂いと香りの文学誌』（春陽堂ライブラリー・二〇一九年）、「まほろば文学街道」（萌書房・二〇二〇年）など。

藤尾 政弘 追手門学院大学 校友会 会長

一九七七（昭和五二）年追手門学院大学経済学部卒業（八期生）。株式会社フジオフードグループ本社代表取締役社長。一九七九年に同社の前身を創業。四〇業態以上を展開する外食産業の雄として活躍。業界団体の理事を歴任し、学校法人追手門学院理事・評議員も務める。



追手門学院大学校友会結成五〇周年という節目の年を間近に控えた二〇二〇（令和二年）、新会長として藤尾政弘氏が就任しました。時を同じくして、母校追手門学院大学学長に真銅正宏教授が就任されました。フレッシュなリーダー二人が、校友会は母校の発展をいかに支えていくべきか活動の道標を見出すべく、忌憚らない意見を交わしました。

母校のよき理解者であり パートナーとして

—— 藤尾会長から就任にあたっての抱負をお聞かせください。

藤尾 ● 強いリーダーシップで改革を進めてこれられた林田隆行前会長を引き継ぐというのは、正直申し上げて、私には荷が重いと思っておりました。これまでは、理事として時間の余裕がある時に校友会活動に参加しお役に立っていたかどうかともわからない中で、会長という重責が果たして務まるのかと悩みました。しかし、これも林田前会長をはじめ前役員の方々のご配慮で、副会長に会長代理や幹事長の職務を担っていただくなど組織的な運営体制で荷の重さを少し解いていただきました。また、一緒に務める役員の方々は、母校と校友会の活動に対して非常に熱い思いをもっておられます。皆さんに後押しをされて会長に就任させていただいたわけで、本当に感謝しかありません。

これまでの五〇年、諸先輩方が築きあげてくれた校友会を、少しでもこれまでに以上に発展させたいと思っています。企業も計画的な経営、組織的な経営が大事です。校友会も組織力、チーム力を大切にし、追手門学院大学の卒業生として自信と誇りをもってそれぞれの世界で活躍していただくことが母校のブランドを高め、発展に寄与することだというメッセージを送り、その後押しを積極的に行いたいと思っています。

真銅 ● 熱いお言葉を聞いて、うれしい気持ちでいっぱいです。追手門学院大学校友会が五〇周年を迎えられましたこと、本当におめでとうございます。成熟期を迎えて、これから組織としてますます発展されることだろうと期待しています。幹部の方々が求心力を発揮されますます強固な組織になれば、大学にとっても心強い限りです。これまで以上に良い関係を構築し、ともに発展できればと考えています。

—— 母校追手門学院大学は、近年さまざまな改革を打ち出しており、今後の発展がますます期待されています。

真銅 ● 二〇一九（平成三一・令和元）年、本学は新たに総持寺キャンパスを開設しました。校友会にはアラムナイ・ライブラリー建設費用を寄贈していただき、おかげさまで、逆三角錐の建物とともに非常にユニークな学びの場を実現することができたこと、大変感謝しております。この素晴らしい



い環境を生かしてこれまでの学問を超えていくような教育を行い、ユニークで行動力のある学生を育てることが最大のテーマです。

藤尾 ●新キャンパスは本当に素晴らしいですね。学生さんがうらやましい(笑)。駅に近い便利な住宅地の中にあり、キャンパス前にはショッピングモールができると聞いています。総合大学化の方針をうかがい、展望に大きな期待を抱きました。われわれは常に、母校の良き理解者でありパートナーでありたいと思います。

われわれが学生生活を送った頃の安威キャンパスは、緑豊かなロケーションでしたが、通学には少し不便を感じるキャンパスでした。授業に合わせたスクールバスの運行では時間が自由にならないので、自動車通学を目標に、どんなボンコツでも自分の車を持つと一生懸命にアルバイトをす

手始めに、二〇二二年度、心理学部の中に人工知能・認知科学専攻を開設します。AI系の専攻を心理学部に設置するのは、全国でも珍しい試みです。同じ学部の中に、文系的なものと理系的なもの同居することで新しい学問をつくり、次の時代をつくる人材を育成したいと考えています。

もう一つは、生涯を通じて学び続ける力を育む教育です。大学という一八歳の入試や二二歳の就職だけに注目しがちですが、身につけた能力を発揮する時期は人によって違います。本当に実力が花開いたのは六五歳というようなこともいくつもあります。そこで大切になってくるのが、生涯学び続ける力を身につけることです。そのために、自らを刺激して多様な経験を志向し、さまざまなものへの興味を持ち続けられる学びが必要だと考えています。まだ計画中ですが、夢のある学



るわけです。車が手に入ると、後輩や友人を乗せてドライブです。学部や学年を超えたフィールドワークの取り組み、なんて言ったら怒られますかね(笑)。ともあれ、不便さに学んで自然に知恵を絞るような環境が、社会に出てから役に立つという側面もありました。

今は当たり前のように整った環境があります。しかし、今回のコロナ禍で、登校できない、友だちに会えない状況になり、これまでの当たり前が当たり前でなくなりました。学生はどう感じているのでしょうか。これから社会に出ていく四年間の準備期間に、感動する、感謝するといった感受性を育むことのできる環境整備が重要なのではないかと改めて感じています。

——学長からこれまでの学問を超えるような教育というお話が出ました。追手門学院大学のビジョンについてもう少し聞かせください。

真銅 ●大学の未来を「長期計画二〇三〇」という形で構想し、ここからの一〇年で現状の中規模大学から大規模大学へ飛躍することを目指しています。ただ定員を増やすというのではなく、社会が必要とする人材の輩出を目標にした学部の新設や再編を行います。

キーワードの一つは、文理を超えた学問です。いわゆる理系と言われる学問ジャンルの学部を設置して総合大学化を進め、文理を超えた自由な発想が生まれる土壌をつくりたいと考えています。

部再編を進めていきたいと思っています。

藤尾 ●確かに、「花開くのは六五歳」というようなケースはごく当たり前にありますね。そのためにも、追手門学院大学で学ぶ中で、からだの汗も頭の汗もかくことが大事だと思います。汗をかくことは、年齢を重ねた後で必ず喜びに変わります。逆に若い時に汗をかかなければ、年を取ってから涙を流さなければならなくなるかもしれません。私自身、今でも、大学の四年間で学んでおけばよかったなと思うことがあります。

学長から未来ビジョンをおうかがいし、私が学生の頃は二学部しかなかった母校が大きく成長したことに改めて感慨を覚えました。地域や社会に必要とされたからこそ、ここまで大きくなったのでしょう。規模の拡大というお話がありましたが、理想的には、安定的で効率的に事業が進められる規模が大切だと思います。社会の激しい変化に対応でき、社会に望まれる大学経営を進めていかれるよう願っています。

ブランド発信力を高め 新たな交流機会を

——成長のために欠かせないのが、追手門学院大学のブランド力ではないでしょうか。その向上に向けて校友会には何ができるでしょうか。

真銅 ●学長に就任する時、教職員の皆さんで実現して「きたかん」や「Student First」「ブランド化」



「笑顔づくり」の三つの合言葉として掲げました。中でも「ブランド化」は校友会にも大いにご協力いただいて進め、追手門というブランドを大学の力で引っぱり上げたいという意気込みを持っています。ブランド力を何で測るのかはさまざまですが、まずは、卒業生に追手門学院大学を卒業したことに誇りを持てるような大学になるということだと考えます。ぜひ、校友会としていろいろな形でサポートしていただければありがたい。多くの卒業生が継続して活躍しているということが、ブランド化にとって非常に大切なことだと思っています。

藤尾 ●追手門学院大学をブランド化するために卒業生が活躍し続ける、これはまさにその通りだと思っています。私たちが頑張らなければと、決意を新たにしています。校友会としては、卒業生に自信と誇りを持っていただけるような取り組みが必要だと思っています。誇りには与えられた誇りと、自己が勝ち取った誇りがありますが、この両方が結びつくような道筋を考えていく必要があります。校友会ではこれまで、各界で活躍する著名な卒業生にスポットを当ててきましたが、卒業生や在学生への紹介にとどまっていました。これを、さらに広く一般の方にも広げる取り組みも、ブランド化の一助になると考えます。全国の各支部の役員さんから話を聞くかぎり、追手門学院大学の名は関西には知られてきましたが、他の地域ではまだまだのようです。全国で頑張っている卒

活躍し続ける卒業生の背中を見せてほしい

善されていければと期待しています。

—— 人生一〇〇年時代となり、卒業生にも生涯にわたって学ぶ姿勢を持ち続けることが求められています。その意味で、校友会や大学への期待も高まっているのではないのでしょうか。

藤尾 ●人間力は、さまざまな交流の場を通じて育まれるものです。校友会のような会社や仕事の人間関係とは違う結びつきの場からは思わぬ大きな刺激を得ることができはらずですし、また校友会がそういう場になっていけるようわれわれが努力しなければならぬと思います。卒業したての会員が今何に関心を持っているのか知りたいし、三〇歳や六〇歳の声も聴きたい。学び続けるということ、それが、校友会という姿で実現することが理想です。校友会を通じて仲間の輪を広げていくことを通じて、たゆみない人生の成長を共に育んでいける会でありたいと思っています。

真銅 ●大学は、今後、生涯にわたる学びの拠点として、知的関心を掻き立て知的満足を得るような場の提供に力を入れていかなければならないでしょう。リタイア後に好きなことが好きなだけ学べるような環境とともに、社会人現役世代がステップアップするための学びを提供することも必要です。大学で専門性を高めたり資格を取得した

業生を後押しする取り組みをみんなで考え、実行していきたいと思っています。

学長さんが掲げておられる三つの合言葉の中に、「笑顔づくり」というのがありました。当社の社是は「笑顔、清潔、一生懸命」なんです。笑顔で周囲の人を幸せにするのは、動物の中で人間だけの特権です。「その人が入ってくると花が咲くよね」と言われるような笑顔をつくることは、どんな場面においても大切なことでしょう。そのような人を育てる大学となることが、ブランドづくりにも繋がるのではないのでしょうか。

真銅 ●藤尾さんが大きくした企業の社是にどんな思いを込めていらっしゃるか、ぜひ学生に伝えていただきたいですね。学ぶものがたくさんあるでしょう。

藤尾 ●私は外食産業の中で、日本一失敗の多い経営者です(笑)。失敗した経験はなかなか聞く機会がないかもしれないので、お伝えできればいいですね。

—— 校友会が力を発揮するためには、校友会組織の活性化が不可欠です。在学生の会員化も実現しましたが、今後の交流や支援の活動についてどのようにお考えでしょうか。

藤尾 ●林田前会長が強固に、また機動的にしてこられた組織を、いかに充実させていくかに知恵を絞っていかねばならないと思っています。卒業生の皆さんと情報を共有し、多くの方に参画い

りするのはもちろん、一度休んで小説をじっくり読んでから次のステップへというようなライフコースも選択可能になっていく時代です。社会の変化に対応できるようなりカレント教育のあり方を模索していきたいと思っています。

—— 最後に、皆さんへのメッセージをお願いいたします。

真銅 ●社会の先行きが不透明な中、コロナ禍の影響もあって、学生たちも不安を抱かざるを得ない状況があります。しかし、こんな時代だからこそ、学び続けることをやめなければ人は成長できる、そういう背中を多くの卒業生に見せ続けてもらえればありがたい。同じ大学で学んだ先輩が見せてくれる生き方や人間味が、学生にとって最大の励ましになるでしょう。今後とも、さまざまな分野での活躍を期待しております。

藤尾 ●追手門学院大学校友会五〇周年を期して、新しいキャッチフレーズ「Making the Future. Next100—つながる、ひろがる、もりあがる—」をつくりました。未来はこれから作っていくものです。これまでの五〇年、しゃにむに頑張ってきた卒業生の方々に感謝し、今後一〇〇年に向かつてわれわれみんながそれぞれの世界で感動と勇気を与えられるよう、共に成長していきたいでしょう。

ただけるように努めていきたいと思っています。若い卒業生が気軽に参加できる校友会活動にするため、若手の方々の企画した事業を積極的に支援したいと思っています。在学生の会員化も果たされたわけですから、学生と校友との交流機会を増やしていくことも大切です。たとえば、卒業生が学生にサジェスチョンやアドバイスをできるような仕組みがあれば、自然に触れ合う場ができます。

真銅 ●追手門学院大学では、新しい教育として「WIL(Work-Is-Learning)」を推進しています。教室で教員の話聞くだけでなく、グループワークを取り入れて創造的な作業を行い、その成果をプレゼンテーションして評価を受ける。能動的な学修と実践を同時に経験し、繰り返ししていく学修モデルです。その際、卒業生の皆さんに聞いてもらって意見や評価をいただく機会を今よりもさらに増やし、社会に通用するプレゼンテーション力を養成したいと思っています。学生時代から卒業生の先輩方と人間関係をつくり、それを継続していくことで、社会をリアルに感じ取れるような環境を作っていけたらと考えています。

藤尾 ●そういう機会を設けてもらうと、学生と卒業生との密度の濃い関係が生まれてくるでしょうね。卒業すると若いうちは忙しくて母校に帰る時間があまり取れず、四〇代半ばぐらいまでは校友会活動がブランクになってしまふのがこの校友会でも悩みの種になっています。そこが、学生時代から校友会のメンバーになることで、徐々に改



2020年9月26日学生食堂にて

追手門学院大学校友会の 過去・現在・未来

追手門学院大学校友会の五〇年をつぶさに体験してこられた歴代会長に、学生時代や校友会活動での思い出に彩られたエピソード、校友会や母校に対する想いを語り合っていました。ふり返る言葉の一つひとつによって輝きを増していく航跡。過去から現在へのたゆみない流れは、さらに大きく広がって未来へと続きます。

温かで自由な キャンパスライフを謳歌

——追手門学院大学で過ごした学生生活について
おうかがいします。学内の雰囲気やクラブ活動など、印象に残っていることをお話しください。

関 ● 私たち一期生は五一七人が入学したのですが、登校する時には必ず学長室から天野利武学長がずっと見ていらっやって、欠席した次の日には「昨日来ていなかったね」などと声をかけられました。常に気にかけてもらっている先生方の温かさを感じていました。

印象に残っているのは、何もないところから組

六代会長 **林田 隆行さん**
校友会相談役
トップ金属工業株式会社代表取締役社長
二期生、文学部社会科学科卒、アメリカ民謡研究部

三代・五代会長
平野 昌雄さん
校友会相談役
株式会社ジョイ企画代表取締役
一期生、経済学部経済学科卒、硬式テニス部

初代・二代会長 **関 謙二さん**
校友会相談役
三友株式会社取締役相談役
一期生、経済学部経済学科卒、洋弓部

現会長（七代）**藤尾 政弘さん**
株式会社フジオフードグループ本社
代表取締役社長
八期生、経済学部経営学科卒



織や行事をつくるのに非常に苦労したことです。中でも、大学が開設されたその年の十一月に大学祭を開催したのは大変でしたが、天野学長が心配してくださり、大学から資金の援助とともに、事務局の方や諸先生の協力もいただいて無事に開催することができました。

この最初の大学祭で今後の名称を決めるためのアンケートを学生に実施し、安威祭や鎌足祭などの候補を抑えて、將軍山祭が選ばれたのです。
平野 ● クラブも一から作りました。私は軟式テニスの経験があったので、仲間から誘われて硬式テニス部を創部しました。そこに、後に芥川賞作家になる、宮本くん（宮本輝氏）も入部してきたので

2020年11月1日 將軍山会館（校友会館）にて

す。彼の作品『青が散る』は自伝的小説ですが、創設期の追手門学院大学やクラブ活動などキャンパスライフについても生き生きと描かれています。

私がキャンプテンをしていたときに宮本が副キャプテン。サウスボーで、対戦相手としては一番いやなタイプでした。覚えているのは、敷地内にあった追手門学院高等学部のグラウンドの一部を借りてコートを作ることになり、ドキドキしながら高校に交渉に行ったことですね。グラウンドの土を入れ替えるのに天野学長がポケットマネーで少し助けてくださるなど、何かと気にかけていただいたことも忘れられません。『青が散る』にはテニス部の部員が出てきますが、われわれが読めば誰がモデルなのか全部わかります。その時から今に至るまで硬式テニス部が続いていることはとても嬉しいですね。

林田●制服があったのがユニークだったと思います。中に着るポロシャツなんかを選んでおけば、あとは大学に行くのに何を着ていこうか迷わなくてすみしました。私は二期生でしたから、入学した



り、私も引きずり込まれました。この頃から支部づくりに入れ、ホームカミング・デーなどにも取り組むようになりました。ホームカミング・デーの「おかえりやす・追大へ」という名前を考えたのは、一期生の岡田惇くんです。思い出してみると校友会のために「ちょっと用事で抜けます」なんて会社を抜け出していたのですが、よく会社も認めてくれていたなあと思います。

——その頃の思い出に残っている行事といえはなんでしょうか。

関●大学創立二〇周年記念行事ですね。初代学長天野利武先生の記念碑除幕式、体育館での記念パーティ、校友会のロゴマーク作成をしました。林田●あれはずいぶん盛り上がったようですね。行事を企画する時、よく参考にさせてもらいました。創立二五周年の上海師範大学との国際交流も画期的だったと思います。

関●佐藤良和先生（校友会初期には顧問、元追手門学院高等学部教諭）が上海師範大学との校友会

当時は二年生しかおらず、とにかく人数が少ないなあという印象でした。

その分、顔が見える関係というのか、みんなこの誰だかよくわかっていたし、先生とも距離が近かった。おそらく学生と一〇歳程度しか離れていないような若い先生も多くて、よく身の上相談に乗ってもらいました。私は、文学部心理・社会学科心理学専攻で入学したのですが、一年次の一般教養でとった社会学の授業が面白くて、三回生から社会学科に転科したのです。それもあって、先生方に何かと相談に行き、本当によく面倒を見ていただきました。

藤尾●私は皆さんのもう少し下で、八期生です。印象に残っているのは、正門からの上り坂。高台の校舎に着くまで風に吹かれながら歩くのが、新鮮さや自由さの象徴のような気がしていました。車で通学する学生が多くて、大阪だけでなく京都や滋賀、神戸からも集まってきました。

友だちができると実家に遊びに行き、地元で有名な店に連れて行ってもらうんです。堺のゲコ亭は、大将とおかみさんがリタイヤされるというので七年前に私の会社が継承したお店ですが、最初の出会いは学生時代に友だちに連れて行ってもらったことなんです。神戸では芦屋川付近の雰囲気の良いお店に連れて行ってもらいました。そのインパクトが強烈で、独立してすぐ、その辺りにカフェを作ったほです。追手門学院大学での四年間は、いろいろな意味で、ビジネスをやるため

の交流をしてもらったことがきっかけでした。

一九九〇（平成二年）十月、上海を訪問し交流の覚書を交わしました。その翌年にも、上海師範大学四〇周年の祝賀行事に招待され訪問を行い、歓待していただきました。海外留学生が多い国立の素晴らしい大学ですし、今でも交換留学生など交流が続いているのは喜びです。創立二十五周年行事には、他にも竹村健一先生（政治評論家。元追手門学院大学助教授の記念講演会を茨木市民会館で開催し、宮本輝文庫の寄贈など、皆さんのご協力でいろいろと思い出に残る行事を行うことができました。

平野●二〇〇〇年頃までは、活動をしながらも、どちらかというと抑え気味というか、あまりお金を使つてはいけないという意識がありましたよね。

関●そうです。卒業生の皆様からいただいた会費を基金としてしっかり貯めていくことを第一に考えていました。その中で、交流の輪を広げようと支部を作り、会報を皆さんに届けることには力を入れていました。「いつか校友会館をつくるぞ」という夢を抱きながらね（笑）。

——二〇〇八年に建設された將軍山会館は、まさにわれわれの心のふるさとです。これができるいきさつは、当時の会長であった平野さんからうかがいましょう。

平野●学校との折衝がなかなかうまくいかなかった、学外でもいいか、というような話も出たぐら

の基盤づくりの時期でした。

基盤を固め 活動の幅を広げていった五〇年

——校友会ができたのは、二期生が卒業する一九七二（昭和四六）年のことです。当時のいきさつを教えてください。

関●天野学長が、大学に同窓会がないのはおかしいのでは、とおっしゃったのがきっかけで、校友会設立に向けて動き始めました。天野学長に世話人の代表になっていただき、最初に結成準備委員会を開いたのは一九七一年二月二十三日。五月三十日に役員を決定し、初代の会長に選んでいただきました。当時は会に資金がなく、印刷代や郵便代など大学がずいぶん協力してくれました。私は会社に入社したてで十分に会長の職務を果たすことができなかったため、次の代に引き継いだのですが、運営がうまくいなくて活動が中断してしまいました。

林田●終身会費が集まらなかったのでしょうか。

関●それもあります。最初は集まったのですがだんだん集まらなくなり、一九七五年、卒業時に集めるようになりました。それからある程度資金が貯まり、一九八一年に新しい体制で再スタートを切ることができました。

平野●その時、関くんをはじめ一期生の鶴毅くん、大橋陽一くんなど中心メンバーから声がかか

いでした。キャンパス内に建設することが決まっていたから、場所がなかなか決まらない。結局、もとボイラー室があった今の場所で決着しました。竣工してからは、別の意味で大変でした。大学には大学史を展示する場がないということで、將軍山会館を自校教育の場として学院の歴史展示を行うことになり、吉田浩幸さん（現校友会副会長。当時大学職員）たちを中心に苦労して展示物を集めてもらいました。

將軍山会館（校友会館）



林田 ● 安威は交通の便が悪いので、校友の集いやすさを考えてキャンパス外の立地も考えたんですよ。しかし、校友がキャンパスに帰ってきた時の居場所が必要だということで、結果的に、今の將軍山会館ができました。集まれる場ができて、本当によかったです。

関 ● 長年の夢がかなった、と思いました。

—— 林田さんは、会長時代、組織づくりに力を発揮されました。

林田 ● 校友会設立の原点に返って考えると、会員同士の交流と母校の支援が何よりも大切です。そのためには、持てる資金を動かし活動を活性化していく必要があります。今までの役員体制では動ける人が限られており、人員が不足していました。そこで、亡くなった小坂井俊夫君（校友会四代会長、二期生）と相談して、二号評議員制度を設置しました。選ばれた評議員の皆さんに活動していただける方を推薦していただく仕組みを作り、校友会の協力者を増やしていきました。組織も各委



平野 ● 今、地域ごとの支部活動がありますが、業界や会計士など職業ごとの部会で交流し合う組織ができれば、また新しい結びつきができるような気がします。

林田 ● 『LinkA』（リンクア）という社会や業界で活躍している卒業生を紹介している広報誌を出しています。これも、有効に活用していきたいですね。二〇一七年、大学の中に校友課ができて事務局の体制がしっかりしてきました。大学の手も借りながら、さまざまな人からいろんな知恵を出してもらって進めていけばいいのではないのでしょうか。

関 ● 大学に校友課ができることは一つの目標でしたが、それもかなったのですね。

林田 ● 小中高の同窓会である山桜会とも年に二、三回程度会合を持ち、互いの活動を確認し合いながら、親睦行事であるゴルフ、バーベキュー、大川クルーズなど一緒にやれることはやろうという動きになっています。普段から協調していくことで、学院が何かやるというときにも同じ方向に向かって一緒に力を出していけることに繋がると思

員会で役割を分担し、一人でも多くの会員に集まってもらえるようなイベントを企画しました。また、財務委員会を作って、財政シミュレーションをやっていたことにしました。そうした中で可能になったのが、総持寺キャンパスのアラムナイ・ライブラリーへの資金寄贈です。あの資金を出させていただけたのも、先輩方が大事な会費をしっかりと貯めておいてくださったおかげです。

関 ● 林田さんはかなり努力して校友会の組織づくりをされました。校友会の母体をしっかりと固めて、われわれがつくった基礎を大きく広げて幅の広い活動へと発展させました。今、とても良い校友会の状態になっていると思います。

—— 引き継がれた藤尾会長は、どのように感じておられますか。

藤尾 ● すそ野が広ければそれだけ高く上がりま

す。その意味で、林田さんが掲げられた各都道府県に支部をつくるという目標はぜひとも大切にしたいと思います。そのうえで、年に一度は必ず母校に足を運んでもらうような企画を提案したいと思っています。

大学とも協調し 母校のために、校友のために

—— 今後、校友会には何ができるのか、どうあればいいのか、ご意見をいただければと思います。

います。

また校友会に学生会員制度ができ、卒業生と学生とが一緒にやっていこうという流れになってきています。UI論や大学院の授業（事業承継など卒業生が講師になって学生に教える機会も増えてきました。今後は、卒業生が母校に帰っていつまでも学べるような仕組みについて、校友会としても関わっていければいいですね。

平野 ● 卒業生対象の座学講座があれば、学びたい若い人もたくさんいるでしょう。

林田 ● 会員のためなのだから、校友会も協力していくのは大事なことだと思います。社会に出ていろいろなことを経験する中で、もう一度これを学びたい、新しくこれが知りたい、ということを母校に帰って実現できるような後押しができれば。

藤尾 ● どんどん開かれた組織になっていくということですね。もっといろいろと、できることがたくさんありそうです。

平野 ● 学生が増えてきているので、今後は、校友会でもいろいろな面でリスク管理をしていく必要があると思います。

林田 ● 大学の学生数が八〇〇〇人になろうとしており、会費収入も増えてきています。預かったお金を何に使うのか、しっかりしたビジョンを持ってやっていかなければならないと思います。大学と互いに親睦を図りながら、大学発展のために何ができるのか、会員のために何ができるのか、考えていってほしいと思います。

林田 ● 追手門学院大学そのものが社会に認知されていない時代には、追手門学院大学の卒業生であることに自信が持てないという人もいました。しかし今、大学の頑張りで、八年連続志願者増となるなど大いに発展しており、卒業生にとっても喜びです。

関 ● 仕事や情報の交換に繋がるような交流ができる環境づくりは大切です。交流行事の幅を広げて、多くの人たちが参加できる環境をつくる必要があります。また、校友会活動を支える評議員、理事として参加してもらえ

る環境も大切です。支部との行き来のための交通費など負担がかからないようにして、できるだけ活動しやすいようにする必要があるのでないでしょうか。

林田 ● 社会に出た時に、追手門というだけで気心が通じ合えるような組織になればいいですね。そもそも、同窓であることが持っている距離を近づける力を、さらに強める機会をできるだけ多くつくり出すということでしょうか。

藤尾 ● 追手門会という、茨木カンツリー倶楽部をホームコースにゴルフを通じて交流を深める会をつくりました。追手門の卒業生に限らず、お子様やお孫様が追手門の在学生、卒業生など追手門に関係する方で、今の追手門を知ってもら

う情報共有のための会にしたいと思っています。また、全国に広がっている校友の方々にしっかりとメッセージを送り、活動の輪を広げていくための仕組みを作れたらと思います。

関 ● 私たちの時はいろいろな苦勞がありました。が、天野学長や事務局の皆様

に助けられたり相談に乗ってもらったという記憶が今でも残っています。大学も校友会ともに手を取り合

って、協力して大学のさらなる発展のために活動をしてほしいと思います。

藤尾 ● 「追手門イズム」のようなものが、徐々に定着してきているところなので、校友会もぜひそのバックアップをしていきたいと思

います。先輩たちがこうしてさまざまな種を蒔いてくださったことを大きく伸ばし、また、次の代へとしっかりとバトンタッチできるように頑張ってい



卒業生と 在学生在一緒に 大学を創造し互いに 成長し合える場に

現役学生



加地 龍也さん

経済学部経済学科4年。兵庫県立川西北陵高等学校出身。学友会「追風」三代目委員長。



田中 春那さん

社会学部社会学科4年。大阪府・箕面自由学園高等学校出身。学友会「追風」副委員長。吹奏楽部所属。



小牧 大輔さん

地域創造学部地域創造学科4年。京都府立洛西高等学校出身。学友会「追風」副委員長。アメリカ民謡研究部所属。



椎橋 琉さん

経済学部経済学科4年。大阪府・大阪産業大学附属高等学校出身。合同学園祭実行委員会委員長。

卒業生



押川 新一さん

1983(昭和58)年文学部英米語学文学科卒業(第14期)。ESS所属。校友会学生支援委員会委員長。ミノル化学工業株式会社代表取締役社長。



藤田 真由さん

1996(平成8)年文学部社会学科卒業(第27期)。文芸同好会所属。校友会学生支援委員会副委員長。ARC大阪日本語学校・追手門学院大学日本語科目担当教員。



船本 洋さん

2012(平成24)年経済学部経済学科卒業(第43期)。校友会学生支援委員会。学校法人追手門学院職員。



大西 惇さん

2019(平成31)年心理学部心理学科卒業(第50期)。ハンドボール部所属。校友会学生支援委員会。株式会社サカイ引越センター。

学生会員制度の導入を契機に、現役学生と卒業生との絆はぐっと深まりました。校友会は今後、この絆をどのように深め、活かしていくことができるのか。学生と卒業生とがざっくばらんに語り合い、大学の支援に向けて校友会にできることや校友会自体の活性化について多くのヒントを見出しました。

積極的な活動を支援するキャンパスに

押川 ●まず皆さんに聞いたかったのは、新しくできた総持寺キャンパスのことです。校友会も支援したアラムナイ・ライブラリーも含め、使い心地はどうでしょうか。
加地 ●まず、外観がかっこよくて目立ちます。茨木周辺に住んでいる他大学の学生から、「あのキャンパスに通っているの」とうらやましがられることと部活動はあきらめざるを得ないという声でした。総持寺キャンパスにも学生会館のような施設があれば、クラブ生も一年生と関わりを持ちやすいのではないのでしょうか。
小牧 ●スクールバスでのアクセスを良くしたり、部活動の活動時間を長くしたりする方法もありますよね。
田中 ●せっかく続いてきたクラブ活動が途絶えてしまうのは残念です。
大西 ●二拠点キャンパスの物理的な障壁があるんでしょね。サテライトのような駅に近い拠点を設け、アクセスできるようにする方法もあるかもしれません。
加地 ●サテライトで思い出したのですが、東京で就職活動をする際、宿泊する場所の手当てに困るという声を聞きます。他大学では、その大学の学生であれば自由に泊まれるホテルを用意しているそうです。そういうのがあれば助かります。
押川 ●インバウンド需要があった今まではホテル予約も一苦労だったでしょうね。今後どうなるにしても、安心して活動できるサポートは必要だと感じます。
加地 ●気軽に東京で就職活動ができる環境があれば、より活動範囲が広がり視野も広がられると思うのです。
藤田 ●学院全体で考えていくべきことではないかな。
船本 ●校友会でも、何かできることはないか考え

ともあります。特に、アラムナイ・ライブラリーの環境は素晴らしい。
大西 ●僕らの時代の図書館といえば授業の空き時間をつぶす場所でしたが、雰囲気が違う。
小牧 ●パソコンも借りることができるので、課題やレポートを書くのによく利用しています。
田中 ●ディスカッションできる場所があり、集まってグループで課題を討議し合えるのがいいです。
藤田 ●私たちの頃には、そういう場所といえ

のベンチでしたけど(笑)。
大西 ●アラムナイ・ライブラリーの構想には真銅学長が力を入れたと聞いていますが、学長の想定通りになっているのですね。
押川 ●逆に、キャンパスについての要望はありますか。
加地 ●プレゼンテーションの練習施設がほしいと思います。安威キャンパスではE・C・Oという英語の学習スペース内にパソコンやプロジェクト、スクリーンのある部屋があり、学外のプレゼンテーション大会などに出る時にそこで練習していました。

船本 ●総持寺キャンパスは全教室にプロジェクトとスクリーンが備わっていますが、学生に貸し出す仕組みはまだないんです。
藤田 ●プレゼンテーション力が問われている時代、就職活動にも役に立つと思いますので、せっかくの設備を活用できるよう、フレキシブルに対応できたらいいですね。
田中 ●私は、総持寺キャンパスにも、学生が活動できるスペースがあればいいと思います。今年はコロナ禍で、SNSを中心に新入生勧誘を行ったのですが、新入生が集まらず廃部寸前のクラブも出てきました。そこで学友会「追風」では、九月に「勧誘ウィーク」という対面イベントを感染対策に十分配慮しながら行いました。その時に一年生から聞いたのは、クラブは安威キャンパスで行われているので授業後に移動することを考える

と部活動はあきらめざるを得ないという声でした。総持寺キャンパスにも学生会館のような施設があれば、クラブ生も一年生と関わりを持ちやすいのではないのでしょうか。
小牧 ●スクールバスでのアクセスを良くしたり、部活動の活動時間を長くしたりする方法もありますよね。
田中 ●せっかく続いてきたクラブ活動が途絶えてしまうのは残念です。
大西 ●二拠点キャンパスの物理的な障壁があるんでしょね。サテライトのような駅に近い拠点を設け、アクセスできるようにする方法もあるかもしれません。
加地 ●サテライトで思い出したのですが、東京で就職活動をする際、宿泊する場所の手当てに困るという声を聞きます。他大学では、その大学の学生であれば自由に泊まれるホテルを用意しているそうです。そういうのがあれば助かります。
押川 ●インバウンド需要があった今まではホテル予約も一苦労だったでしょうね。今後どうなるにしても、安心して活動できるサポートは必要だと感じます。
加地 ●気軽に東京で就職活動ができる環境があれば、より活動範囲が広がり視野も広がられると思うのです。
藤田 ●学院全体で考えていくべきことではないかな。
船本 ●校友会でも、何かできることはないか考え

ていきたいです。

新たな取り組みに挑戦した学生たち

押川 ●学生の取り組みも最近はどうん変化していると思います。今年はどうのような活動を行ったのか教えてください。

加地 ●二〇二〇(令和二年)、学友会「追風」では「次なる追手門へ」をスローガンに、積極的に新しいことにチャレンジしました。コロナ禍で活動が制限されることを見越して一、二月から計画的に今までの活動をオンライン化し、さらにSNSやYouTubeを始め、「追風」の活動をみんなに知ってもらう仕組みを作りました。一方で、キャンパスを学生の過ごしやすい空間にする活動も進めました。コロナ禍の影響で、オンライン授業を選択する学生が増え、総持寺キャンパスでは学生のキャンパス離れが進んでいると問題になっています。大学の学びは授業だけでなく、友だちや先輩と出会って一緒に活動することで成長させてもらったというのが僕らの実感でした。そこで、クリスマスツリーをキャンパス内に六本立てたりW・I・Lホールをクリスマスマ仕様にしたりキャンパスを演出し、それをきっかけに縦や横の繋がりが広がればいいという活動をしています。
田中 ●今年行った新しい取り組みを下級生たちが見て、「こんなこともできる」、「こんなことがしたい」と積極的に提案するようになってく

るので、とてもうれしいです。

小牧 ● 今年入学した一年生は、特に一人暮らしだとオンラインでは友だちもできにくいし、とても寂しかったと思います。「勧誘ウィークがあったおかげで、部活に入れた」と喜ぶ一年生を見て、「追風」で学生のために働くやりがいを感じました。

椎橋 ● 僕が学園祭実行委員会の委員長になってから、学園祭という全学的なイベントを盛り上げていくためには人間関係の広がりが大切だと考え、「追風」との交流を深めました。おかげで、互いに協力する機会も増え、多くの気づきがありました。また、学園祭を活性化させるために自分たち自身が信頼を積み重ねる活動を下級生が頑張ってくれ、基盤づくりができました。

発信力を高めてブランドイメージアップ

押川 ● 学生自身の手で大学を良くしよう、盛り上げようと動いてくれていることを、頼もしく感じました。皆さんは、今後、どのような大学になってほしいと考えていますか。

加地 ● 追大では、最近、志願者がどんどん増加しています。この調子で、大学名を聞いて「ああ、追手門ね」と言われるような知名度のある大学になればと思っています。インパクトのある総持寺キャンパスも、大いに貢献すると思います。

押川 ● 外見と中身との両方から、ブランドイメージが上がるっていいですね。

今後減ったとしても、オンラインを併用することで発信の規模を拡大していけばいいのではないのでしょうか。

藤田 ● 先ほどから話に出ている知名度を高めることにも繋がりますしね。

小牧 ● 校友会の次の五〇年には、僕らが校友会員として、追大に入ってよかったなと思います。す。そうなるには、ブランド力にしても、今よりさらなる高みを目指さなければ。

大西 ● 「追手門の学生はすごい」と思ってもらえれば、それがブランドになると思うのです。たとえば、今年で三回目を迎える「関西学生サミット」は、学生自治活動の活性化を目的に追大が旗振り役となって始めた試みです。このような追大学生が発信する活動を盛り上げていくためにも、学生代表としてリーダーシップを発揮する「追風」の存在は大切です。僕自身も学生時代に「追風」の活動をしたことでとても成長しました。対外的な活動、内部統制的な活動、財務面の管理などを通して、社会人として必要な基礎力を鍛える上でも貴重な場になっています。

押川 ● 卒業生が社会で活躍し、「あの人も追手門出身なのか」と言われるようになることも大事ですよ。

加地 ● 僕がその一人になれるよう頑張ります(笑)。

椎橋 ● 今年はコロナ禍の対応として、五四回目となる学園祭を完全オンラインで開催しました。今後のことを考えたなら、どんな形でも学園祭ができるという事例を創りあげたことが大きな成果と言えるのではないでしょうか。僕たちの代は学内からの発信で終わりましたが、これからは地域を巻き込んで規模を広げ、最終的には海外とも繋いで発信をしていけるようになればと思います。たとえば、追手門学院大学と提携している海外の大学とオンラインで結び、交流し合うといったことも考えられます。

押川 ● 校友会でも、今年はホームカミング・デーをリモートで開催しました。校友会には全国各地、また中国・上海にも支部がありますし、各支部を結ぶライブ配信なども考えていけたらいいですよ。

藤田 ● オンラインだからこそ可能になることもあるわけですね。

椎橋 ● 初めてのオンライン学園祭ですが、参加者を増やすという意味では良い試みだったと思います。キャンパスに来られない人も、パソコンや携帯があれば参加できます。家族など幅広い人を対象にできるので、番組の合間に学校の情報も流すなど広報活動の点でも強いかもしれません。

加地 ● YouTubeライブ配信では、視聴者数も目標を達成したんですよ。

椎橋 ● はい。今年は五〇〇人を目標にして、五一九五人が見てくれました。コロナ禍の影響が

学生と校友会との繋がりを深めて

田中 ● 卒業生と現役学生が、一緒に大学をつくっていける関係性がある大学って素敵だと思います。校友会「追風」のメンバーは学生代表として校友会の方たちと話をし要望を伝えられる機会がありますが、一般学生はなかなかありません。卒業生がどのような支援をしてくれているのか知らない学生も多いでしょう。もっと接点を増やして関係性を深めることができればいいと感じます。

船本 ● 校友会に若手会員が増え、経験値の高いベテランから現役生と年の近いフレッシュな若手まで層が広がっていくと、交流の幅や可能性も広がっていきそうです。

押川 ● 私自身、校友会活動に携わっていなかったら、卒業後、大学との関係は切れていたと思います。社会のさまざまな分野で活躍している卒業生がたくさんいる、その人たちをもっともっと巻き込んでいくことがとても大事だと思います。

藤田 ● 今日のように学生と卒業生とが話し合う機会を、継続的に作れるといいですよ。卒業生もいろいろな人、学生も「追風」以外の人を含めて、しゃべり場のような緩い感じの会でもいいので、コンスタントにやるのが大事かなと思います。オンラインも含め、いろんな形で定期的に交流する場をつくるよう企画していきましょう。

船本 ● 私が追手門の職員になったのは、自分自身



2020年12月19日将軍山会館(校友会館)にて

が四年間で成長できてよかったなと感じた同じ思いを、後輩たちにもしてもらいたいと思ったからです。校友会活動でも学生支援委員会に所属して、そう考えながら活動をしています。要望が通るときも通りにくいときもあるとは思いますが、学生の声を聞いて校友会と一緒に大学に届け、より良い環境を実現していきたいですね。

藤田 ● 大学の運営は、今通っている学生を一番に考えていくべきものだと思います。できないこともあるかもしれませんが、現役学生をもっと大切にする校友会でありたいですね。コロナ禍だからこそ変わっていくチャンス。意見をどんどん出してほしい、変えていかないといけないと思います。

大西 ● 今日出席してくれている学生メンバーは、卒業後はまず評議員になって、その気持ちを後輩たちに伝えていってほしいですね。

藤田 ● 校友会の役員は大変そうに見えるかもしれませんが、でも、声がかかったらとりあえずやつてみて間口を広げておくと、自分自身の経験にもなります。

押川 ● 社会に出たら、いろんなところでいろんな人と接点ができます。どんなことでも人と一緒に何かに取り組んだ経験は、社会に出てからでもずっと糧として積み重ねていけることだと思います。校友会がそのような場として五〇年後にますます活性化しているよう、今後とも力を合わせて努力していきましょう。

当時の大学

平木 宏児（追手門学院大学名誉教授）



校友会結成五〇周年
おめでとうござい
ます。

学院創立八〇周年の
事業として一九六六（昭
和四二）年に大学が創立され、私は開学まもない
一九六七年四月に奉職しました。

大学は、国鉄（現在のＪＲ）の摂津富田駅から
スクールバスに乗って二〇分程すると田んぼ道
を抜けて山の中腹にそびえ立っていました。当
時のキャンパスは一号館、二号館、食堂のみで、
大学といってもキャンパス内を歩いてもそれほ
ど時間はかからない小さなもので、敷地内では
高等学校の校舎や大学体育館兼講堂の建設、進
入道路の整備等でキャンパス内はいたるところ
で工事が進められていました。

一九六八年には、高松宮殿下をお迎えして完

成した体育館兼講堂で、創立八〇周年記念式典
が盛大に催され、同時に開催された体育館開き
には、東京オリンピックで金メダルを取った、
東洋の魔女（女子バレーボール選手）と器械体操の
日本代表選手たちを招いて、公開競技を披露し
てくれました。

学生は現在の六学部、一学年一七〇〇人と比
べると約三分の一で、経済学部と文学部の二学
部で学生数は五一七人と少ないことや、学生間
では「おうてもん子」という言葉をよく耳にし
ました。これは学生のお父さん、お母さんが追
手門卒業だとい
うことでした。
学生数が少ない
ことを合わせて
ファミリーであ
ったということ
が印象に残って
います。また、
何もないところ
から、学友会組
織づくりに大学



体育館(1968年竣工)

祭の開催にと学生が一生懸命仕事をしている姿
が昨日のように思い出されます。学生は「この
大学は僕たちでつくる」の気持ちで満ち溢れて
いた印象です。

この精神が校友会にも息づき、地方組織の活
発な活動や多彩な企画が盛大に開催されている
ことを拝見していると、開学当初の学生活動を
思い出させてくれます。

近年、共に働いてきた同僚の何人かの訃報に
接し、悲しさと寂しさが募ります。亡くなられ
た方々のご冥福をお祈りします。

教員にとっても 心強い校友会の存在

水野 浩児（経営学部教授）



経営学部水野ゼミ
は、二〇二〇（令和二二）
年四月に一五期生（就任
後の期生）が入ってきましたが、新型コロナウイルス

イルスの影響

で四月の講義
からオンライン
で指導をし
ています。き
つと、校友会
の皆さまは、
オンラインで
細やかな指導
ができるのか
疑問をお持ち
でしょうが、



ゼミの学生たちとともに（前列中央が水野さん）

意外と効果的な講義を行うことができます。

その背景には、二〇一九（平成三一）年四月
入学の学生は全員がディバイスを保有する
BYODという制度を導入していたことがあり
ます。その年に竣工した総持寺キャンパスは、
デジタル環境に配慮され、講義もペーパーレス
が徹底され、次世代教育のモデルです。

私が本学の専任講師に就任したのは二〇〇六
年ですが、動画を自分で撮って、それを配信す
ることは想像もしていませんでした。さらには、オ
ンライン授業の参加方法の告知やレポート提出
方法など、オンライン上の掲示板で細やかに指
導を行います。きつと水野ゼミの初期のメンバ
ーが聞いたら驚くことと思います。当時は、「自
分で何でも調べろ!!」が原則の指導だったよう
な気がします。今から思えば懐かしい時代です。

時代の変化は激しく、デジタルネイティブ世

代の学生を指導するには、教員側の変化が重要
だと感じます。最近の学生は「ゆとり世代」
と言われますが、「ゆとり世代」の学生はとて
も素直で私にとって学びの連続です。私がパー
ソナリティーを務める番組は名前を変えながら
も一五年以上続いています。今やディテクタ
ーはゼミ生が担当しています。「水野浩児の月
曜情報スタジオ」（ラジオ大阪毎週月曜日二〇時）
は、番組の内容を学生が考え、私の言葉で喋っ
ているので、若者目線を取り入れている点がり
スナーに評価されています。

ガンバ大阪でのエコ推進活動は一〇年以上続
いています。パナソニックスタジアムで行われ
るＪリーグ公式戦全試合で一日一〇時間の活
動を五〇人体制でゼミ生が行っています。はっ
きり言って過酷な活動ですが、笑顔で頑張っ
ている姿を見ると、私も元気が出ます。新型コロ
ナウイルス問題が落ち着いてリーグ戦が再開さ
れたら、スタジアムにご来場いただき、後輩た
ちに激励いただけると幸いです。

厳しい時代に突入しますが、追手門学院大学
の卒業生として胸を張って社会で活躍してくれ
ることをイメージしながら指導を行います。校
友会の先輩は教員にとっても心強い存在です。
これから就職環境など厳しくなることが予想さ
れますが、学生にお力添えいただけることを願
っております。

校友会結成五〇年に あたり

立花 元彦（経済学部経済学科一期生）



結成五〇年おめでと
うございます。

校友会結成に全く関
わりのない私に校友会
結成以前の大学に関し
ての原稿の依頼があり、友人から知恵を拝借し
ながら原稿を進めています（記憶違い、思い違い
お許しください）。

一九六六（昭和四二）年四月の入学式、茨木市
安威の山の中の不便な所にポツンと建った新校
舎へのはとバスでの通学、希望に満ち溢れては
いたものの、先輩のいない一期生、自由の中で
不安もありました。しばらく経過した頃自然発
生的に、同じ組、同じ高校卒業、同じ趣味で文
化系、体育会系の同好会のようなグループがで
き、体育会（まとめ役…剣道部の西川君）、文化会
（まとめ役…美術部、音楽研究部の岡田君）の基礎に
なりました。夏の終わり頃に文化祭、体育祭開
催の話が盛り上がり両グループの話し合いの結
果、開催が決まりました。

急な決定で時間もなく、予算もない中で大学
事務局との交渉役が、どちらのグループにも属
さない私に回ってきて委員長に任命されまし



第1回大学祭でのバンド演奏

た。予算交渉の末に、三〇万円が大学からの最終回答でした。少ない予算の中で各グループは、手弁当、自腹で開催までの短い時間内に準備を進め、無事第一回文化、体育祭(委員長は立花)を開催しました。学校側の窓口は故池田先生(後日、創価大学に教授として行かれました)で開催最後までご指導をいただきました。その後、これに関わった中心人物が、自然、発生的に学友会を設立し私が学友会委員長に就任しました。二年目からは、文化祭、体育祭が、第一回將軍山祭(委員長は辻村さん)と名称を変えて、開催されました。残念ながら第一回文化、体育祭は、忘れ去られてしまいました。ぜひ記憶に留めていただきたいと思っています。

大学時代の経験、知識が私の人生を大きく変えました。

一、先輩のいないがために培われたリーダーシップ(二期生全員に通じる)

二、他の大学に先駆けたコンピュータセンター

生で、お二人とも大阪市立自然史博物館に深く関わっておられた。在学中は、校地の植栽と各地への自然観察、特に学院所有地のある岡山県蒜山地域の自然調査に部員総出で取り組み、「蒜山の自然環境調査報告書」を卒業の翌年に出版したことが思い出深い。担当は、植物特にコケ植物であったが、さまざまな分野に関わりを持ち得たことが今日の自然好きに引き継がれている。就職後、縁あって「兵庫県自然保護指導員」(一九八八年から現在まで)を拝命し、二〇〇八(平成二〇)年度には「兵庫県環境保全功労者知事表彰」を受けられたのも、在学中にお世話になった先生方をはじめ、そこから広がった人の繋がりのおかげであったと固く信じている。また、二〇一五年には、日本蘚苔類学会特別賞を拝受した。これも、部活動時からコケ植物研究の指導を受けた学院高等部の児玉務先生はじめ、大阪市立自然史博物館元学芸員瀬戸剛先生、しだとかけ談話会、岡山コケの会など、多くの知己を得られたことによるものである。

在学時に出会えたライフワークが、二〇〇三年発起人の一員として設立した「認定NPO法人大阪自然史センター」活動に微力ながら生かされるのも、半世紀前の学生生活に端を発している。

(元川西市役所職員／NPO法人大阪自然史センター副理事長)

(富士通のコンピュータ導入)での機械化の基礎知識

三、英語教育での資材と先生方の指導での語学力(マクルーハンで有名な竹村健一先生の大人の英語は、記憶に深く残っています)

これらの能力を生かして、大手電機メーカーの海外子会社生活四〇年は英語を駆使し、機械化の導入を指導(IBMとの交渉、システムの開発等)、担当外業務(製品審査、営業、人事、総務等)の仕事もこなしました。

最近の追手門学院大学の学生の大学内外の活躍は、目を見張るものがあります。追手門学院大学卒業生、在籍生であることを誇りに思い、今後のさらなる活躍を期待します。

(元松下電器産業株式会社(現パナソニック)クレー事業部 経理部)／JHC Sendirian Berhad 社(マレーシアの現地法人物流会社相談役)

学生時代から現代への繋がり

道盛 正樹 (文学部社会学科 四期生)



「八百万生きとし生けるもの生かし活かされ常は無し」

中学・高校とサッカー三昧の日々から、大学の門をくぐったのは、学生運動が下火に

母校に支えられた校長時代

岩崎 陽一 (文学部東洋文化学科 六期生)



九州支部が開設されて数年後の四二歳の時、小学校の教頭として辞令を受けました。当時、お世話くださった佐藤良和先生がOB初の公立学校の管理職が出たとのことで、数人の本部の役員さんでお祝いしていただいたのを覚えています。とても嬉しかったです。

以下、母校や校友に支えられた私の仕事の思い出を紹介させていただきます。

まずは、初めて教頭を務めた小学校で、東洋文化学科の上村祥二先生の助言を受け南京市の琅琊路小学校との交渉を進め、福岡地区で最初の国際交流を開始できました。大学の先生方に感謝です。

地元の篠栗中学校長のときには、地域の要望でパキスタンの短期留学生を受け入れることとなり、今度は、近藤治先生から講義で習ったワールドウー語に助けられました。

このように、東洋文化学科の先生方の影響からか、在外施設での勤務を希望するようになり、夢叶って、二〇〇五(平成一七)年サンフランシスコ

なりかけた一九六九(昭和四四)年、公害問題が取りざたされているときでもあった。目的・目標も持たず、大学生活をどうするかなど全く考えを持ち合わせていない不届き者だった。

しかし、幸運にも二つの道が開かれた。一つが「自分探し」ができた読書会である。社会科学に助手として同時期に着任された吉田正先生主宰の会だった。輪読の一冊、「ジツタルタ印度の譚詩」(H・ヘッセ著、芳賀檀訳、人文書院、一九五二)は今でも書棚から問いかけてくる。先生を中心に五、六人の集まりでは、今までに発想したこともない考え方が飛び交い面食らうことばかりで、全く内容にはついていけなかった。終了後のお酒を介しての雑談は暴論、駁論、ハチャメチャに近かったが、いままでの身の程知らずを知るには貴重な時間となった。その後、蔵内数太先生のゼミに進み、先生最後の不出来の教え子となった。公害・自然環境破壊が社会の関心事となっていた時期に、ゼミでの基調であった「視界の相互性」を切り口に「自然・文化・社会」に顕在化した社会課題を深めたいと考えていた青二才には十分な論考に至らず、今でも頭の片隅で自問自答している。

もう一つは、クラブ活動である。サッカーは母校のOBチームで続けざるを得なかったが、もともとの植物好きであったことから、「生物部(旧名称・生物学研究会)」を選んだ。生物部顧問はクモ学の泰斗八木沼健夫先生と西川喜朗先

コ補習校長として文科省から派遣されました。

ここは、サンフランシスコ地区とサンノゼ地区双方に小学部と中高部の二校種で四校舎を借り上げての授業でした。そのため各週ごとにそれぞれの校舎を巡回・管理指導するという国内とはかなり違った業務でした。ここでの重要な仕事の一つに、帰国生徒・現地生徒の進路指導がありました。関東の有名私立高校の生徒募集会では、系列の大学までの進学システムを利用したり、現地の大学への単位が認められるカリキュラムの工夫をしたりして補習校の卒業生の進路保障に努めました。そんな中、保護者として第一期の野口先輩に会うことができました。大学の先輩が異国の勤務地に在籍されていることの心強さは格別でした。ここでも大学の繋がりに感謝です。

帰国後、最終勤務校は自宅近くの小学校でした。ここでは、タグラグビーの日本一連覇もあり、豪の代表チームの表敬訪問を受けました。



サンフランシスコ補習校高等部修学旅行(LAのグリフィス天文台にて)

その歓迎の挨拶の中で、欧米のような芝生の運動場が欲しい旨の希望を伝えました。すると、その支援企業から芝生の提供があり、今では芝生の運動場が校区の財産となり、多方面で活用されています。

こうして私の管理職(教頭五年、校長二三年)の一八八一年間が終えました。校長として無事務められたのは、当時の大学の先生方や友、勤務先の保護者や先生方のお陰と心から感謝しています。今では、教え子や子どもたちが母校追手門学院大学の後輩になったり、受験を希望するようにもなりました。同窓生としても教師としても嬉しい限りです。

今後も、母校追手門学院大学と校友会が益々発展しますことを心より祈念しています。ご支援いただいた関係者の皆様方に心より感謝申し上げます。

(元福岡県小中学校長／元サンフランシスコ日本語補習校長)

学生たちとの思い出

山口 人士(経済学部経済学科 六期生)

これから綴る学生たちとの思い出は、私が学生部厚生課に勤務していた三一年前に溯ります。当時、厚生課では奨学金、アルバイト、保健室、学生寮(明德塾)、交換留学・短期留学

(現在の国際交流教育課業務)などの業務を行っていました。この話は、故樋口靖先生の肝いりで一九八八(昭和六三)年から実施された「海外語学研修」の第二回研修に、職員として初めて引率業務を担当したときのことです。

一九八九(平成元)年七月二十三日から八月二十日までの約一カ月を、アメリカのカリフォルニア州立大学ロングビーチ校の学生寮で生活しながら英語の研修を行うプログラムで、参加学生は二九人、引率は英米語学文学科(当時)の藤谷先生と私でした。学生たちとは、出発まで合宿研修等の事前研修を通して相互理解を十分深めた上で渡米。現地で用意された研修は、月曜から金曜の午前中が英語のLecture、午後はLecture、その中に四回ほどの課外授業が組まれており、ほかにわれわれがアレンジする課外授業が二回という内容でした。



引率する教職員

藤谷先生とは違い、私は英語がさっぱりでしたので、現地でのさまざまな折衝は藤谷先生、私は学生たちと一緒に授業を受け、学生たちの行動の把握・監督に専念することと

していました。四日目、最初の課外授業であるDisneylandに行く際のバスに関する注意事項がありました。内容は、「事故等があっても大学は一切責任を負わない旨書かれた承諾書にサインしろ」というものでしたが、その説明が学生たちには判らなかつたようで、何故か理解できた私(洋画好きが幸いしたか)が通訳すると、山口さんは英語ができるんや、という学生たちの大きな勘違いから始まった研修でした。

食事は学生食堂で用意されますが、とにかくキャンパスが広大過ぎて、食堂も授業を受ける教室も早足で三〇分以上はかかりますから、朝に強い藤谷先生を除く私と学生たちにとって、朝のウォーキング!?は苦痛そのものでした。

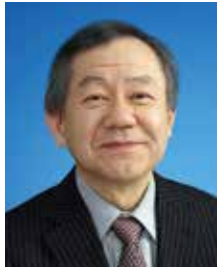
そこで、特に朝の苦手な私と何人かの学生は近くのTargetというスーパーで自転車を購入(帰国時には売ればいいという情報を入手したこともあり、その後は全員が自転車を購入することになる)、キャンパス内での移動はもとより、キャンパス外での行動範囲が大幅に広がることとなりました。とは言え、日没と共にキャンパスポリスが、パトカーでキャンパス内をパトロールしているのですから、キャンパスの広さと怖さをひしひしと感じる毎日でした。そのうち、学生たちにも自然とグループができ、グループでの行動が多くなることは引率する側としても安心であり、またグループリーダーをきっちり押さえおけば大丈夫。私も数人の学生と行動を共に

することで学生間の情報が得易くなり、なんとか引率という大役を果たせたように思います。さて、授業はもとより課外授業も存分に楽しんで無事帰国したわれわれは、帰国後も一緒にスキーに行ったり、食事を共にしたりその絆を深めました。そのときの学生たちの一人が、現在の校友課課長(その後、教務部次長)であることを知る人はあまりいないでしょう。

(元追手門学院大学職員)

八歳から五四歳：そして百歳に向かって

原 健人(経済学部経済学科 八期生)



追手門学院大学で学んだことってなにかなあ？ 正直に言うとう、学問的なことかと思ひ出せる内容と言へばアヘ

ン戦争を題材にした経済学ぐらいでしょうか！当時のキャンパスは七年経ったといえどもまだ真つ白なベンキヤコンクリートの匂いが所々に残っていました。安威周辺は住宅より田んぼの方がずっと目立つほどで將軍山にそびえる白い建物群はなかなかのものでした。この時代、車は若者の憧れでしたが十分な広い駐車場がなかつたためか原則自動車通学は許されませんでした。

した。が、裏山のお寺(名前は忘れしました)の空き地に車を止め獣道を抜けて教室へ。三回生のときに駐車場が整備され晴れ晴れ自動車通学が認められました。

追大しか知らなかつた私ですが、他大学を訪問したときに学生や建物の多さ、またキャンパスが活気に満ちていて、その上おしゃれなカフェやレストラン(追大のそれは高校生と共有の食堂)、そして生協の運営する数々のサービスなどを知ってちよつとガツクリした思ひ出も。

学歴社会が強い日本社会で関東、関西の超有名大学との交流の場に参加した私は出身校を言うのに躊躇したことも。しかし、小学部からの純粹追手門学院育ちの私はこれから育ってくる学院生のためにも人一倍大きな声で、追手門学院大学への宣伝をしてきました。

テスト前になると代理出席科目は友達のノートが唯一の頼りですが、コンビニなんて単語もない時代、コピー機は正門横に存在したひなびた喫茶店に置いてある一台だけ。今より三倍デカイ機械でとるコピー代はとても高価で、しかも速度は一〇倍遅く、一枚ごとにコイン投入、時々紙詰まり付き、おまけに学生が行列をつくり試験前は大変でした。

また、追大には正式な講座はありませんでしたが、友人有志が集まって中国語(麻雀)を勉強しました。実はこれが卒業後により一番役立ちました。追大は偏差値がここ毎年上がり全国大学

ランキングで難易度急上昇中だとか。私の知り合つた追大は八歳(創立八年目)、今年で五四歳(創立五四年目)。大きく成長して、摂神追桃の学群に名を連ねるまでに。

ところで世界で日本国が好かれ尊敬されてきたのは、日本人が人として誠実に謙虚に感謝をしながら行動してきたからだと思ひます。しかし、経済が豊かになってからはそれらが後回しにされ、肩書や権威や納税額が人としての評価に繋がる社会になってしまいました。残念ながら日本の将来をこのような人たちが支配してしまふと子孫が幸せになることはないでしょう。五〇年後、一〇〇年後の日本を担う人を創る大学が求められています。

世界中の政治、経済、社会の価値観は今までと全く異なつた予測不可能な方向に進んでいきます。答え(正解)は存在しません。自分で考え、答えを導きだし、責任もつて誠実に謙虚で感謝しながら行動できる人。私はそのような人たちに社会を支えてもらいたいと望んでいます。〇〇大学を卒業したから立派な人と思われるのではなく、「立派な人やな、この人追手門学院大学卒なんや！」つて思ってもらえるように。人として立派に成長できる環境を持った大学へと。追大の未来を在校生のみならず卒業生も一体となつて創っていきましょう。

(株式会社データコントロール代表取締役／原鉄道模型館副館長)

転機はある！ 人との出会いを大切に

近藤 眞弘（経済学部経営学科 九期生）



一九七四（昭和四九年）四月に慣れ親しんだ滋賀の地から一歩踏み出し、大阪府茨木市に位置する追手門学院大学

へ進学、高校も九期生、大学も九期生、大学は自由で伸び伸びと学べ、社会勉強もできる環境であると希望に胸を膨らませ大学へ向かいましたが誰ひとりとして知り合いがなく、不安も半面！！

バスを降りてキャンパスに向かう坂道、クラブ活動の勧誘が毎日行われる私の希望する体育会系のクラブがないことから断るのに大変な思いをしたものでした。

しかし今思えば学生時代の思い出としてクラブ活動は必要だったと思っています。

月日が経つにつれ友達も増え、講義の合間を見計らっては遊びに出かけ、地元へ帰ればアルバイトの日々を繰り返し、結局必須科目を四回生まで持ち越し、単位を取得するのに四回生も結構通学したものでした。

就職活動といえば四年前とは大違い、オイルショック後の影響もあり結構厳しい活動だったことを思い出します。



バレーボール部の練習に打ち込む大塚さん

スが發揮できるよう、身体を鍛え、技術を磨き、チームワークを醸成させてきました。私たちの戦うコートにスタープレーヤーはいませんが、レギュラーも控えも裏方も、それぞれが本分を尽くし全員で支え合う「家族」のようなチームが形成されていました。

当時の仲間たちとは、三〇年以上を経た今もあの頃と変わらない間柄で、友人たちとの交友は、日々の重圧を忘れさせてくれる貴重な時間です。それぞれが違う道を歩んでいる今でも、あの頃培われた「家族」の結びつきは私の宝物です。

縁あって衆議院議員の故原田憲先生に謁見を賜り、私は卒業後の一六年間を秘書として、東奔西走しながら為政を学んできました。第四四回衆議院選挙で初当選し、現在四期目を務めますが、選挙のたびに大学時代の仲間たちが駆け

田舎の長男であることから近隣府県での就職を考えていたところ、私の興味のある営業職に就け仕事はバリバリ、組合活動も行い執行委員長も務めるなか一六年目に転機が！ 人との出会いとは不思議なもので、お客様から当社に来てくれないかとお声掛けをいただき転職、こちらでは総務関係を主に販売も担当し、役員に就任させていただき一六年目に再び転機が訪れました。

地元の方からお声掛けいただき、今までとは別世界である政治の世界へのお誘いです。

現在は天津市議会議員として三期一〇年目、市政の発展、市民福祉の向上および安心・安全なまちづくりに取り組んでいます。

また社会体育関係では三五年間取り組み、市のスポーツ少年団活動、滋賀・近畿小学生バドミントン連盟会長やまた高校の同窓会長も務めています。

大学校友会では評議員並びに滋賀支部長として会員の皆さんと交流を深めるために取り組んでいます。



全国小学生バドミントン選手権大会表彰式での近藤さん

付け激励いただいています。第四次安倍改造内閣では国土交通副大臣を拝命いたしました。これも偏に大学・校友会関係者の皆様からご指導ご鞭撻をいただきました賜物でありまして心から感謝申し上げます。

「同腹一心」、追手門学院大学での学びと実践は、私の中で確実に血肉化し、フィロソフィにまで高められています。

最後に追手門学院大学の教育理念である「独立自強」、「社会有為」を基に、幅広い多様性のある力を輩出し続けられることを願い、各位の一層の活躍を祈念いたします。

（衆議院議員／元国土交通副大臣）

追大と私

手塚 大輔（文学部心理学科 二四期生）



追手門学院大学校友会が結成五〇周年を迎えるという。誠にめでたいことである。実は今年（令和二年）私は一足早く五〇歳になった。五〇歳というのは大学同窓会の年齢としては若いかもしれないが、人間の年齢としてはそれなりに長い。いずれにしても自分とはほば同じ歳だと思ふと感慨深く、校友

大学時代の社会勉強や社会に出てからの人との繋がりは非常に重要だと実感しています。今後も人との出会いを大切にし、校友会の発展をご祈念申し上げます。

（天津市議会議員／元天津市議会議員長）

学生時代から 現代への繋がりが

大塚 高司（経済学部経営学科 二〇期生）



追手門学院大学校友会の結成五〇周年にあたり、謹んでお祝い申し上げます。

私の四年間の大学生活は、若者が謳歌すべき青春のすべてをバレーボールに打ち込んできました。当時、中島監督の厳しい指導の下、私は二回生でレギュラーに選ばれ、三回生の終わりに主将を拝命しました。朝大学へ行くと、部員たちは部屋に直行し、厳しくも和気藹々と練習に励みました。長時間に及ぶ練習を終えた私たち部員は、部室の下階にあるお好み焼き屋や、うどん屋に駆け込み、空き腹を満たしたものでした。

バレーボール部の主戦場は、春季と秋季に開催される関西大学リーグ戦でした。年二度の檯舞台に向け、私たちは一〇〇%のパフォーマンス

会、そして追大に対して今まで以上に親近感が湧いてくる。

私は随分長いこと追大にお世話になっている。学部生、大学院生、研究生と計一四年間、学生として追大に在籍した。その後は司法試験の受験生となり、追大とは疎遠になったが、弁護士になってからは大学広報の取材や講師の依頼、校友会の行事などで声をかけていただくようになり、本年からは校友会の評議員も務めさせてもらっている。追大に学部生として入学してから三〇年余り経つが、今でも母校と関われることは有難いことであり、それで少しでもお役に立ち恩返しができるのなら、それはこの上ない喜びである。

追大では心理学を専攻した。といっても本学の空手道部に入ることが入学の目的で、心理学を勉強することが目的ではなかったから、学部の四年間はクラブ活動とアルバイトと遊びばかりで、ともに勉強をした記憶はない。それでも大学院に進学させてもらい、それからは心理学はもちろんのこと、恩師の影響でさまざまな分野の書物を読むようになり、視野が拓けた。それが私の人格形成に大きな影響を及ぼしたことは間違いない。追大の学生であった一四四年間は、モラトリアム期間としてはいささか長すぎるが、私の人生を語るにおいては欠くことのできない重要な時間であった。妻と出会ったのも追大であり、現在、二人の子宝にも恵まれてい

る。それらも考え合わせると、追大には感謝してもしきれない。

写真を一枚添えてほしいと頼まれたので一枚

選んでみた。二〇歳のときの写真である。人目に曝すのはやや恥ずかしいが、当時、演武（武道系クラブの有志で組織された応援団みたいなもの）に参加していた私を写真部の友人が撮ってくれた、お気に入りの一枚である。校友会の今後の益々の発展と、コロナ退散を祈念しつつ。

（大阪上本町法律事務所 弁護士



空手道部時代の手塚さん

追大での学びと繋がりを活かして

大槻 育宏（文学部心理学科二四期生）



学生時代は、とても楽しい時でした。井上知子先生のゼミで、よくアンケートをとってデータ分析をしていた思い出があります。ほかにはマスコミ研究会で部長をしたり、校友会の役員もさせてもらった

り。お酒もよく飲みました。

マスコミ研究会では、みんなでわいわい楽しく過ごすことも多かったようですが、遊ぶ時は遊んで、やる時はやるというのが、当時の流儀。合宿をしてドラマやテレビCM、広告を、自分たちでテーマを決めて真剣に制作をしていました。年に一度は梅田のホールを借りて、作った作品の上映会を他大学と合同で行っていました。

ゼミのテーマでもあった青年心理学に興味があり、教育関係の仕事に就きたいと思っていて出会ったのが、小学館集英社プロダクションでした。エデュケーション事業とメディア事業とを展開している会社でした。入社後まずはエデュケーション事業で英語教室の担当をしました。この教室事業で子どもたちとふれ合う時など、心理学科で学んだことが活かされました。その後就いたキャラクタービジネス事業の仕事で、広告代理店や出版社と仕事をするが多かったのです。マスコミ研究会でかじっていた専門用語などが活かせて役に立ちました。

長年携わったキャラクタービジネスの仕事では、漫画やアニメの作品グッズや広告に活用してもらう仕事を通して、玩具や文具・雑貨メーカーや広告会社の方々、また、海外のエージェントの方とも知り合うことができ、とても貴重な経験になりました。アニメ制作ではアフレコをされていた芸能人の方と飲みに行ったり、温泉に行ったり。担当だった『釣りバカ日誌』

憶というアルバムのページを鮮やかに彩っています。

一九九九（平成一一）年の終わり、ノストラダムスの予言にあった「恐怖の大王」が空から降ってくることはありませんでしたが、その代わりに、当時の文化会委員長が、私を訪ねて部室までやって来ました。「校友会副委員長をやるかい」。それは、あまりにも意外な勧誘でした。確かに、三年間部活動に打ち込んできましたが、校友会活動に理解は深くはありませんでしたし、校友会に知り合いもいなかったのです。ただどういうわけか、そのときはやってみようと思えました。氷河期真っ只中の就職活動からの現実逃避だったのかもしれませんが。

そして、校友会活動を始めてみると、それまで何となく過ごしていた学生生活が、多くの人々の支えによって成り立っていたのだと理解し、部活動とはまた違って「人のために何ができるだろうか」と考えるきっかけとなりました。わずか一年間の校友会活動ではありましたが、結果としてこの出会いが今の私の礎になり、また校友会活動へと導いてくれたのも事実です。

現在、私は奄美大島の文化や民俗、とりわけシマ唄と呼ばれる民謡に傾倒しているのですが、そのシマ唄の中に、このような唄があります。

糸や切れれば結びもなりゆり
縁ぬ切れれば結びならぬ

の作者・北見けんいち先生とは、今でも毎年お誕生日会をご一緒させていただくなど仲良くさせていただいています。

この後、再びエデュケーション事業で、幼児教室の仕事に携わることになりました。ここで、ミキハウスの東日本支社長・木村力造先輩（九期生）に、偶然出会いました。同じ東京在住の追大生ということが分かって意気投合して、いま、一緒に校友会の東京支部を盛りあげようと頑張っているところです。社会へ出ると先輩後輩など人との繋がりはとても大切だと実感し、そこから繋がる人脈が増えていることも感じています。校友会の繋がりは、これまで出会うことのなかった大先輩たちとも出会えて刺激を受けたりしますので、メンバーを拡げたいです。東京で就職したり興味があつたら、ぜひ声をかけてほしい。東京の校友会で楽しく盛り上がりしたいと思います。

二〇年ぶりくらいに大学に来てみると、新校舎も建って立派な大学になったという印象があります。母校のステータスがあがっていくということは誇りに思い、逆にわれわれ卒業生ももっとがんばって、追手門の出身ということを誇りに社会で活躍していけるために、もっとがんばらないといけないなと引き締める思いです。

（株式会社小学館集英社プロダクション 総務人事部
部長／株式会社ミキハウスアンド小学館プロダクション 取締役）

これは「機織りの糸は切れても結べるが、縁が切れると結びなおせない」という、人と人の縁の大切さを唄った歌詞です。一本の糸はほんの少し引っ張っただけでも簡単に切れてしまいます。しかし、経糸と緯糸で織り上げた大島紬の生地は、簡単には引き裂けません。私は追手門学院大学の卒業生たちによって紡ぎ、結びつき、広がっていく幾多の縁が、美しい大島紬の柄を描き出すように、母校の益々の発展へと繋がっていくことを、追手門学院大学卒業生の一人として願ってやみません。

（国家公務員共済組合連合会

学び続けることの大切さ

運天 政元（文学部アジア文化学科三九期生）



私は追手門学院大学で、長い人生で活かされる「学び続けることの大切さ」を学んだように思います。

私は今、姫路市の製鉄所で電気設備の改修・新設の仕事に携わっています。二〇一九（平成三二年）三月に長男が生まれ、もうすぐ二人目の子どもが生まれる予定です。仕事はハードですが、とても幸せな日々を過ごしています。振り

私の礎を築いた 校友会活動

秋吉 崇仁（経済学部経済学科三二期生）



追手門学院大学校友会の結成五〇周年を迎えるにあたり、謹んでお祝い申し上げます。

着慣れないスーツに身を包み、新しく始まる大学生活への希望で胸をいっぱい膨らませたあの入学式から、もう二〇年以上もの月日を重ねたのだと思うと、時の流れのはやさには本当に驚かされます。

初めて追手門学院大学のキャンパスを訪れたときの第一印象は、とにかく「遠い」でした。なにしろ、授業に出席するためには、毎朝六時前に起床しなければならなかったのです。しかし、片道二時間以上かかる通学への不安も全くの杞憂に過ぎませんでした。私はすっかり、キャンパスライフの虜になってしまったのです。中でも「ピアノ電子オルガンインストゥルメンタル部」で過ごす時間が学生生活の時間の大半を占めました。フレッシュマンキャンプで、何度何度も学院歌を歌ったこと、バンドメンバーたちと練習に明け暮れたこと、定期コンサートの準備に話し合いを重ねたことなど、部活動で過ごした三年間は今も色褪せることなく、記

返ってみると、いろいろなことを経験してきたので、今の幸せがとても運の良いことのようにも思われてきます。

「禍福は糾える縄の如し」という言葉の示す通り、今まで出会ってきたさまざまな人々が自分の人生を作ってくれているので、お世話になった方々には心から感謝しています。

大学では文学部だったので、歴史や中国語を学んでいました。ですので、大学で学んだことが直接には今の仕事に繋がっていません。しかし追手門学院大学で学んだ「学び続けることの大切さ」、私はそれこそがとても大切なことだと思っています。

私は今、電気主任技術者という資格の取得を目指して、高校時代に挫折した数学を学びながら、毎朝早起きして勉強しています。数学を毎日学びながら感じることは、「分かった」という一時的な納得よりも、「分かっている」ときに少しずつ気づいて、それを咀嚼・消化・吸収し、大切に育てていく」ということの方が、何だか自分の身体には合っているし、現実的なあ、ということです。自分の不完全さに気づいて、それをコツコツと埋めているときに、とても満足感を感じています。

早起きして勉強していると、一歳の息子が起きてきて、膝の上上がってきます。正直勉強の邪魔ですが、息子の姿からも学べることは多いと感じます。この世に生まれてきて、今のこ

PR活動やオブジェの企画・製作活動を経験しました。夜遅くまで話し合いをしたり、先輩・後輩や友人たちと盛り上がったことも今となっては良い思い出であると感じています。

卒業してから八年が過ぎ、社会人になってからは日々忙しくなり、中々会うことが少なくなってきましたが、大学生活で得たものはどれも大切なものであり、それらが社会人になった今でも生かされていることは多々あると思います。四年間の大学生活は人生で一度きりです。現役学生のみなさんには悔いのない大学生活を過ごしてほしいと思います。僕にとってもこの四年間の大学生活はとても楽しかったですし、社会人になってから振り返ると今ではなかなかできないことを体験できた学生生活だったと思います。

(株式会社鶴屋吉信)

経験と学びが社会人としての基礎を構築してくれる

北村 志保 (経営学部経営学科 五〇期生)



このたびは、追手門学院大学校友会の結成五〇周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。

とをきくと息子は大人になってから覚えていないでしょうが、息子なりに世界を掴んでいる最中なのでしょう。彼が踏み出さんとする一歩と同じような一歩を、私自身もこれからも踏み出していききたいと切に思います。

学びたいことはたくさんありますが、学べることが限られているのも事実です。当面の目標を格好良く述べてみると、「論語読みの電気主任技術者」、「東アジア史に詳しいアマチュア無線技士」といったところでしょうか。微分・積分やマクスウェル方程式を学びながら、自分の中のクリシナムルティも大切に、原子力というもののへも理解を深めていきたい、そんな思いを抱きながら、これからも一日一日を大切に、家族を大切に生きていきたいと思っています。

(日鉄テックスエッジ株式会社)

大学生活は人生で一度きり

松尾 駿 (社会学部社会学科 四四期生)



追手門学院大学に進学した理由は、私の母親と母親の妹が中学・高校と追手門学院を卒業しており、母親の薦めもあり、それが決め手になりました。

さて、私が追手門学院大学に在学いたしましたのは、二〇一五(平成二七)年から二〇一八年の四年間になります。追手門学院大手前高等学校にも在学しておりましたので、学院には一〇年間通いました。

学生時代は、学生団体のキャンドルナイト、リーダーシップについて学ぶリーダー養成コース(OLS)、「食」を通じた商品開発プロジェクトを行う経営学部村上喜郁ゼミ、入学前教育プログラム of 学生スタッフなどさまざまな活動に参加し、いろいろな経験と学びがありました。村上喜郁ゼミでは、中央卸売市場、まいどおきに食堂と連携した「追手井プロジェクト」のリーダーを務めました。商品である井のコンセプトをはじめにつくるのがとても苦労したのを覚えています。また、メンバーに仕事を振るのが難しいという壁にもぶつかりました。なかなか、相手を

信じて仕事を投げてみることや、相手に応じた仕事内容、レベル感、そして、「相手は何を求めてプロジェ



「追手井プロジェクト」のメンバーとともに

社会学部では

メディア関係の授業を受講して



キャンドルナイトスタッフのメンバーとともに

いました。社会学部は一回生の秋学期からゼミが始まりまして、一回生は内海先生、二回生は柏原先生、三回生と四回生は城野先生のゼミに所属していました。また、四回生のときには大学生活の集大成として二万字の卒業論文を書きました。当時は就職活動が続けながらの卒業論文を制作していました。そのときの思い出としては、完成に向けてラストスパートをかけた頃に家のパソコンが不調になり、家で書くことができなくて、その後大学でひたすら書いて、締め切り当日に提出したことを今でも覚えています。また三回生のときにはガンバ大阪のインターシップに参加しまして、二週間試合・イベント運営やホームタウン・スポンサー回り、選手対応などの貴重な体験をさせていただきました。課外活動では將軍山祭のスタッフや学生広報スタッフ、キャンドルナイトスタッフを経験しました。その中でも、キャンドルナイトスタッフは二年間経験しまして、將軍山祭などでの

クトに参加してくれているのか」を考えることが難しかったです。

村上先生以外にも、お世話になった先生がいます。社会学部の上田滋夢先生です。上田先生とは、リーダー養成コースで出会い、二年生から社会学部上田ゼミにもお邪魔させていただきました。上田ゼミでは、スポーツを中心に社会学を勉強しました。例えば、日韓の違いについて、韓国研修などで現地調査などし、みなでさまざまなことを客観的に考察し、それぞれの立場から考察することが多かったのです。たまに頭が痛くなったのを覚えています。物事の本質についてさまざまな観点から考え、分析し、自分なりの答えを見つけていく「大切さ」を学びました。

また、上田ゼミでは企業の方や他大学との交流や食事の機会が多かったです。私が就職活動中に出会った企業が実は現在の就職先です。私は追手門学院大学で、たくさんさんの経験と学びと共に、一緒に苦勞し、喜びあった仲間がたくさんいます。そして、その経験と学びが社会人の基礎構築をきつと手助けしてくれるものだと確信しております。

未筆ながら、追手門学院大学並びに校友会の一層のご発展と皆様方のご活躍を祈念致します。お祝いの言葉とさせていただきます。

(東亜道路工業株式会社)



評議員会

総務委員会

総務委員会が所掌する業務は、校友会活動を円滑に進めるために、諸規程の整備、各種会議開催や活動記録の保管等、校友会の諸活動を支える内容となっています。

規程改正等については、根幹となる会則に関しては、実際の運用等を考慮して適宜改正作業を行い、その他の規程等に関しては、会則に即して、あるいは、現行の運用等に合わせた改正作業を行っています。

母校の大学も多様な切り口から改革を実施され、その実を挙げておら

校友会の活動

れますが、その中では、校友会や卒業生の存在が注目され、卒業生各位の活躍が期待されていることも事実です。

卒業生の活躍が母校の飛躍の原動力となるように、校友会においても、会員各位からのご意見やご教示をいただき活動をより充実させたいと思います。また、校友会の各種行事は、会員の皆様の協力があつてこそ実施できるものです。

広報委員会

広報委員会では、年二回発行の校友会会報、ホームページ、フェイスブック、交遊誌「LinkA」等を活用し、校友会活動の紹介や各種行事の案内、同窓会案内、支部日より、在校生および卒業生の活躍などを広く校友会会員に情報発信をしています。また、今年度からは校友会の集まりがどの世代にも身近になり、懐かしい顔に出会える場をますます広げていくことを目的とした公式LINEを開設しました。そして情報伝達のみならず、会員の皆様との双方向型コミュニケーションの構築

支部支援委員会

支部支援委員会は、全国十四支部の活動を応援しています。地域校友の親睦を図り追手門ファミリーづくりをいかに進めていくか、追手門学院大学の各担当と協力して発展させていきたいと考えています。

二〇二〇(令和二年)に石川支部、徳島支部、CHINA支部ができました。今年は、松山、高知、広島、鳥取と支部設立の準備に入ります。ただ、委員会が動くだけではどうにもなりません。学友会、体育会、文化会、無所属委員会のOBの方々、

を目指して活動しています。



活動風景

同窓会支援委員会

また、すべての校友の皆様のお力をお借りして、順次進めていきたいと考えております。

同窓会支援委員会は、会員相互の親睦を図るため一人でも多く参加できる同窓会を企画、実行するとともに、男女を問わず幅広い年代層の会員が興味を持ち、参加していただけるよう活動しています。具体的には還暦、古希同窓会の開催や各同窓会(学年、ゼミ、クラブ、職域等)の開催支援を行っています。

各委員会および関係各位との連携

つながる。
ひろがる。
もりあがる。



四国支部の懇親風景

を強め、同窓会の活性化、特に若い世代の会員が気軽に参加できる校友会を目指し活動しています。

これからも会員の皆様に、校友会の「存在意義と価値」を認識していただけるよう努力していきます。



還暦の集い(2019年 13期生)



古希同窓会(2009年 3期生)

企画事業委員会

企画事業委員会は、校友会の目的である「会員の成長と母校の発展に貢献」の基礎となる会員相互の交流と親睦を図る活動をすることを目標にしております。

「交流と親睦」といっても、まずは集まることが前提です。集まる場の提供、集まりたくなる場の企画、その広報の方法、集まったときの運営進行等いろいろな工程があります。集まったときの喜びを伝えることも重要ですし、伝えるためには場が必要です。そこから一歩踏み出すことを考え、行動することに邁進したいと思います。

委員だけでは微力です。ご意見や



ゴルフ大会



宮本輝氏(壇上右)と真銅副学長(当時、左)との対談風景

では、結成五〇周年の記念事業として二〇二一年五月三〇日にリーガロイヤルホテルにおいて記念式典・祝賀会を行います。また、そのほかに結成五〇周年の記念事業として、①キャッチフレーズ・ロゴの作成、②記念講演会・対談、③記念グッズの作成、④記念行事、⑤記念植樹・記念碑建立、⑥記念誌の作成、⑦校友会報縮刷複製版の作成など記念式典・祝賀会を含め八つの記念事業を計画し、進めています。

ホームカミング・デー実行委員会

当委員会は、校友会の年中行事として最大の集客を誇るホームカミン

ご教示をいただき、一步一步交流の場の提供をできるよう、事業を行っていきます。

学生支援委員会

卒業生が主体だった校友会も、二〇一八(平成三〇)年入学生から学生が会員となりました。このことに伴いまして令和元年度に「学生支援委員会」が設置されました。

当委員会では、優秀な学生や課外活動(個人・団体)を支援、奨励する目的で奨学金を授与しております。また、留學生との交流の機会を提供したり、多岐にわたる分野で活躍中の卒業生と学生が気軽に話し合うことで、将来に希望を持つことのでき



国際交流バスツアー(姫路城)



校友大会

グ・デーの企画運営を担っております。これまでのホームカミング・デーは、安威の丘にて母校に想いを馳せていただく一日を演出することに重きをおいて開催してまいりました。二〇一九(平成三一・令和元年度は、新キャンパスのお披露目を兼ねて、校友会史上初めて総持寺キャンパスにてホームカミング・デーを開催させていただきました。校友会は卒業生と現役生(二〇二〇年度に学生会員化完了)を会員とする組織へ移行しました。今後のホームカミング・デーの企画運営は、会員の皆様の想いを大切にしなが、時代や環境にマッチした新たなチャレンジに挑んでまいります。

財務委員会

校友会の将来を見据えた財政や財務の健全性・透明性を高める活動を推進し、財務シミュレーションを含めた提案型の委員会を目指します。

会長をはじめ常任理事会の専権事項や各委員会・支部や地域エリアの活動がより大きなパワーとなり、校友会の目的に合致した各委員会事業推進の活力と活性化に繋がるような予算配分や財政措置へのチェックと提案に努めます。

五〇周年をはじめ周年事業・記念事業などが会員にとって有意義な成果を伴うためにも、他の委員会との協働が大事と考えます。

学生会員制度も順調に推移を重ね、校友会の若手をはじめOBとの

事務局

現在の事務局は、二〇一八(平成三〇)年四月に設立された学院の校友課と連携して校友会活動をサポートしております。

これまで事務局は、卒業生名簿の管理や会費の徴収等校友会の運営上の管理が大きな役割でしたが、卒業生名簿の管理、会費徴収等は学院に代行していただくことにより、より細かなサポートができるようになりました。委員会制度が導入されたと同時に事業計画制度を提案。予算や決算の科目を活動の目的に応じた名称に変更するなど、会員の皆様に校友会活動の内容をわかりやすくすることを念頭に取り組んでいます。



新役員懇親会

周年事業委員会

新たな交流と連携が校友会の次世代を担うパワーとなることが期待されるとともに、人口減少社会における少子化(二八歳人口の推移)を見据えた校友会の新たな価値創造と学院のブランドをさらに高め広めるワンチームとしてのプラン創りが重要です。校友会の法人化の可能性や、他校の校友会の運営などについても検討を重ねて、財務委員会としての新たな役割も模索してまいります。



オープンキャンパス日の駅前清掃

校友会は、一九七二(昭和四六)年の第二期生の卒業から二〇二一(令和三)年三月卒業の五二期生の卒業で創立五〇周年を迎えます。校友会

東京支部

校友会創立五〇周年を心からお祝い申し上げます。一九九二（平成三）年発足しました東京支部も近年は若い会員の参加も増えてきました。参加しやすい改革の成果が出てきたと思います。昨年の東京支部の集いは、五〇人と過去最高の参加者がありました。三年連続オリンピックメダリストをゲストにお呼びした効果



支部総会と集い(タントタント渋谷)

東海支部

もあつたかもしれません。校友会活動のイメージアップと組織運営をスローガンに、東京の方々に追手門学院大学を認知していただける活動と、東京で働いている仲間のバックアップを更に強化していく所存です。ご支援よろしくお願い申し上げます。

このたびは校友会結成五〇周年おめでとうございます。

東海支部は、一九九六（平成八）年に愛知県、岐阜県、三重県と三県に



支部総会と集い(愛知県春日井市水徳)

石川支部

わたり在住する交友の皆様と広く友好を深めることを目的に発足しました。毎年九月には支部会を開催するなど校友会支部活動開始当時から活動を続けてまいりましたが、残念ながら距離的な範囲が広いため活動の輪がなかなか広がらないまま、現在に至っております。

追手門学院大学校友会より新たに北陸方面に初支部設立の声が上がりましたが、昨年度の理事会で石川支部設立が承認されました。石川は一四〇名を超える会員がいらつしやいます。二〇二〇（令和二年）は新型コロナウイルスの世界的大流行となり、世の中の変化が激しく、経験したことのない日常生活となりました。そし



石川支部役員会

滋賀支部

ていろいろな活動に影響を与え、石川支部設立総会も二〇二〇年七月に行う予定になっておりましたが、延期せざるを得なかったのです。

校友会の基本理念「広げよう新しい交流と連携」に微力ですが、全力で取り組みますのでご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

二〇一五（平成二七）年の滋賀支部設立以来五年の年月が経ち、会員相互の親睦を第一にさまざまな取り組みを行ってまいりました。

年次総会はもちろん、「一番丸に乗船し紅葉と琵琶湖クルーズと淡海の美食を楽しむ」「八幡堀散策とラ・

きました。

二〇一九年度には支部結成一〇年を迎えまして、記念事業として、九月二十一日に結成一〇周年記念祝賀会を開催しました。

今後は、京都府北部の居住者からの参加、並びに北部部会の開催を促進させたいと考えております。また、各年代の人の輪を広げるための施策を行っていきます。

奈良支部

奈良支部は十一番目の支部として二〇一七（平成二九）年に設立されました。県内には校友会会員が約



懇親会での記念撮影



2015年の設立総会(琵琶湖ホテル)

コリーナ(たねや・クラブハリエ)の見学」等、滋賀の名所を再発見するツアーなどを企画し多くの皆様に参加いただきました。

また、滋賀支部会報を発行し会員の皆様に状況報告も行っております。

当支部は、会員総数約二七〇〇名を擁する支部ですが、支部事業への参加者を増やすことが大きな課題となっています。

今後も役員一同いろいろな企画を考案し、会員の皆様にご参加いた



バスツアー(八幡堀)

けるよう取り組んでまいりますので宜しくお願いいたします。

～深めよう 広げよう 滋賀支部メンバーの輪～

京都支部

京都支部は、二〇〇九（平成二一）年度に発足し、京都に居住または在勤している校友会会員のネットワークをつくり、交流を進めています。そのために、親睦を深めるための数々の行事を開催していくことを目的にしております。総会、伏見の酒



宮川町ビアガーデンでの懇親会



結成10周年記念のつどい(ホテル京阪京都グランデ)

蔵めぐり、宮川町ビアガーデン、卒業生による講話、大山崎山荘美術館の見学、親睦会等を今まで開催して



中国支部総会(サン・ビーチOKAYAMA)

一九九三(平成五)年に中・四国支部として発足し、二〇一〇年に中国支部として分離して、広島・岡山・山口・島根・鳥取の五県の地域になりました。

中国支部

といった豊かな地域性を実感できるような場での支部総会開催等、役員一同知恵をしぼり、汗をかきながら頑張っていますが、参加者の確保は大きな課題のひとつです。

今後も「和歌山らしさ」あふれる行事を企画し、より多くの会員の皆様に参加いただけるよう努めてまいりますので、よろしく願います。



2017年奈良支部設立総会(ホテル日航奈良)

二〇〇〇人、毎年開催する奈良支部のつどいの支部会員参加率の高さが特徴です。また奈良支部のつどいは別に、奈良県人会と銘打って気軽な交流会(飲み会)も開催しています。これはつどいの出欠を返信していただいた方、約二〇〇人を対象に案内を送り参加者を募っています。

支部のつどい、県人会ともに参加者同士の「初めまして」から「久しぶり」の挨拶に変わり、顔見知りになっていただくことは嬉しい限りです。今後も地道に一人でも多く顔見知りになっていただき、奈良での輪

一九九三(平成五)年に中・四国支部として発足し、二〇一〇年に四国支部となりました。

四国支部では近年は毎年、香川県内で支部のつどいを開催し、それに合わせて母校の先生の講演会と懇親会を実施しています。ただ四国支部は、四県にまたがる広範囲な支部であるため、参加者がなかなか増えないという現状があります。

これを改善するため二〇一八年度より、高知県、徳島県、愛媛県のつどいを開催し、各県内における参加

四国支部

今は岡山での活動が多く、できれば各県に出向いて交流を進めていければ良いのですが、範囲が広いため、なかなか進まないのが現状です。

これから進めていくにあたっては、各県のどなたかに代表になって各県ごとの小集会等を開いていただき、それに対して協力していければと思っています。

少しでも多くの皆様に参加しやすい場を作っていければと思っています。皆様の参加、ご協力をよろしく願います。

兵庫支部

兵庫支部は二〇一七(平成二九)年に、ANAクラウンプラザホテルにおいての設立総会を開催してから三年が経ち、二〇二〇(令和二年)二月に卒業生のお店である「天安閣」にて四回目の総会を開催することができました。兵庫県には約八〇〇人



2018年度支部のつどい(キャッスルプラザ明石)

を広げていければと思っています。奈良は本場に近いので、奈良在住以外の方もつどい、県人会にぜひご参加ください。



2019年度支部のつどい(尼崎城にて)

の卒業生がおられ、多岐にわたる分野で活躍されています。卒業生の人と人を繋ぐビジネスマッチングを行うことでネットワークづくりを構築し、より親睦を深めていきたいと考えています。

これまでに総会、酒蔵めぐり、魚棚商店街めぐり、姫路城や尼崎城の見学、懇親会等の「つどい」を開催しています。毎年異なる地域でのつどいを開催し、みんなが楽しく交流できる「支部のつどい」を開催していきます。

和歌山支部

和歌山支部は二〇一五(平成二七)年八月に設立し、今年で五年を迎えます。



四国支部総会(香川善通寺観光交流センター)

者を集め支部活動への理解を深めるとともに、四国支部総会への参加者を募るようにしております。

このつどいを通じて二〇二〇(令和二年)には、徳島県支部が立ち上がり、四国支部からの独立を果たしました。今後も各県のつどいを開催し、四国四県がすべて独立した支部となることを目指しております。

徳島支部

二〇二〇(令和二年)四月、徳島支部が産声を上げました。支部設立に際して、ご支援、ご指導をいただい



1月18日開催の新年会

す。会員数は七七二人で、相互の親睦を図り、毎年、支部総会や「ちいさなつどい」(親睦会)を開催しています。

できるだけ多くの卒業生の皆さんに関心を持っていただけるように心がけ、世界遺産「高野山」や「熊野



「ちいさなつどい」



支部のつどい(Getwill 日本塾)

ルス感染症の蔓延によって、設立総会が延期となり出鼻を挫かれた形となりましたが、コロナ終息後には設立総会を開催するとともに、LINEなどを活用して世代を超えた会員の輪を広げていきたいと考えております。

九州支部

九州支部は、一九九四(平成六)年に発足しました。福岡在住の卒業生を中心に、九州各県の出身者・在住者が六月の第一土曜日に集まり、総会と集いを開催し、交流を深めてお



総会&集い(ホテルクリオコート博多)

ります。

遠く大阪を離れ、追手門学院大学の名前を聞く機会が少なくなるなか、大阪弁の懐かしさや、創立者高島鞆之助先生の誕生記念碑清掃奉仕を通じて母校の思い出や近況を話す機会として、毎年楽しみなひと時であります。

本年二〇二二(令和三年)に支部結成二七周年を迎えます。

大分市で次回開催を予定しております総会&集いにぜひ皆様のご参加を願っております。お待ちしております。

沖縄支部

沖縄支部は、二〇一五(平成二七年五月)に発足しました。

少人数の会員であり、現在の活動は沖縄支部総会のみとなっております



公式キャラクター「おうでもん」とともに



総会&集い(ダイワロイネットホテル)

ですが、沖縄会員以外の方でも転勤にて沖縄に居住している方の参加もあります。

今後、会員増加で参加人数が増えたら忘年会等を開催し、沖縄の観光に繋がるような活動をしていきたいと思っています。

CHINA支部

CHINA支部は二〇一〇(平成二二年)に上海で開催された「卒業中国人留学生同窓会」として発足し、二〇一九(平成三一年)に正式公認された校友会海外支部の第一号で、追手門という繋がり、中国在住の大学卒業生の集まりです。

CHINA支部は、年一回の支部総会、年数回の集いを開催する予定です。支部活動の目的はもちろん「校友相互の親睦を図る」ため、食事を楽しみながら、支部活動の報告、中国の話題、大学の話題、ビジネスの話題等さまざまな話題で盛り上がります。当然社会人の方が多いため、それぞれの仕事の意見・情報交換等を行うことにより、お互いのビジネスにも役立ちます。

基本的に校友の方が、CHINA支部に参加して、「楽しかった」「良かった」「役に立った」「助かった」等、極々単純に喜んでいただくことを目的に運営しています。校友の方は、お気軽にご参加ください。



支部成立の準備懇親会(上海)

学生県人会

学生県人会は、さまざまな都道府県出身の学生が集まり、学部・学年に関係なく交流できるコミュニティです。これまで、観光マップ作り、地方からの新入生と在学生が繋がることを目的とした「Welcome to 追大」を開催してきました。活動を行う際には、学生が一人でも多くの人と繋がることができ、参加してよかったと思うというのを目的としています。そのほかにも、各支部の集いに参加しています。ここでは、大学生活を送っているだけ



Welcome to 追大



観光マップ

では聞けない話を聞けるため、自分が社会に出たときに役立つスキルやマナー、価値観などを吸収し、次に繋げていきます。

今後は、さらに活動の幅を広げ、追大生に「学生県人会」を知ってもらえるようにしていきます。

体育文化OB・OG連合会

体育文化OB・OG連合会は、各クラブOB・OG会の結束と会員相互の発展、クラブの健全で安心・安全な活動の支援を目的に二〇一五(平成二七年)に発足しました。活動としてはクラブの情報発信、応援グッズの作成、現役生試合の応援、



スタンドでの応援風景(秩父宮ラグビー場)



女子ラグビー



体育文化OB・OG連合会の応援幕

歴代正副会長および会員数の推移

歴代正副会長						
年	会長		副会長			
1971(昭和46年)	関 謙二(1)	中尾 八朗(1)	園山 和彦(1)			
1972(昭和47年)	関 謙二(1)	中尾 八朗(1)	園山 和彦(1)			
1973(昭和48年)	この間は会長・副会長を置かず常任理事会の集団体制で運営(常任理事会議長 鶴 毅)					
1974(昭和49年)						
1975(昭和50年)						
1976(昭和51年)						
1977(昭和52年)						
1978(昭和53年)						
1979(昭和54年)						
1980(昭和55年)						
1981(昭和56年)	関 謙二(1)	鶴 毅(1)	佐藤良和(院1)	立石多一郎(2)	蟻柴 潤一(5)	
1982(昭和57年)	関 謙二(1)	鶴 毅(1)	佐藤良和(院1)	立石多一郎(2)	蟻柴 潤一(5)	
1983(昭和58年)	関 謙二(1)	鶴 毅(1)	佐藤良和(院1)	立石多一郎(2)	蟻柴 潤一(5)	
1984(昭和59年)	関 謙二(1)	平野 昌雄(1)	立石多一郎(2)	蟻柴 潤一(5)		
1985(昭和60年)	関 謙二(1)	平野 昌雄(1)	鶴 毅(1)	大橋 陽一(2)		
1986(昭和61年)	関 謙二(1)	平野 昌雄(1)	鶴 毅(1)	大橋 陽一(2)		
1987(昭和62年)	関 謙二(1)	平野 昌雄(1)	鶴 毅(1)	大橋 陽一(2)		
1988(昭和63年)	関 謙二(1)	平野 昌雄(1)	鶴 毅(1)	大橋 陽一(2)		
1989(平成 1 年)	関 謙二(1)	平野 昌雄(1)	大橋 陽一(2)			
1990(平成 2 年)	関 謙二(1)	平野 昌雄(1)	大橋 陽一(2)			
1991(平成 3 年)	関 謙二(1)	平野 昌雄(1)	大橋 陽一(2)			
1992(平成 4 年)	関 謙二(1)	平野 昌雄(1)	大橋 陽一(2)			
1993(平成 5 年)	関 謙二(1)	平野 昌雄(1)	岡田 惇(1)	大橋 陽一(2)	小坂井俊夫(2)	
1994(平成 6 年)	関 謙二(1)	平野 昌雄(1)	岡田 惇(1)	大橋 陽一(2)	小坂井俊夫(2)	
1995(平成 7 年)	関 謙二(1)	平野 昌雄(1)	岡田 惇(1)	大橋 陽一(2)	小坂井俊夫(2)	
1996(平成 8 年)	関 謙二(1)	平野 昌雄(1)	岡田 惇(1)	大橋 陽一(2)	小坂井俊夫(2)	
1997(平成 9 年)	平野 昌雄(1)	岡田 惇(1)	大橋 陽一(2)	小坂井俊夫(2)	下村 忠功(6)	
1998(平成10年)	平野 昌雄(1)	岡田 惇(1)	大橋 陽一(2)	小坂井俊夫(2)	下村 忠功(6)	
1999(平成11年)	平野 昌雄(1)	岡田 惇(1)	大橋 陽一(2)	小坂井俊夫(2)	下村 忠功(6)	
2000(平成12年)	平野 昌雄(1)	大橋 陽一(2)	小坂井俊夫(2)	下村 忠功(6)		
2001(平成13年)	小坂井俊夫(2)	大橋 陽一(2)	佐々 進一(4)	下村 忠功(6)		
2002(平成14年)	小坂井俊夫(2)	大橋 陽一(2)	佐々 進一(4)	下村 忠功(6)		
2003(平成15年)	小坂井俊夫(2)	大橋 陽一(2)	佐々 進一(4)	下村 忠功(6)		
2004(平成16年)	小坂井俊夫(2)	大橋 陽一(2)	佐々 進一(4)	下村 忠功(6)		
2005(平成17年)	平野 昌雄(1)	大橋 陽一(2)	蟻柴 潤一(5)	下村 忠功(6)		
2006(平成18年)	平野 昌雄(1)	大橋 陽一(2)	蟻柴 潤一(5)	下村 忠功(6)		
2007(平成19年)	平野 昌雄(1)	大橋 陽一(2)	蟻柴 潤一(5)	下村 忠功(6)		
2008(平成20年)	平野 昌雄(1)	大橋 陽一(2)	蟻柴 潤一(5)	下村 忠功(6)		
2009(平成21年)	平野 昌雄(1)	大橋 陽一(2)	蟻柴 潤一(5)	下村 忠功(6)		
2010(平成22年)	平野 昌雄(1)	大橋 陽一(2)	蟻柴 潤一(5)	下村 忠功(6)		
2011(平成23年)	平野 昌雄(1)	大橋 陽一(2)	蟻柴 潤一(5)	下村 忠功(6)		
2012(平成24年)	平野 昌雄(1)	大橋 陽一(2)	蟻柴 潤一(5)	下村 忠功(6)		
2013(平成25年)	林田 隆行(2)	生川紳一郎(6)	賛田 肇(6)	吉田 浩幸(6)		
2014(平成26年)	林田 隆行(2)	生川紳一郎(6)	賛田 肇(6)	吉田 浩幸(6)		
2015(平成27年)	林田 隆行(2)	生川紳一郎(6)	賛田 肇(6)	吉田 浩幸(6)		
2016(平成28年)	林田 隆行(2)	生川紳一郎(6)	賛田 肇(6)	吉田 浩幸(6)		
2017(平成29年)	林田 隆行(2)	永井 秀明(5)	生川紳一郎(6)	吉田 浩幸(6)	野出 靖宏(14)	
2018(平成30年)	林田 隆行(2)	永井 秀明(5)	生川紳一郎(6)	吉田 浩幸(6)	野出 靖宏(14)	
2019(令和元年)	林田 隆行(2)	永井 秀明(5)	生川紳一郎(6)	吉田 浩幸(6)	野出 靖宏(14)	
2020(令和 2 年)	藤尾 政弘(8)	前田 順一(3)	生川紳一郎(6)	吉田 浩幸(6)	官浪 伸次(9)	玉井 史郎(22)
2021(令和 3 年)	藤尾 政弘(8)	前田 順一(3)	生川紳一郎(6)	吉田 浩幸(6)	官浪 伸次(9)	玉井 史郎(22)

*1973(昭和48年)から2016(平成28年)までは4年任期、2017(平成29年)からは3年任期

学生会員

入学期	学年	入学年	会員数
52	4年生	2017(平成29年)	1,834
53	3年生	2018(平成30年)	1,745
54	2年生	2019(平成31年)	1,845
55	1年生	2020(令和 2 年)	2,194
計			7,618

大学院生を含む

正会員

卒業期	会員数
1 期	359
2 期	505
3 期	538
4 期	579
5 期	733
6 期	734
7 期	757
8 期	906
9 期	897
10期	916
11期	992
12期	981
13期	918
14期	968
15期	1,024
16期	983
17期	976
18期	1,071
19期	835
20期	903
21期	1,091
22期	1,187
23期	1,165
24期	1,258
25期	1,285
26期	1,321
27期	1,366
28期	1,577
29期	1,357
30期	1,374
31期	1,469
32期	1,567
33期	1,421
34期	1,564
35期	1,578
36期	1,482
37期	1,386
38期	1,355
39期	1,300
40期	1,333
41期	1,357
42期	1,438
43期	1,466
44期	1,409
45期	1,322
46期	1,366
47期	1,309
48期	1,390
49期	1,375
50期	1,464
51期	1,413
計	59,320

*大学院生を含む

特別会員(現・元教職員)

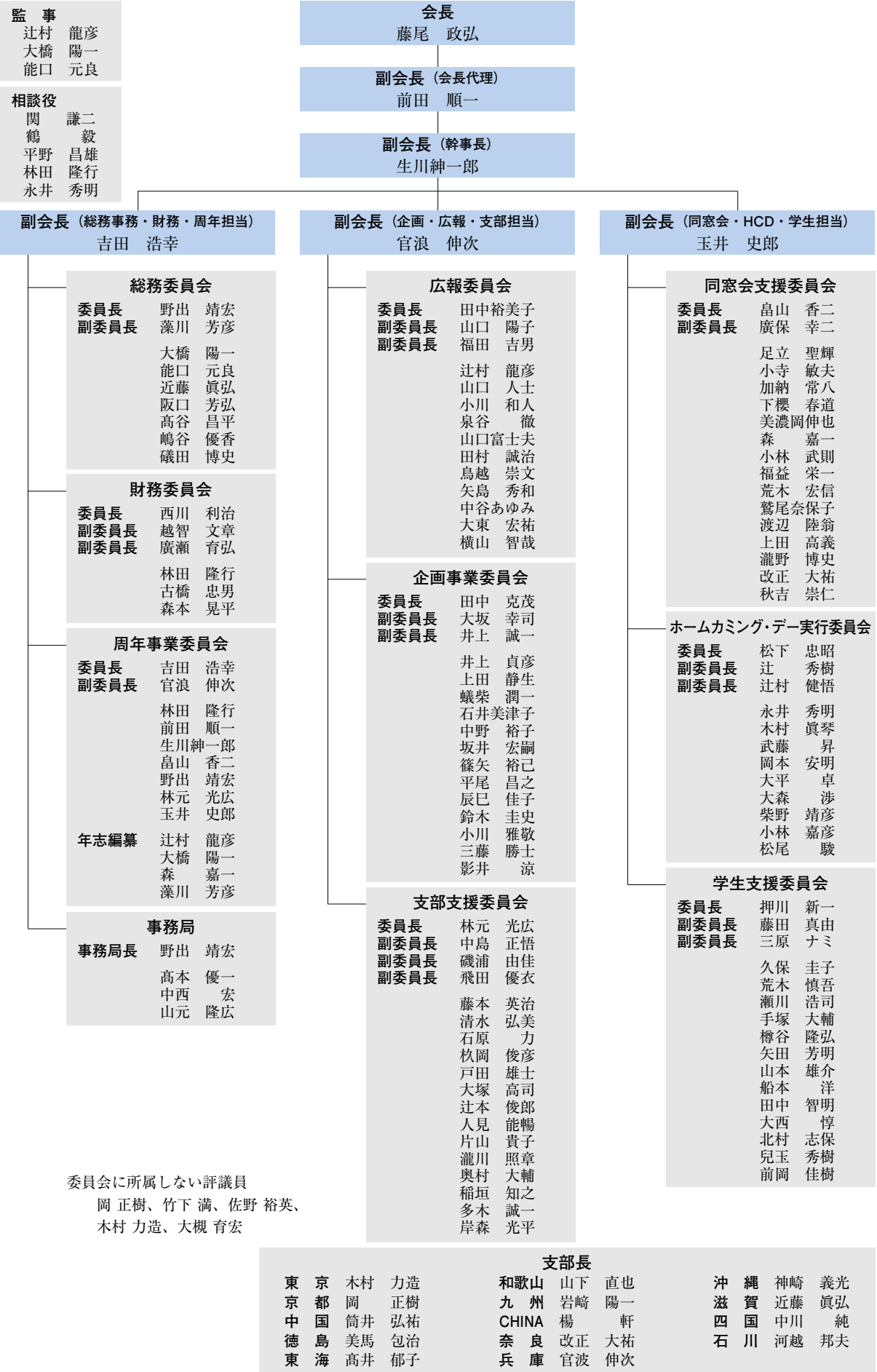
会員数
499

合計 67,437

2021年1月1日現在

校友会組織図

2021年1月現在



追手門学院歌

作詞監修 今中 楓溪
作 詞 八東 周吉
作 曲 高木 和夫

楽譜画像

一、金城の いらかは高く
青空は はてなく広し
相かざす 民主の旗に
新しく 国を築かん
重き責務 心に刻み
健気にも 吾らが学ぶ
栄ある学院
吾らの学院 追手門

二、生駒ねの 狭霧ははれて
旭日かげ 窓べを照らす
高薫る 文化の花に
新しく 国を築かん
うら若き 希望に燃えて
ほがらかに 吾らが学ぶ
栄ある学院
吾らの学院 追手門

三、濠の水 しずかに澄みて
松影を さやかにうつす
とことはの 平和をほぎつ
新しく 国を築かん
高光る 理想を逐いて
つつましく 吾らが学ぶ
栄ある学院
吾らの学院 追手門

課外活動団体等一覧(現在の団体と廃部団体) 2020年12月1日現在

現在活動中の体育系団体	現在活動中の文化系団体
アメリカンフットボール部 合気道部(休部) 空手部 剣道部 硬式庭球部 硬式野球部 ゴルフ部 サッカー部 女子サッカー部 柔道部 少林寺拳法部 スキー競技部 漕艇部 ソフトテニス部 卓球部 日本拳法部 ニューサイクリング部 バスケットボール部 バトミントン部 バレーボール部 ハンドボール部 洋弓部 ヨット部(休部) ラグビー部 女子ラグビー部 男子ラクロス部 女子ラクロス部 陸上競技部	アメリカ民謡研究部 映画研究部シネマクリエイタ 演劇部「劇団飛行船」 華道フラワーアートクラブ ギター部 軽音楽部 考古学研究会 茶道部 児童研究会 社会福祉部 写真部 書道部紫水会 生物部 美術部 ピアノ電子オルガンインストゥルメンタル部 文芸同好会 放送部 マスコミ研究会 落語研究会
廃部となった体育系団体	廃部となった文化系団体
居合道部 オリエンテーリング部 器械体操部 山岳部 射撃部 自動車競技部 水泳同好会 中国武術部 軟式野球部 馬術部 フィギュアスケート部 フェンシング同好会 ボーリング部 ユースホステルクラブ 洋舞同好会 ワンダーフォーゲル部	I.S.A(国際学生会) アマチュア無線部 E.S.S(英語研究部) 囲碁・将棋部 占い研究会(易相学研究会) 英米文学研究会 音楽研究部 合唱愛好会 家庭科クラブ 歌舞伎研究会 魚拓研究会 現代研究会 古典芸能研究部 混声合唱部 新聞部(新聞局) 心理学研究会 自動車研究愛好会 生命哲学研究会 箏曲部 探検部 朝鮮文化研究会 地理歴史研究会 東南アジア研究会 ハンドクラフト部 フォークソング同好会 フォーク同好会 フォークラテングループ 服飾研究会 兵書研究会 弁論部 旅行研究会 レクリエーション研究会 ロックファンクラブ

独立団体
応援団 リーダー部 チアリーディング部 吹奏楽団
校友会
校友会 追風 学部クラス連合 クラブサークル連合 合同学園祭実行委員会
旧校友会 (2017 年まで)
校友会本部 体育会本部 文化会本部 報道会本部 無所属委員会 将軍山祭実行委員会 学生意識委員会(C.S.C) 体育祭実行委員会 アルバム委員会 会計監査委員会 シンポジウム委員会
現活動中のサークル
ANCHOR Dive In Blue Duther's 616 FC.BAMBi FC.liberte SHAKES freedom HIGH CUBE O.S.B. Outdoor Life もみの木 Popping Shower ReaRhythm 純白のアスター Sports Family with Peer Group MADproject Rose Wing ～〇〇の在り方を肯定する会～ 追手門TRPGサークル DJサークル【プリムラ】 漫画研究会シリウス 麺ber's 麺魂～ MEN SOUL ～

順不同

西暦(和暦)		月日	校友会(将軍山会と学生の動き)	学院・大学の動き	月日
1964(昭和39年)	1966(昭和41年)	4 23	第1期生入学式挙行(大阪府立厚生会館)	天野利武先生、学院長に就任	10 16
		6 23	一部のクラブが公認された(公式試合のため)	追手門学院大学開学、天野利武先生学長に就任	1 1
1967(昭和42年)		11 3	大学祭開催	大学章制定	6 1
		4 5	体育系クラブ20団体、文化系クラブ14団体が公認	通学専用道路着工、高等部移転	4 7
		11 2	第1回将軍山祭開催(ゝ4日)	スクールカラーをライトブルーに決定	8 16
1968(昭和43年)		5 10	学友会発足	第1回海外セミナー実施	4 7
		9 30	学生歌決定	体育館兼講堂竣工	18 16
1969(昭和44年)		11 6	追手門学院創立80周年記念式典・大学開学祝賀会に高松宮殿下・妃殿下が大学に御台臨、学生・保護者・教職員臨席	明徳塾竣工	4 15
1970(昭和45年)		3 25	第1期生卒業式挙行、謝恩会(ホテルプラザにて、以後2017年まで続く)	学報発刊(題字天野先生)	9 30
1971(昭和46年)		5 30	山桜会大学部会として同窓会「将軍山会」発足。関謙二、会長に就任	研究棟竣工	6 12
1972(昭和47年)		11 15	機関紙「将軍山会報」創刊号発刊	卒業生父母の会発足	4 11
1973(昭和48年)		3 21	ハワイツアーを主催(ゝ16日)	スクールバス発着が摂津富田から茨木に変更	10 8
1974(昭和49年)		5 22	会計事務(会費納入・支払い)についての申し合せ事項を大学事務局と調印	日印学生交換制度開始	11 2
1975(昭和50年)		6 22	学友会との協定事項が決定し、学友会と協定に調印	3号館竣工	12 4
1976(昭和51年)		11 21	総会・親睦会開催(ロイヤルホテル)		
		4 8	日本文化研修道場(松頼庵)建設に伴い助成		
		10 1	大学開学10周年記念、会員名簿の発行(山桜会)		
		11 12	将軍山会旗決定		
1977(昭和52年)		3 25	開学10周年記念祝賀総会(ロイヤルホテル)		
		10 14	新会員に大学卒業記念品卒業証書入れの筒を贈る		
1978(昭和53年)		1 17	学生会館竣工に伴い「デジタル時計」を寄贈(大ホールのロビー壁画の図案を美術部が作成)		
		11 12	第1期生の宮本輝氏(本名・宮本正仁)が第78回芥川賞受賞		
		7 26	第7期生の円広志氏(本名・篠原義彦)が「夢想花」で第9回世界歌謡祭グランプリ受賞		
1980(昭和55年)		11 26	追手門学院創立90周年記念将軍山総会、200人余参集		
		7 12	新入会員歓迎会・総会開催(ホテル・ドゥ・スポーツプラザ)		
1981(昭和56年)		12 15	大学初代学長、天野利武先生逝去		
		7 12	将軍山会結成10周年記念総会		
1982(昭和57年)		11 3	第15回将軍山祭に参加、「文学講演と映画の午後」実施		
1983(昭和58年)		10 31	天野利武先生の肖像画を大学へ寄贈する(学長室に、現在は将軍山会館に展示)		
		6 6	山桜会からの分離・独立にかかる会則の改正、本会総会で公表		
1984(昭和59年)		4 1	追手門学院山桜会大学部会同窓会将軍山会を追手門学院大学校友会に名称変更		
1985(昭和60年)		4 1	追手門学院大学校友会将軍山会を追手門学院大学校友会とし、将軍山会を愛称とする		
1986(昭和61年)		10 18	創立20周年記念祝賀会を開催し、左記記念事業を行う ・会員名簿発行(第1号) ・初代学長天野先生顕彰の碑建立(10月18日除幕式) ・20周年記念シンボルマークの策定 大学創立20周年記念祝賀会を開催(体育館)		
1987(昭和62年)		10 18		会員名簿(第1号)	2 20
		6 22	校友会が学友会と大学執行部で懇親会開催(千里阪急ホテル)		
1989(平成元年)		12 10	日本拳法部、全日本学生拳法選手権大会で優勝		
1990(平成2年)		10 13	上海師範大学校友会に交流視察(10月13日ゝ15日)		
1991(平成3年)		3 1	会員名簿を発行(第2号) 造幣局製のブロンズ賞牌を作成し、卒業生に贈呈(卒業証書入れの筒に代えて) 上海師範大学校友会代表团が校友会の招きで訪日(ゝ26日) 開学25周年記念講演会 ・竹村健一先生講演会(茨木市民会館「新しい世界と日本」) 東京支部が発足 中国四国支部発足 九州沖縄支部発足 阪神・淡路大震災見舞いの校友会会報号外発行 被災者再起復興支援義援金募金活動開始 ホームカミング・デーを大学と共催		
1993(平成5年)		3 14			2 1
1994(平成6年)		2 26			3 1
1995(平成7年)		2 10			4 1
		11 3	阪神大震災復興支援義援金の使途決定、半額を会員被災者、半額を毎日新聞社大阪社会事業団(阪神大震災こども義援金)へ寄付 「被災者孤児遺子支援義援金」募金活動継続決定 東海支部発足 創立30周年記念建設の5号館に「太陽電池時計塔」寄贈 大学創立30周年記念総会および懇親会開催(帝国ホテル大阪)		
1996(平成8年)		1 7			3 3
		5 6			4 1
		3 22			4 1
		2 25			1 1
		4 1			12 25
1997(平成9年)		4 1	平野昌雄、会長に就任		
1998(平成10年)		5 1	大学の留学生新人歓迎会をバスツアーとして開催 会員名簿を発行(第3号) 上海師範大学並びに附属上海実験学校の教員・学生・児童による特別編成の「中国伝統古典民族楽器演奏団」を迎え、演奏会開催 新食堂棟竣工に伴い世界時計(ウエーブ・トウ・ザ・ワールド)と命名を寄贈設置 第33期生の巽樹里氏が、シドニーオリンピックシンクロナイズドスイミングで銀メダル獲得		
1999(平成11年)		7 1			6 15
		11 4			7 25
2000(平成12年)		9 13			4 1
		9 29			1 1
2001(平成13年)		4 1			10 1
		8 27			4 1
2003(平成15年)		1 10	体育館のリニューアルに伴い緩帳と防球ネットを寄贈したことにより、学長より感謝状授与、天神祭追手門学院奉拝船に助成 左記3項目が理事会にて承認 1. 校友会館の建設 2. 校友会を有限中間法人として公式登録 3. ホームページの開設 第33期生の巽樹里氏が、アテネオリンピックシンクロナイズドスイミングで銀メダル獲得		
2004(平成16年)		7 14			11 10
		3 3			3 28
2005(平成17年)		4 1	「宮本輝ミュージアム構想」の発表に伴い、協賛金募金活動開始 平野昌雄、会長に就任 学院創立120周年記念事業のグラウンド・駐車場整備に伴い、「時計」を再設置 ホームページ開設 新入生に宮本輝氏著書「青が散る」文庫本を入学記念品として進呈(以後2019年度卒業生まで)		
2006(平成18年)		4 1			3 11

西暦(和暦)	月日	校友会(将軍山会)と学生の動き	学院・大学の動き	月日
2006(平成18年)	5 27	創立40周年記念「宮本輝ミュージアム開設1周年記念イベント」開催 宮本輝氏と映画監督小栗康平氏対談「泥の河を語る」、映画「泥の河」上映会 心理学部・社会学部の支援同窓会設立 毎日新聞大阪社会事業団に震災遺児奨学金として135万6207円を寄託 校友会館の建設が役員会にて決定	10 6 学院創立120周年・大学創立40周年記念講演会(デューク更家氏、東田寿和氏) 学院創立120周年・校友会山校友会90周年記念コンサート開催	
2007(平成19年)	12 12	中央棟・6号館竣工に伴い「独立自強」優勝ホール」の銘板を寄贈設置 卒業記念品(入会記念)として「卒業アルバム」を贈呈(ブロンズ賞牌より変更) 校友会館建設にかかる覚書調印式(建設費相当額2億円を寄付) 校友会館の名称「将軍山会館」に決定	1 1 大学のロゴマーク導入(2008年4月から学院のロゴマークとして使用) 大学創立40周年記念式典(学生会館) 大阪城スクエア竣工式挙行 学院創立120周年記念式典(大阪城ホール)	
2008(平成20年)	6 28	校友会館(将軍山会館)竣工、祝賀会にて宮本輝氏挨拶、大学より竣工祝いとして「青が散るによせて」(坂上楠生作)の絵画を贈呈される	4 3 学院創立40周年記念式典(学生会館) 大阪城スクエア竣工式挙行 学院創立120周年記念式典(大阪城ホール)	
2009(平成21年)	6 5	大学が「追手門学院大学アワー」として各地で講演会を開催 新1号館の竣工記念として「カリヨン12ベルモニュメント」を贈呈、愛称、「なごみの鐘」	4 1 日本私立協会を退会し、日本私立大学連盟に加盟 新1号館竣工 ガンバ大阪とパートナーシップ協定締結 グラウンド、人工芝化 上海万博・追手門学院ウィーク開催	
2010(平成22年)	2 14	京都支部設立 会報第69号よりカラー紙面に 校友会メールマガジン発行、登録受付開始 中国四国支部が中国支部と四国支部に分離 大学が卒業生向け情報誌「a i」を創刊、第70号会報に同封 大学と上海師範大学が提携調印	2 19 ガンバ大阪とパートナーシップ協定締結 グラウンド、人工芝化 上海万博・追手門学院ウィーク開催	
2011(平成23年)	6 5	宮本輝氏「泥の河文学碑」が卒業生の有志により大阪中之島に建立 高島鞆之助賞を宮本輝氏(1期生・作家)、中西大輔氏(23期生・冒険家)が受賞 中国四国支部から分離後、初の四国支部総会	3 1 自校教育テキスト「追手門の歩み1世紀をこえて」発行 高島鞆之助賞制定 大学創立45周年記念事業「追手門の教育ルネサンス」これからの総合教養教育をめざして」第1回講演会(内田樹氏) 大学創立45周年記念事業第2回講演会(猪木武徳氏) 大学創立50周年記念ロゴマーク決定 大学広報誌「BRIDGE」創刊 追手門学院大学出版会設立 基盤教育機構設置 地域文化創造機構「連携考房 童子」開設	
2012(平成24年)	2 25	本学で初めての学生FDサミット2012冬開催 還暦同窓会開催(以後毎年開催)	1 26 大学創立45周年記念事業第2回講演会(猪木武徳氏) 大学創立50周年記念ロゴマーク決定 大学広報誌「BRIDGE」創刊 追手門学院大学出版会設立 基盤教育機構設置 地域文化創造機構「連携考房 童子」開設	
2013(平成25年)	2 15	校友会会員名簿データを学院統合データベースにて管理・保全する覚書に調印 林田隆行、会長に就任 フェリスブックテスト運用開始 将軍山会館1階ホールにオーストラリア製の半自動演奏ピアノが寄贈される 高島鞆之助賞を藤尾政弘氏(8期生・フジオフードグループ本社代表取締役)が受賞 学友会と協働でJR茨木駅・阪急茨木市駅周辺の清掃活動実施 ホームカミング・デーに合わせて校友大会と大同窓会開催 黒岡義一氏(18期・文学部 講演会「大川の歴史と大阪城」その後「大川を夜桜クルージング」を開催 第1回「支部長会議」開催 地方出身学生を支援することを目的に、第1回「追大生県人会の集い」開催 大学共催「ホームカミング・デー懇親会」が今回より校友会主催となる ホームページリニューアル発表 「校友会ハンドブック」発行	3 1 トレーニングセンター竣工 「会う手門DAY」開催 大学50周年記念事業「追手門ダンス表現フェスティバル」(学生会館)開催 地域創造学部設置 オーストラリア研究所を改めオーストラリア・アジア研究所設置 伊丹市教育委員会と連携協定締結 地域支援心理研究センター附属「心のクリニック分室」開設 和歌山県田辺市と連携協定締結 笑学研究所設置	
2015(平成27年)	3 1	「校友会ハンドブック」発行 体育・文化OBOG連合会発足 「大川さくらクルーズ」開催 女子ラグビー(7人制)全国優勝 沖繩支部設立 将軍山会館にて「恋の歌を七夕短冊に」を開催 和歌山支部設立 学院創設者高島鞆之助先生の没後100周年記念募参会 滋賀支部設立 公認会計士・税理士の会「追大会計人会」設立発起会	4 1 オーストラリア研究所を改めオーストラリア・アジア研究所設置 伊丹市教育委員会と連携協定締結 地域支援心理研究センター附属「心のクリニック分室」開設 和歌山県田辺市と連携協定締結 笑学研究所設置	
2016(平成28年)	4 10	「大川さくらクルーズ」を山校友会と共催にて開催 初代学長天野利武先生募参会を実施、さくら坂再生プロジェクトに「桜の木」支援(500万円 植樹除幕式) 創立50周年記念式典にて、卒業生の宮本輝氏(1期生)と藤尾政弘氏(8期生)に「榮譽フェロー」の称号が授与される 大学創立50周年記念祝賀会を大学と共催で開催(リーガロイヤルホテル) 高島鞆之助賞を西上政章氏(5期生・通天閣観光会長)が受賞 「校友会会報」と「mon(学院と卒業生をつなぐコミュニケーションマガジン)」が連携。第82号より年一回合併号として発刊 活躍する卒業生紹介、交遊誌「mon(リンカ)」創刊 大学創立50周年記念、校友大会ホームカミング・デー開催 大学創立50周年記念ゴルフコンペ 兵庫支部設立 「将軍山奨学金」第一期生授賞式 事務局が大阪城スクエア(大手前校地)に移転、学院に校友課が発足 奈良支部設立 大学生の自治組織学友会を再編、新学友会「追風」設立	3 31 『追手門学院大学五十年志』発刊 大学創立50周年記念式典(グランフロント大阪) 宇治市と観光振興に関する協定締結 橿原市と包括的連携協定締結 和歌山県と就職支援協定締結 滋賀県と就職支援協定締結 門真市との連携協定締結 新しい学友会「追風」第1回総会 追手門学院ちやまちキャンパス開催 愛媛県と就職支援協定締結 学院創立130周年記念式典(大阪城ホール) 京都府と就職支援協定締結	
2018(平成30年)	1 15	総持寺キャンパス大学棟建設にかかる覚書調印式(図書館建設相当額5億円を寄贈) 在校生を校友会の学生会員にする 創立130周年記念クルーズ「夜桜クルーズ」を開催 新キャンパス「アカデミックアーク」の中核施設となるアラムナイ(校友)図書館建設に伴い、学院より感謝状授与 入会記念品としての「卒業アルバム」を2018年度卒業生よりデジタル版として配布 新入生を迎える「学生県人会」の開催 新キャンパスにてホームカミング・デーを開催、「宮本輝氏(1期生)と真銅副学長の対談」を実施 高島鞆之助賞を三谷龍二氏(5期生・木工デザイナー)が受賞 徳島支部設立 山校友会・大学校友会共催で「追手門ファミリアBBQ」開催 石川支部設立 CHINA支部設立 大学と中高の「合同学園祭」に校友会が参加 東京就活ツアー開催、東京支部へ就活生40人訪問 「会報縮刷版」の発行(1号・90号)(2020号・4号) 宮本輝氏と真銅副学長の「対談集」の発行 藤尾政弘、会長に就任 校友会公式LINEを開設 新型コロナウイルス感染症対策臨時基金の寄付に関する合意書に調印 新型コロナウイルス感染症対策臨時基金に1億円を寄付とケース付きマスク1万3000枚の贈呈式 初代学長天野利武先生没後40年募参会(勝尾寺) 日本経済新聞に会長と学長の対談と名刺広告を掲載 第13期生のIBMフェロー 浅川智恵子氏が日本科学未来館館長に就任 『校友会五十年志』の発行	1 23 宇治市と観光振興に関する協定締結 橿原市と包括的連携協定締結 和歌山県と就職支援協定締結 滋賀県と就職支援協定締結 門真市との連携協定締結 新しい学友会「追風」第1回総会 追手門学院ちやまちキャンパス開催 愛媛県と就職支援協定締結 学院創立130周年記念式典(大阪城ホール) 京都府と就職支援協定締結	
2019(平成31年)	3 30	新入生を迎える「学生県人会」の開催 新キャンパスにてホームカミング・デーを開催、「宮本輝氏(1期生)と真銅副学長の対談」を実施 高島鞆之助賞を三谷龍二氏(5期生・木工デザイナー)が受賞 徳島支部設立 山校友会・大学校友会共催で「追手門ファミリアBBQ」開催 石川支部設立 CHINA支部設立 大学と中高の「合同学園祭」に校友会が参加 東京就活ツアー開催、東京支部へ就活生40人訪問 「会報縮刷版」の発行(1号・90号)(2020号・4号) 宮本輝氏と真銅副学長の「対談集」の発行 藤尾政弘、会長に就任 校友会公式LINEを開設 新型コロナウイルス感染症対策臨時基金の寄付に関する合意書に調印 新型コロナウイルス感染症対策臨時基金に1億円を寄付とケース付きマスク1万3000枚の贈呈式 初代学長天野利武先生没後40年募参会(勝尾寺) 日本経済新聞に会長と学長の対談と名刺広告を掲載 第13期生のIBMフェロー 浅川智恵子氏が日本科学未来館館長に就任 『校友会五十年志』の発行	1 30 英本市議会と連携協定締結 香川県と就職支援協定締結 追手門学院大学新キャンパスオープン(茨木総持寺キャンパス)開設 新キャンパス竣工式、祝賀会開催	
2019(令和元年)	6 30	新キャンパスにてホームカミング・デーを開催、「宮本輝氏(1期生)と真銅副学長の対談」を実施 高島鞆之助賞を三谷龍二氏(5期生・木工デザイナー)が受賞 徳島支部設立 山校友会・大学校友会共催で「追手門ファミリアBBQ」開催 石川支部設立 CHINA支部設立 大学と中高の「合同学園祭」に校友会が参加 東京就活ツアー開催、東京支部へ就活生40人訪問 「会報縮刷版」の発行(1号・90号)(2020号・4号) 宮本輝氏と真銅副学長の「対談集」の発行 藤尾政弘、会長に就任 校友会公式LINEを開設 新型コロナウイルス感染症対策臨時基金の寄付に関する合意書に調印 新型コロナウイルス感染症対策臨時基金に1億円を寄付とケース付きマスク1万3000枚の贈呈式 初代学長天野利武先生没後40年募参会(勝尾寺) 日本経済新聞に会長と学長の対談と名刺広告を掲載 第13期生のIBMフェロー 浅川智恵子氏が日本科学未来館館長に就任 『校友会五十年志』の発行	1 15 追手門学院大学新キャンパスオープン(茨木総持寺キャンパス)開設 新キャンパス竣工式、祝賀会開催	
2020(令和2年)	2 1	「会報縮刷版」の発行(1号・90号)(2020号・4号) 宮本輝氏と真銅副学長の「対談集」の発行 藤尾政弘、会長に就任 校友会公式LINEを開設 新型コロナウイルス感染症対策臨時基金の寄付に関する合意書に調印 新型コロナウイルス感染症対策臨時基金に1億円を寄付とケース付きマスク1万3000枚の贈呈式 初代学長天野利武先生没後40年募参会(勝尾寺) 日本経済新聞に会長と学長の対談と名刺広告を掲載 第13期生のIBMフェロー 浅川智恵子氏が日本科学未来館館長に就任 『校友会五十年志』の発行	1 5 新グラウンド竣工 『追手門学院130年志』発刊	
2021(令和3年)	4 1	新型コロナウイルス感染症対策臨時基金の寄付に関する合意書に調印 新型コロナウイルス感染症対策臨時基金に1億円を寄付とケース付きマスク1万3000枚の贈呈式 初代学長天野利武先生没後40年募参会(勝尾寺) 日本経済新聞に会長と学長の対談と名刺広告を掲載 第13期生のIBMフェロー 浅川智恵子氏が日本科学未来館館長に就任 『校友会五十年志』の発行	1 1 心理学部に人工知能・認知科学専攻の設置	

校友会は、一九七二（昭和四六）年に追手門学院山桜会の大学部会同窓会「将軍山会」としてスタートし、その後 独立を経て二〇二二（令和三年）で結成五〇年を迎えました。

その記念事業の一つとして本志の発行が企画されました。結成から今日までのあゆみを振り返ってみますと、実にさまざまなことがあったことが良く分かりました。本会はその経験を糧として成長してきたと思います。

英木安威キャンパス中央棟の一階ロビーに校友会から寄贈した銘板が掲げられています。初代学長の天野先生の書「博学之 審問之 慎思之 明弁之 篤行之」『礼記』(中庸篇)であります。この意味は、「何事でも広く学んで知識をひろめ、詳しく綿密に質問し、慎重にわが身について考え、明確に分析して判断し、丁寧に行き届いた実行をする。」ということ です。私たちは、このように学ぶことの尊さを追手門学院大学で習得しました。今後もこの具現化に向かって、生涯にわたり学び続けていきます。そして、学院の教育理念である「独立自彊・社会有為」という言葉も忘れることはありません。

歴史を積み重ねて来たのも「人」です。そして、次の歴史を積み重ねるのも「人」です。この記念志の上梓が、校友会を受け継ぎ発展させていくであろう次の世代への「バトン」となることを祈念します。

『五十年志』の発行にあたっては、辻村龍彦（一期生）、大橋陽一（二期生）、吉田浩幸（六期生）、森嘉一（七期生）、藻川芳彦（八期生）の五名が、周年事業委員会の年志編集チームとして三年間にわたり編集に携わってきました。

編集作業にあたっては、学院職員の小倉久美子（学院志研究室）、石井恵子（初等中等課）、谷ノ内識（広報課）の各氏に、数々の写真や資料の提供等でお力添えをいただきました。また、追手門学院校友課、学生支援課、株式会社エトレ 周年事業室・西村デザイン事務所のスタッフの皆様には一方ならぬお世話になりました。最後に、発行に際してご協力いただいたすべての皆様に心より感謝申しあげます。

副会長兼周年事業委員長 吉田 浩 幸

追手門学院大学校友会五十年志	
発 行 日	2021 (令和3) 年6月1日
発 行	追手門学院大学校友会 [®]
事 務 局	〒540-0008 大阪市中央区大手前1丁目3番20号 (追手門学院 大阪城スクエア)
	【大学所在地】 〒567-8502 大阪府茨木市西安威2丁目1番15号 (英木安威キャンパス) 〒567-0013 大阪府茨木市太田東芝町1番1号 (英木総持寺キャンパス)
編 集	追手門学院大学校友会 周年事業委員会 年志編集チーム
制 作	株式会社 エトレ
印刷・製本	大興印刷株式会社